

---

# Elona × ポケモン（改訂版）

（黒）大豆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Elonax ポケモン（改訂版）

### 【Nコード】

N1233Y

### 【作者名】

（黒）大豆

### 【あらすじ】

あだ名がレッドの少年は、祖父の改造したゲームのテストプレイを頼まれる。ポケモンをベースにしたヴァーチャルリアリティゲームだということで楽しみにしていたのだが、入ってみればそこにはカオスな世界が広がっていた。レッドは戸惑いながらも、ゲームクリアを目指して旅に出る。

「Elonax ポケモン イロモン」の改訂版です。ポケモン初代とElonaxを知らない人には意味不明な単語が出てくる可能性があります。

## ブローグ

レッドは困っていた。レッドというのは由来も思い出せない彼のあだ名で、本名はもちろん違うがそれはさて置き。

レッドはとても学生らしい問題に直面していた。

高校生になって最初の中間考査が明日に迫っているのだ。しかし彼はまるで勉強をしていない。嫌なことを後回しにし過ぎてこんな感じになった。

このままでは悲惨な点数になることが簡単に想像できる。それはすなわちお小遣いが半分になるということだ。

どうにかしたいのだが現実はいつも厳しい。時が刻々と過ぎていくのを感じつつ、教科書にかじりついて悪あがきをしている最中だった。

レッドが居るのは祖父の研究所であった。

祖父は凡才だが興味と根気が並はずれている類の人間だった。若い頃に稼いだ金を使って、今は研究所と称した一軒家で怪しげなことをやっている。

研究所には新旧入り混じった様々なゲームの筐体とソフトが置いてあるのでレッドのお気に入りの場所だった。最近ハマっているのは15年前に発売が中止された任天堂64である。荒いポリゴンが逆に新鮮だった。

研究所のソファで落ち込んでいるレッドの後ろを、「入室禁止」と書かれたプレートがかかっている部屋から出てきた祖父が通りかかった。孫がゲームを起動していないどころか勉強をしているという珍事に、祖父は驚く。

「どうしたレッド。ゲームに飽きたのか？」

「それはない。それはないよお爺ちゃん。僕だって時には勉強するってことだけだよ」

レッドの反論に、老人は安堵のため息を吐き、豊かな顎鬚を揺らした。

「それは良かった。レッドには是非テストプレイを頼みたいゲームがあるのだ」

「え」

「さっき完成したばかりでな。やってくれるか？」

その言葉にレッドは顕著に反応した。

祖父はゲームを改造することがたまにあった。その中にはたまにとっても面白いものがあるのだ。恐らく変態的に細部まで作りこむことがその要因だろう。

しかも今回、祖父は長い間入室禁止の研究室に籠っていた。ヴァーチャルリアリティゲームを改造している、との言質もとつてある。つまりレッドはとても期待していたのだ。

やりたい。レッドのペンを持つ手が止まった。

しかしテストが！ レッドの理性が叫ぶ。そこに祖父が悪魔の言葉を囁いた。

「それほど長くはかからん。夕飯までには終わるだろう。何せ

「ほ、本当に！？ やります！」

祖父に最後まで言わせず、レッドは飛び上がった。そう、勉強など夕飯の後でもできるではないか。

レッドは割とダメな高校一年生だった。

「そうか。では頼むでしょう」

祖父に連れられ入室禁止の部屋に入り、VRゲーム用の半透明の楕円球体、いわゆるポットにレッドは横たわる。

「今度は何のゲームなの」

「ポケモンの初代と他のゲームを混ぜた。恐らくお前は知らないゲームだ」

「ポケモン？ それって夕飯までに終わらないんじゃない？」

現在の時刻は15:12。ポケモンはそんなに早くクリアできるゲームじゃない。祖父は分かっているという風にならずいた。

「問題ない。中の時間は9000倍に加速される。一年過ごしてようやく一時間ほどだな」

「あの… 僕が廃人になりそうです」

VRゲームのソフトだけでなく筐体にも手を加えているらしい。

「私も中で2年ほど過ごしてみたが、この通り問題はない。身体能

力が変化するゲームではないからな。クリアした後出れるようにしておくから、楽しんでこい」

クリアに手間取ったら精神的に老けそうである。クリアする前に強制的に止めさせられるよりはましだろうか。

ポットの中が暗転し、レッドの首筋に電極が触れる。レッドの意識は暗転した。

「うっ…」

そして目覚める。見慣れない部屋。柔らかいベッドに横たわっていたようだ。頭には野球帽を被っていた。

ここはもうヴァーチャルの世界なのだろう。しかし見分けが全くつかない。窓から見える空や森、レッドの体にもまるで違和感がなかった。

脳内でシステムメッセージが聞こえてくる。

【『ポケモン×E10na』の世界へようこそ。初めに名前を教え

ていた……失礼、すでに入力されておりました。レッド様ですね】

それ僕のあだ名だよおじいちゃん、とレッドは思った。

## 第一話 少女はアピールした

何かを確認するように、システムメッセージは繰り返す。レッドが返事をしなかったからだろうか。

【E10na x ポケモンの世界へようこそレッド様】  
「あ、はい」

それにしても……E10naか。不思議な響きだ。  
祖父の言うとおり、聞いたことのないゲームだ。

【この世界についての説明をお聞きになりますか？】

「あ、お願いします」

むしろ聞かないのはありえないだろう。フンドシー丁で砂漠横断に行くようなものだ。

【承りました。それでは説明させていただきます。以下の内容は、メニュー画面のヘルプより同じものがご覧になれますので、是非ご利用ください】

メニューを開くよう頭の中で念じると目の前に透き通った青いウイ



ンドウが展開される。移動中など、かなり視界の邪魔になることが予想される位置だ。メニューを開くときは立ち止まる必要があるだろう。

指で触り、『ヘルプ』を開く。それを待っていたかのようにメッセージが流れだした。

【この世界は初代ポケモンですが、Elonaのゲームのキャラクターも存在しております。モンスターも同様です。また、Elonaの設定通り、ほとんどの生物をモンスターボールで捕獲可能です。これに伴い、ほとんどの生物にポケモンタイプが設定されております】

「ほとんどの生物っていうと……ないとはおもうけど人間も？」

【人間であろうと、生物には変わりありません。よって質問の答えはYESです】

「YESなの!？」

Elonaってすごいゲームだな……とレッドは戦慄する。

ヘルプには但し書きで、「トレーナー戦中に、相手のモンスターを捕まえることはできません」とある。わざわざ注意することではないような気がするが、初めてポケモンをしたときにジムリーダー戦でモンスターボールを投げたことが思い出され、レッドは懐かしくなった。

システムメッセージはこの世界の注意点を喋り続ける。

睡眠や食事は必要だが、排せつはしなくていいこと。汗は出るが、蒸発すると臭いや垢は残らず、体は清潔に保たれること。外部から汚れをつけられない限り、風呂に入る必要は基本的にないこと。このあたりの配慮は非常に助かる。

ボールでゲットした生物はトレーナーに服従し、死んでもポケモンセンターに行けば元気なモンスターにまた会える。手持ちのモンスターが全滅すれば、レッドは強制的にポケモンセンターへ転移させられる。

また、驚くことにトレーナーといえどもダメージを受ければ死ぬらしい。死ぬといっても疑似的な死で、デスゲームではないようだが。

死んだ場合はポケモンと同じくポケモンセンターで復活する。ペナルティは所持金の半分を喪失。ランダムに所持アイテムが失われることもある。

【レッド様の腕に嵌まっている腕輪がトレーナーの証です。それを見たモンスターは好戦的になり、またトレーナーは腕試しに戦いを仕掛けてくることでしょう。壊すこと、外すことはできませんし、覆い隠しても覆い隠したものに転移します。】

「へえ……」

諸注意を語り続ける声は、ずいぶん人間らしかった。ニュースキ

ヤスターのお姉さんを彷彿とさせる声だ。

最近のＡＩの発展は人間に追いついたという見解もあるほどである。学習によって自我を持つと、人間との見分けがつかなくなる。

その技術はＶＲ内のＮＰＣにもいかなく発揮される。祖父の作りこみ方は尋常ではないので、きっと人間と変わりのないＮＰＣが出てくるに違いない。

所詮ゲームのキャラだと侮っていれば、痛い目にあうだろう。それはＶＲゲームをするうえでの鉄則だ。

【最後に、鞆について説明します。現在学習機の上にある鞆は外のあらゆる刺激から、中の物を守ります。容積は無限で、重量は軽減されます。軽減されても重いと感じるようなら、モンスターに運ばせるなどしてください】

レッド、いつまで寝てるのー？ 今日はおーキド博士に呼ばれてるんでしょー？

システムメッセージが喋り終わると、部屋の扉の外、恐らくは階下から女性の声がした。主人公の母の声だろう。レッドは立ち上がり、部屋を出る。

おっとその前にパソコンの中の『きずぐすり』を取らないとね。

「おお、待っておったぞレッド君」

レッドを出迎えた白髪の老人、オーキド博士は、おおらかな笑顔で奥へと通してくれた。初代のストーリーは、確か草むらに入ろうとしてオーキドに怒られることから始まったと思うのだが、このゲームではその辺が略されているようだ。

オーキド博士の研究所は、外観の割には意外と狭い。物が多いからそう感じるのかもしれない。

色々な計器が乱立している中を通って奥へと進むと、人影がある。前髪がスネオのように重力に逆らった同じ年くらいの少年だった。レッドと同じ年なので、高校生くらいである。レッドと同じく、運動はあまり得意そうでない。

【この少年は、ライバルキャラのグリーンです】

「おそかったなレッド」

システムメッセージが教えてくれた。グリーンは事あることに突っ

かかって来そうなオーラを出していた。

腕を組んでこちらを見ているグリーンの傍らには、モンスターボールが置いてあった。

近くに行ってみると上の赤い部分が透けており、中に入っているモンスターが確認できる。

生ポケモンを初めて見たわけだが、食玩くらいの大きさに縮んでいるので感動はなかった。

ボールの中にはポケモンの原作通り、ヒトカゲ、フシギダネ、ゼニガメ、そして金髪の少女がそれぞれ入っていた。

「ん？」

レッドは瞬きをする。

なぜか四つ目があり、少女が入っていた。全然原作どおりじゃない。少女は髪で目が隠れていて、白いワンピースに身を包んでいた。

他のモンスターは静かにまどろんでいるというのに彼女だけボールの内壁を叩いている。閉じ込められているのだろうか。

（さ、さっそく人間が捕まえられてるじゃないか……）

ビビりつつ彼女のボールを持ってみようとするとかかなり重かった。5キロくらいある。こんなのをベルトに装着するのは無理だ。鞆に放り込むしかないだろう。

「どうした？ 少女が気になるのか？」

「い、いや、逆に聞くけど、君はモンスターボールの中に少女が入

っているのは気にならないの？」

「何がだ？ モンスターがボールに入っているだけじゃないか」

「そ、そうだよな。ハハハ」

すでにレッドの中の常識が崩壊しようとしている。E10naってゲーム、本当にすごいゲームだ。すごくヒドイ。

端の方でこそそやっていたオーキドが、探し物を終えたのかこちらにやって来た。手に持っているのは恐らくポケモン図鑑だろう。

「さあ誰からでもいい。選んでみるのじゃ」

「じゃあお前から選べよ」

「あ、うん」

グリーンが原作通り先に選ばせようとしてくる。レッドは緊張で溢れる唾をのみ、ボールの前に立った。

レッドはヒトカゲが好きだ。リザードンの格好良さは他のすべてを押しのける。

よって一度はヒトカゲに手を伸ばし仕掛けたのだが……

バン！ バン！

小さい音が少女のボールからする。ボールの中の小さな少女はこちらを見上げ、必死にアピールを繰り返していた。汗まみれになりつつ、無理に笑顔を作って……。  
そ、そんなに見ないでおくれ……。

レッドは苦しんだ。レッドはヒトカゲが欲しいのだ。だというのに、この少女はアピールを繰り返し、ヒトカゲときたら……。

「うう……」

なぜ、なぜヒトカゲは僕にアピールしないのだろう。彼がアピールしてくれたら、少女とヒトカゲを比べることができる。そして僕はヒトカゲを選びとれるだろう。だけど、このヒトカゲ、明らかにグリーンを見ている。凝視している。恋焦がれている！  
そうか、僕なんかに興味ないってか……。くそう……。

「しょ、少女にします……」

「なるほどのう。少女は格闘タイプのモンスターじゃ。可愛がつてやるんじゃないぞ？」

なんだかエロい意味に聞こえるセリフとともに少女のモンスターボール（10kg）が渡される。手にズシンと来るボールが、存在感を主張する。

「じゃあ俺は将来飛行タイプになるヒトカゲだな」

グリーンは原作通り姑息な選び方をする。だがヒトカゲ的にはいい結果だろうし、幸せにしてやってほしいものだ。

それに、少女だっていいモンスターだ。人型だというのは有利なはずだ。

システムメッセージの説明で、この世界にはモンスター用の武器があると分かっている。ポケモンに持たせられる道具の種類を増やしたという位置づけだが、ただのモンスターには扱えない武器も、彼女なら扱えるだろう。

金槌とか持って戦ったら強そうじゃないか。うん。

そう考えて、無理やり自分を納得させるレッドだった。ボールの中の少女は疲れてしまったのか、丸くなって眠りに落ちていた。



## 第一話 少女はアピールした（後書き）

少女が入ったモンスターボールの重さを確認せずに書いております。5キロは重たすぎるかもしれません。どなたかすぐに確認できる方がおりましたらぜひ教えてください。

追記 10kgだという情報をいただいたので修正しました！  
ありがとうございます！ あ

## 第二話 レッドは狼狽した（前書き）

R15です。

## 第二話 レッドは狼狽した

「早速戦わせてみようぜ」

ポケモンのストーリー的にはオーキドからモンスターを貰った後はライバル、すなわちグリーンとの戦いである。

それはこのゲームでも一緒だった。グリーンは戦闘を提案してきたし、レッドにも断る理由は無かった。いや少女を戦わせるのにはかなり抵抗があつたが、慣れないといけないと思つたのである。何しろ、クリアしなければこのゲームから出れないのだから。

「行け、『ジハード』！」

レッドは叫ぶとともにボールのボタンを押しこみ、解放する。ボールの中から赤い光が飛び出し、地面に落ちて身長140cmほどの少女になった。

『ジハード』と言うのは少女の名前だ。レッドがつけたのではなく、デフォルトでこれだった。変更は不可だ。

なぜ聖戦<sup>ジハード</sup>などというゴツイ名前なのかは知らないが、呼び出した彼女が持っている武器を見てなんとなく納得してしまった。

ジハードは人間をトマトみたいに砕けそうな大槌を持っていたのだ。

「うー、あー…」

さっき眠っていたために寝ぼけているのか、少女はうわ言を言いつつ槌を構えた。振り回された先端が風を切り、レッドの前髪が揺れる。地味に危険だ。レッドは横に二歩距離を開けた。

グリーンもモンスターを出す。

「ヒトカゲ！」

出てきたのはオレンジ色の膝くらいの大きさのトカゲだった。尻尾の先に炎が揺れている。

いいなあ、ヒトカゲいいなあ……。

見つめられて気持ち悪かったのかヒトカゲがグリーンの足の後ろに隠れてしまった。羨ましさで爆発しそうだったので視線を外す。オーキドが何とも言えない表情でレッドを見ていた。

オーキドに愛想笑いをしていると、良いタイミングでシステムメッセージが喋り出した。

【バトルについてのチュートリアルを行いますか？】

もちろんYESである。

先ほどと同じく、ヘルプを見つつ話を聞く。

【バトルが始まると、バトル空間が形成され、バトル終了まで外界に影響を及ぼしません】

（へえ……。今ももう形成されてるみたいだね）

レッドとグリーンが10メートルほどを開けて向かい合っているその周囲を薄緑色のバリアーみたいなものが包んでいた。この中で起こった床や壁への破壊行為はバトル終了後には無かったことになるらしい。

【バトルはターン制で行います。ポケモンの速度や技の速さが先攻後攻を決定します。技の指示はバトル時に出現するバトルウィンドウで行ってください。技を使わないという選択もあります。その時は『自由にしろ』『攻撃しろ』『身を守れ』『攻撃を避ける』などのコマンドがあるので選んでください。また、トレーナーはアイテムを使うこともできます。その時トレーナーの行動はターンの最初になり、モンスターの行動は自動的に『自由にしろ』が選択されます】

（悪あがきはない、と）

【また、トレーナーは一ターンに一度、自分のモンスターの行動をブーストすることが可能です。成功率や回避率、威力や命中率が上昇します。ブーストは、技名やとらせる行動を叫ぶことでなされます】

す】

ヘルプによれば、技名を叫ぶことが一番ブースト効果が高いが、『耐える』や『当てる』など、言ってみれば願望のようなことでも、叫ぶことは無駄ではないらしい。

指示した後も駆け引きがあるということだろう。

【では試しにやってみてください。この戦いのみ、敗北してもペナルティはありません】

「よし！」

レッドは少女の技を目の前に出現したバトルウィンドウで確認する。

\*\*\*\*\*

少女のジハード

『たいあたり』 『 『 『 『

\*\*\*\*\*

一つしかなかった。

「シンプルだなあ…」

呟きつつ、唯一の技を選択する。

グリーンの前にも同じような画面が出現しており、向こうも指示を終えたようだった。向こうには『たいあたり』と『しっぱをふる』しか無いだろうが。

第一ターン、とバトルウィンドウに文字が表示される。

次にグリーンが先行だとテロップが流れ、同時にグリーンが叫んだ。

「俺から行くぜ！ ヒトカゲ！ 『たいあたり』だ！」

グリーンの声はとてもいい声だったが、高校生がすることではないような気がする。つまり思った以上に痛々しい。僕も叫ばなきゃダメなのだろうかとレッドは思った。

グリーンの力強い言葉を受けて、ヒトカゲは僅かに光ったようだった。トレーナーによるブーストだろう。

ヒトカゲの筋肉が盛り上がり、ミシミシと足の筋肉が軋む音がレッドにも聞こえた。

（そ、そんなに力を込める技なの…？）

驚くレッドの前で、ヒトカゲが地面を蹴り、弾丸のように飛び出してくる。

ヒトカゲは5、6メートルはある距離を瞬きの間に駆け抜け、レッドの真横に居る少女に体ごと突っ込んだ。腰を落とし、それを受け止める少女。

ズシッ！ と少女の体が揺れ、ヒトカゲが跳ねるように元の位置に戻って行く。

少女の膝が揺れ、苦しそうな息が漏れた。

「かふっ……」

バトルウィンドウ上で、HPバーがぎゅーんと減った。

「一発で半分以上も……！？」

ダメージが予想以上に大きい。狼狽するレッドを、グリーンがニヤニヤと笑っている。

たったの一撃で、少女は槌を杖代わりになんとか立っているような状態だ。こんな状態の少女を戦わせるなんてとんでもないことだ。

しかし……しかし、少女の目は闘志を失っていない。ギラギラとグ



リーンを睨みつけている。

歯を食いしばり、こちらに無言で顔を向けてくる少女。  
そうだ、彼女が諦めていないなら、見ているだけの僕が諦めるわけにはいかないだろう！

レッドが頷くと、少女が嬉しそうに頬笑んだ。体の内に熱を感じる。  
レッドは自然と叫んでいた。

「やり返すんだジハード！

『たいあたり』！」

トレーナーのブースト効果が発動する。自分の言葉に力が乗って体から流れ出していくのが分かった。流れ出した力は、少女を覆い、鈍く輝かせる。

輝く少女は槌を投げ捨てて天を仰ぎ、咆哮した。

「イイイアアアアアアア、ア、ア、ッ！」

ノイズのような甲高い声が響いたと思った瞬間、爆発のような踏切がレッドの横の床にヒビを入れる。

そして、ゴキイ、と言う鈍い音が少女とヒトカゲの間で起こった。

踏みとどまったヒトカゲは、しかし少女と同程度のダメージを負っていた。これでどちらもHPは半分以下。

グリーンが嬉しそうに笑う。

「やるなあレッド！ お互いに攻撃に特化したモンスターを選んだみたいじゃないか！ 楽しくなってきたところで残念だが、どうやら次で決まっちゃうなッ！」

「そ、そうだね！」

レッドは少女の咆哮のせいでちょっと耳が痛かったのだが、そこは空気を読んで我慢した。

戻ってきた少女が槌を拾い上げて構える。まだまだ闘志は十分そう  
だ。

レッドは固くこぶしを握った。素早さは向こうが上だ。先手を取られる以上、ここは技を指示しつつ、『身を守れ』と叫んでダメージを減らすべきだろうか。

いや、それでは倒しきれない可能性もある。

それなら、闘志満タンの少女の『自由に行動しろ』に賭ける！

レッドはアイテムから『きずぐすり』を選択した。

第二ターン！

バトルウィンドウのアイテムを選択したことで、ターンの最初に、

少女の頭上にスプレーが現れ、シュツと霧を吹きかける。

キラキラとした霧に包まれた彼女は、苦しそうな様子が無くなり、「ありがとう！」と言った。

喋れたのかとレッドは驚いた。

グリーンは舌打ちする。

「だが少女の攻撃じゃあヒトカゲは倒しきれないはずだ！ 次のターンに倒すだけだな！ ヒトカゲ！ 『たいあたり』だ！」

「ジハード！ …… 『身を守れ』！」  
「ぐうう！」

ズン！ と少女にヒトカゲが衝突する。HPの減少量は僅かに少なくなっただったが、次の一撃をくれば倒れることには変わらない。『きずぐすり』はもうないし、勝敗は彼女の行動次第だ。

「好きに戦ってジハード！ 君に任せる！」

コクリと頷いた少女は、その身に不釣り合いな凶悪な槌を頭上に掲げる。今度は武器を使っらしい。

「ッ！」

声にならない叫ぶを上げてとん、とん、と軽やかに地面を飛ぶように走り、少女は襲いかかった。その攻撃は恐ろしい速度で、ヒトカゲも痛手を負うことは確実。しかし

攻撃の標的はグリーンだった。

(え、そっち?)

「おい、やめ」

そういえばさっき睨んでたのはグリーンだった。ヒトカゲじゃなくて……

ぼんやりと思いだすレッドの前で、狼狽するグリーンに凶器が振り下ろされる。

ゴォキィ!

「ぐああああっ……! 頭があー!」

「ひ、ひいい……」

何かが叩き割られて何かが飛び散った。グリーンは地面に叩きつけられてバウンドし、今は痛みでのたうち回っている。その隣りでヒトカゲがドン引きした表情をしている。

レッドももちろんドン引きしていて、あわあわと口に手を当てるしかできなかった。

『自由にしろ』と言ったが少女はあまりにも自由すぎた。ルールからも自由になるとは。

心の中でさえも狼狽するレッドに、システムメッセージがなぜか誇らしそうに言った。

【このように、E l o n a の無軌道かつ残酷な部分もしっかりと組み込まれているのですよ】

そういうことは速く言って欲しかったッ！ とレッドは思ったが、グリーンを殴り倒した少女が嬉しそうに笑っているのを見て、何も言えなくなった。

ほっぺに返り血をつけてうふふと笑うジハードにはゾツとするような美しさがあったからだ。

E l o n a がますます意味不明なゲームに思えてきた。

【そしてキチンと罰則もあるのです。手持ちのモンスターに非道な行いをさせるとトレーナーの善人度<sup>カルマ</sup>が減少します。カルマが - 3 0 を下回ると危険人物とみなされてショップが利用できなくなるなど旅に不都合なことが起きますので、ご注意ください。初回により免除されますが、今回の行為によるカルマの減少量は - 2 です】

……そうですか。それでさっきからオーキド博士の視線が冷たいと。というかそう言うこともできるだけ早く言って欲しいと思うんだ。

【さて、それでは勝者の時間です。敗者からお金をむしり取ってください。所持金の半分を奪う権利があります】

「う、奪えませんよね人道的に考えて」

殴り倒してお金貰うのは強盗じゃん。

メッセージの人って地味に酷いなあとレッドは思った。

とりあえず。

相手トレーナー戦闘不能により、レッドの勝利である。

## 第二話 レッドは狼狽した（後書き）

E l o n aではカルマが下がりと過ぎると街の守衛さん（ガード）が猛然と攻撃してきますが、ダルフィのないこのssではクリアが不可能になりそうなので、店利用禁止プレイを強要されるだけ、という設定にしました。

カルマが下がると他人の反応が冷たくなったり、あく・どく・ゴーストタイプに好かれやすくなったりします。

### 第三話 神は大声で笑った（前書き）

すぐいまさらですが、この話では「少女のジハード」という書き方をしています。これはEionnaにおいて「少女」というのが、キャラの種類の一つであるためで、つまり「エルフの」、と表しているのと同じだと思ってもらえばいいです。



### 第三話 神は大声で笑った

トレーナーを殴ったせいだろうか、初戦を制したというのに、ジハードのレベルは上がらなかった。レッドにもトレーナーレベルと言う物があるらしいがそれも上がっていない。

現在のレベルは少女が5、レッドが1である。

「いい？ トレーナーを殴っちゃダメだからね？」

そう伝えたとジハードはコクコクと頷くが、イマイチ通じているか不安である。

バトル後にオーキドからもらったポケモン図鑑によると、ジハードはローランという種族で、年齢によって外見があまり変わらないらしい。

レッドより少し年下だろうと思っていたのだが、図鑑で見るとまだ4歳だった。

たったの4歳っ！ こんなに幼ければ善悪の区別などついているはずもない。これはレッドが気をつけていくべきなのだろう。殴った後に彼女が笑っていたことは考えないことにした。

「すまんのうレッド君。まさかあれほど凶暴なポケモンだとは思わなかったんじゃない。他のポケモンが良ければ遠慮はしなくてよいぞ？」

バトルの後、オーキド博士が謝って来た。よければ、交換してくれるという。

「もし……もし交換していただくとして、ジハードはどうなるんですか？」

「フム……熟練のトレーナーに預けるか、野生に返すかだのう」

少女を見ると、ワンピースを裾を持って、静かに佇んでいた。こちらを前髪に隠れがちの瞳でじっと見ているのを感じる。

「……それなら、このままでいいです。いや、この子がいいです。

……おいで」

「！」

呼ぶと、少女がててて、と駆けってくる。そのままぶつかってくると思いきや、近くまできて止まり、そつと袖の端を握ってくるのだった。

「そうか。懐いておるようだしそれがいいかもしれんなあ。ただし、レッドよ」

オーキドは厳しい顔になる。

「幸せにしてやるんじゃないぞ」

やっぱり違う意味に聞こえる言葉で、オーキドは締めくくるのだった。

血まみれのグリーンは、病院に行かなくてもなんとかあった。彼の袋の中にあった『きずぐすり』をぶっかけると傷が消え、痙攣が治まったのだ。

本当に良かった。死んでもポケモンセンターで復活できるらしいが、それでも死ぬところは見たくないのだ。

グリーンを担いで彼の家へと届け、その際、グリーンのお姉さんからタウンマップをもらった。図鑑にインストールするソフトウエアで、自分の位置が分かるようになった。マップを見る限りやはりこのゲームの舞台はポケモン初代と同じカントー地方のようだ。あとは、ゲームと同じく徐々に野生モンスターが強くなればいいのだが、このゲームはそんなセオリーを軽く無視してきそうで、怖かった。

夕暮れに照らされるマサラタウンの一角で、レッドは伸びをする。

「うーん……疲れたなあ」

鞆の中にはキャンプ用具も携帯食糧もあり、先に進むのは問題ない。しかし色々あったのでちょっと休憩したかった。

もう今日は先に進む元気がないなあ、主人公の家に帰ろうかなあと考えていると、脳内でメッセージが言った。

【旅に出る前に、神殿を訪れておくことをお勧めします】

「……神殿？」

マサラタウンにはそんなものなかったはずである。

【9柱の神々が祀られた場所です。信仰をし、神が好むものを奉納するとすると、神が対価として旅に有利な恩恵を授けてくれます。さらに信仰を深めると神々からポケモンを授かることもあります】

「へえー……」

恩恵があるなら行ってみよう。疲れてうつらうつらし始めた少女にはボールに入って貰って、レッドはタウンマップ詳細版を頼りに神殿へと向かった。

少女の入ったボールの重さが10キロもあるのでベルトに付けるのが躊躇われたが、ベルトには不思議な効果があるのか、つけると重さを感じなくなった。

最悪ベルトが千切れることも考えていたので、この結果にホッとしたレッドだった。

神殿は、マサラタウンの街並みに溶け込むこじんまりとした教会のような建物だった。

重い扉を押し開けて入ると、石造りの神殿は荘厳な雰囲気で満ちていた。天井のステンドグラスから入ってくる光が、どこか静かで優しい視線に見える。

訪れている人は少なく、職員のおじさんが一人、入口の近くで神殿土産のまんじゅうを売っていた。

祭られている神は大半がポケモンとは関係なかった。Elonaの神だからだ。

機械のマニ

風のルルウィ

元素のイツパロトル

収穫のクミロミ

地のオパートス

幸運のエヘカトル

癒しのジュア

富のヤカテクト

これらの8柱の神々の祭壇が円を描くように配置され、中央には清涼な水が石で囲った枠に湛えられている。小さなプールくらいの広さはあった。

そのプールの中央に浮かぶように、黄金の装飾を纏った白馬のようなポケモンの銅像が鎮座していた。周囲に睨みを利かせるように首を上げ、周囲を睥睨している。

ポケモン世界の創造神とも言うべき、アルセウスであった。

白磁の体躯にステンドグラスから入った日の光が降り注ぎ、アルセウスは今にも動きだしそうな様子を見せている。

アルセウスの銅像の下、透明度の高い水の中に『神々の休戦地とする』と字が彫ってあった。

「そもそも、元はアルセウスの神殿なんだよ」

売り子のおじさんが、暇だからとガイドをかって出てくれていた。恰幅のいい体をゆするようにして話してくれる。

「だから多くの神の祭壇が置けるんだけどね」

基本的に神同士の間は悪いのだが、ここはアルセウスが睨みを利かせるのでこのような状況が成り立っているらしい。

「私はマニを信仰していたんだがね、どうも尊大な口調が耳にさわって先日ルルウィ様に乗換えたんだよ」

尊大な口調って、聞いたことがあるのだろうか。

おじさんは嬉しそうにルルウィという神のことを語ってくれる。

ルルウィという神は風の神様で女王様という言葉がぴったりで、なにより尻がいいらしい。

たまに神の声を受信することがあるのだが、その時のドSぶりがたまらないとか。

恩恵は速度が上がること。街から街へと移動する時間が短縮できるので嬉しい恩恵である。先手を取れると、トレーナーの中にはポケモンに無理やり信仰させる人もいるようだ。

「私も足が遅いと良く言われてね。速さが貰えるのは助かるんだよ」  
「ははあ……」

動きにくそうなお腹ですもんね、とは口が裂けても言えないので、レッドは曖昧に相槌を打った。

「そういえば、ポケモンが貰えるって聞いたんですけど」

「ああ、そうだ。かなり頑張らないとお貰えないからあまり知られていないのだね。私の家にはマニからいただいたアンドロイドがいるよ。強くは無いが、長いこと一緒にいるから愛着がわいてね。ハハハ」

恥ずかしそうに笑うおじさんの薬指には婚約指輪が嵌っている。まさか……

おじさんはレッドに下手くそなウィンクをくれたから、話題を変えた。

「そうだ、他の神々のくれるポケモンを知りたいかい？」

「あ、はい」

メッセージが言ったように、信仰を含めると神の使徒が仲間になるらしい。

機械のマニはアンドロイド。

風のルルウィは黒天使。

元素のイツパートルは追跡者。

収穫のクミロミは妖精さん。

地のオパートルスは黄金の騎士。

幸運のエヘカトルは黒猫。

癒しのジュアは防衛者。

富のヤカテクトはおじさん知らないな。  
アルセウスってポケモンくれるのか？

以上の物をそれぞれ貰えるようだ。なんだか全部強そうである。

下賜された使徒は捕まえたモンスターと同じように主人に服従するらしく、信仰対象を他の神に移しても仲間から離脱したりはしない。時には戦いの中で絆を深めて使徒と結婚したりする人もいる。誰とは言わないけど。

ところでアンドロイドって可愛いのだろうか。そこが気になって仕方ないレッドだった。

「あんたみたいな駆け出しトレーナーなら、体を丈夫にしてくれるオパートスがいいだろうな。なぜかって言うんだ、私がトレーナーとしてブイブイ言わせていた時にも、酷いトレーナーが居たんだよ」

困ったものだと思いを寄せてため息を吐く売り子のおじさん。

なんでも、街の外にはトレーナー自身を狙って攻撃してくるような凶悪なトレーナーがいるらしい。いくらポケモンを強くしてもトレーナーが倒れたらバトルには負けるのだから簡単に勝てると言えばそうなのだが。

しかしとても身に覚えのある話である。実力で負けているのにズルして勝ってしまったような気がするし。心が痛すぎる。



なにはともあれ、丈夫になりたいなら地のオパートスだ、とのことなのでレッドはオパートスの祭壇の前に行つて祈つた。

（えーと、これから信仰したいと思います。よろしくお願いします）

その瞬間、天から来訪する光がレッドを包み込む。ドン、と体に力が宿った気がする。

え、これだけ？　これで入信できるの。ずいぶん簡単だな……と考  
えた時に天空から落下してくるようなドツプラー効果とともに神の  
声が脳内で反響した。

『フツハハハハハハハッハハハハハ  
前は私の信者だ！ もう逃がさんぞ  
ツ！』

ツ！ これで

や、やつちまったー！ とレッドは思った。良く考えずに決めると良くないということを身を持って学んでしまった。音速で後悔した。しかし信仰によって体が丈夫になるのは事実だったので、ちよつと怖いけどいいか、という結論が出るのもまた早いレッドだった。

【とろろでレッド様】

おじさんに別れを言って、帰ろうとしたところ、メッセージが唐突

に声を出した。

「……何ですか？ さっきから頭の中でオパートス様が煩いから、手短にしてくださいね」

脳内で『フハハ！ フハ！ ハツハハハハハ！』と笑い続けている神様が鬱陶しくなってきたのでレッドの声は少々冷たい。

【アルセウスの膝元にある井戸について、説明をお聞きになりますか？】

「説明つて……井戸の？ ていうかあのプールみたいなもの、井戸だったの？」

【はい。地下水と繋がっております】

なんとなく気になって井戸へと歩いていく。

覗きこむと、透明度の高い水が並々と湛えられており、底が見えないほど深い井戸のようだった。

美味しそうである。レッドは自分の喉が渴いていることを自覚した。

「飲むことはできる？」

【可能です。しかし、説明を聞かれた後の方がよろしいかと思えます。聞かれますか？】

「あ、うん」

【はい。それでは 】

メッセージが言うには、Elonaの世界の井戸やトイレの貯水タンクには、不思議な効果が宿っているという。その設定はこのゲームにも適用されているらしい。

【飲むと、次の内何かが起こります】

- 1、何も起こらない。美味しい水を堪能して下さい。
- 2、状態異常が起こる。睡眠、混乱、盲目、麻痺など。
- 3、能力値が変化する。もしくは能力値の上がりやすさ（潜在能力）が上昇する。
- 4、体が変容する。関節がしなやかになったり、目が猫目になったりと、常識では考えられない変化が体に起こる。
- 5、お金が手に入る。少額。
- 6、モンスターが召喚される。出てくるモンスターはランダムで、時間がたつても消えないので強いモンスターが出たらこの場所では使えなくなる可能性がある。
- 7、何かが寄生する。お腹の中に何かが入り込んで来る。

【E10naではもう一つ起こりうる現象がありますが、それは省かれております】

「まあ無いものはそれでいいや。とにかく寄生とモンスター召喚が良くないね……いや、でも何かに使えるかも……。とりあえず、飲むのはやめておいた方がいい？」

【無難ではありません】

「なるほど。じゃあ止めて……いや、やってみようかな。モンスター召喚なら、熟練トレーナーのおじさんがいるし」

横でボケつとしていたおじさんがギョツとして、ほぼ肉を揺らしながら首を横に振った。

「いやいやいやおじさん頼りにしちゃダメだろ。今ポケモン持って

ないよ？　しかし……このお土産『アルセウスまんじゅう』を買うというなら話は聞かないこともないよ。一番安くて15万円するけど」

「結構です」

15万円のお土産とか初めて聞いたわ。

レッドは主人公の家に帰ることにした。

### 第三話 神は大声で笑った（後書き）

おみやげ：Elonaにおける友好度UPアイテム。渡すと消滅する。15万円はぼったくり価格です。

#### 第四話 クワガタは母と呼んでほしかった（前書き）

既にお気に入りが入っていることに感動しました。執筆スピードは相変わらずですが、やる気がダンチです。

#### 第四話 クワガタは母と呼んでほしかった

さて。神殿を出て家に帰ろうと思ったのだが、少々気まずい。

主人公の母とは家を出るときに顔を合わせただけで、その時も「速く行きなさい」と送り出されただけだった。

いつそこかのホテルに泊まるうかと思ったが所持金は2000円。そしてそもそもマサラタウンに宿泊施設などなかった。

これからどんな顔をして家に帰ればいいのかだろうか。

そんな心配は実際に帰ると吹き飛んだ。

「やあ、お帰り少年。さっきは自己紹介しなかったから改めて、母親役のサポートAI、クワガタだ。良いポケモンを貰って来たかい？」

第一声で、母親の人がこちらの事情を知る人だと分かったからだ。というか口調も変わっているのだが。

クワガタさん（すごい名前だ）は、レッドがプレイヤーであることも、この世界がゲームであることも分かっているらしい。他のその事情を知る人は、脳内で喋るシステムメッセージの人だけだ。他のNPCはこの世界で生まれ育って生きてきたという意識を持って

おり、そもそも自分がNPCであるということを知らないらしい。

「でも、明らかに変じゃないですか？ バトル時に出るウィンドウとか、バトル空間とか」

「その辺りはシステマ的な認識阻害と、あとは元々こういう世界に生まれてきたのとで、疑いにくくなっているんだよ。でも、所詮AIだなどと言わず、君は相手を対等な人間だと思って接してやって欲しい。ゲームの中とはいえ、彼らはみんな生きているのだからね」

「あ、はい。もちろんです」

人間の形をしている物を物扱いできるほどレッドは割り切れていなかった。逆で助かったくらいだった。

夕食は美味しかった。ホイコーローは何の肉を使っているのか不明だったので少し怖かったが、クワガタさん曰くこの世界にもポケモン以外の生き物はいるらしい。使っているのはケンタロス肉とかじゃないようだ。

やはりポケモンを食べるのは少々抵抗がある。なんだかんだで、レッドはポケモンが大好きなのだ。ピカチュウの姿焼きなんて出てきたら発狂する自信がある。

「たくさん作ってあるから好きなだけ食べるといい」



クワガタさんは、改めて見ると目元のキリツとした美人だった。気後れしそうになるレッドを旨く会話に引っ張り込む明るさもある。ものすごい勢いで食事をかきこむ少女のジハードの存在もあり、夕飯はかなり楽しい一時であった。

少女の頬に飛んだソースを拭ってやっている、クワガタさんがフォークでパスタを巻きながら訪ねてくる。

「そついえば少年。マサラタウンの横の草むらがあるだろう」

「はあ……あるかもしれないですね」

「うん。确实にある。そしてそこには入らない方がいい」

「草むら……」

レッドは思い出す。

マサラの横の草むらは、ポケモン初代にて、決して入れなかった場所だ。そのため、そこでは伝説のポケモンが出てくるだのLV100のフシギダネが取れるだの、様々な噂が飛び交うことになったという。バグを利用して入ることもできるが、その場合はフリーズするのがお約束だった。

「入ったら何があるんですか？」

「うむ。Elonaの一番強力なダンジョンがある。通行証がなければダンジョンには入れないのだが、入口に近づくだけでも危険なんだ。挑むとすれば、とりあえず手持ちのポケモンのレベルは100以上欲しいところだ」

「100以上……」

「うん？ 100以上にはならないと思っていたか？ そんな制限はないさ。ポケモンのアニメでもピカチュウのレベルは600くらいあるはずだ。全然問題ない」

あれは例外だと思っんですけど。

「そのダンジョンには、クリアが目的なら挑戦する必要はない。このゲームにおけるクリアはポケモンリーグの制覇だからね。だから腕試しがしたくなるまでは、危険なことだけ覚えておけばいいよ」

クワガタさんはそう締めくくり、パスタをモリモリと食べ始める。テーブルマナーとかにはまるでこだわっていない。豪快な人である。

そう言えば、さっきから『フハハ』とうるさいオパートス様の声がしない。神も晩御飯を食べているのだろうか。

疑問に思っているとクワガタさんが怪訝な顔をする。

「どうした少年。私を母と呼んでいいのかどうか迷っているのか？」  
「もちろん違いますよクワガタさん」

僕たち他人ですよ。

神の声が煩かったことと今は聞こえないことを彼女に喋ると、クワガタさんはおお、と手を打った。思い当たることがあるらしい。

「それはだな、少年。今脱いでいる君の野球帽の効果さ。君が被っていたのは、神の声を受信するという効果を持つ帽子だったのだよ」  
「へ、へえー……」

何の変哲もない赤い帽子だったが、実は変な効果が付いていたらしい。とりあえず、明日から帽子を被らないことは決定した。

しかし気になることがある。そういう効果のある帽子は普通なのだろうか。電波を受信するのは一般的なこと？

尋ねるとクワガタさんは首を横に振った。

「いや、割と珍しい効果だ。普通は神とは中々触れ合えない。しかし、効果を持つ衣服や道具は多い。それこそ、振っただけで先端から雷が飛び出す剣や、着ているだけで体から血が噴き出す服まで、その効果は様々だよ」

「随分とまあ……物騒ですね」

「そうだな。良い効果も悪い効果もあり、それらは全て使う人次第だということだ。もし良い効果を持つ装備を君が手に入れ、君のポケモンが装備できるなら装備させてやるといい。幸いきみのポケモンは人型だ。装備できる部位も多く、たいていの装備品を活用できるだろう」

部位とは足や腕などのことで、これがなければ例えば兜や籠手が装備できなくなるということだった。つまり…ゴースなどは兜しか装備できない……ということだろう。

納得したレッドを見て、クワガタさんは続ける。

「そして帽子のように軽い衣服などは、君でも装備可能だ。トレーナーレベルが上がれば使えるようになる魔法や魔道具を使いやすくする効果を持つ物もあるし、有用そうなものは売り払わずに持つておくのを勧めるよ。持ち運ぶのに重い場合は、この家で預かっておけるから積極的に帰ってくるといい。うむ、帰ってくるの良いんだ」

最後のところに力を入れて、クワガタさんはこちらを見つめてきた。レッドは気圧されながら返事をする。

「ま、まあ暇になったら帰ってきます」

「う、うむ！ 頼むぞ！ その時はぜひ私に旅の話聞かせるんだぞ！ 約束だぞ！？」

レッドの答えは合格だったらしい。嬉しそうにゆーびきーりんまーんとか懐かしいことを強要されたが、レッドは悪い気分はしなかった。旅に出たとして、帰りを待っていてくれる人がいるというのは贅沢なことだと思ったからだ。

指切り（嘘ついたらケツドリルとか名のいう恐ろしそうな罰ゲームに代わっていた）をし終えたクワガタさんは満足そうに息をつき、不意に言った。

「しかし、息子と娘が一度にできた気分だな……。なかなか悪くない。さあ少年、私のことを母と呼んでも、私は一向に構わない！」

胸を張ってさあ来いという姿勢の彼女に、その予定は全くなかったが、少し呼んでみようかな、と思ったレッドだった。隣ではお腹がいっぱいになった少女が眠りこけ、鼻ちようちんを出していた。

## 次の日の朝。

「頑張ってこい少年……いや息子よ！」と送り出されて、レッドは一番道路に歩き出した。マサラタウンとトキワシティを繋ぐ道だ。ゲーム世界での目覚めは良く、足取りは軽かった。

ふと、隣にジハードがいないのに気付き、振り返る。少女は無口で佇んでいた。無口と言うか、頭頂部で二つに分けた長い金髪が表情を隠しているので表情を窺いにくいのが、ボーっとしているだけなのか。手には大槌を持っていない。あれはバトル空間でだけ装備できるようだ。

足を止め、「いくよジハード」と声をかけるとハッと顔をあげて子犬みたいにちょこちょこ寄ってくる。可愛い。正直かなり情が移った。とても昨日グリーンを殴り倒した少女には見えない。そういえばグリーンは大丈夫だろうか。

「心配だからちょっとグリーンの家に行って行こうか」

ジハードがコクリと頷いたので、グリーンの家に向かうと、すでに彼は旅に出た後だという。あんなに血が出ていたのに元気なことだ。それとも『きずぐすり』の効果がそれだけ強力だということだろうか。何にせよ、良かった。

憂いも晴れて、さらに軽くなった足取りでレッドは一番道路に足を進めた。

初代ポケモンの攻略フローチャートは、

マサラタウン 一番道路 トキワシティ トキワの森 ニビシティ  
(ジムリーダー戦一回目) ……

と続いていく。タウンマップの西端のルートを北に北に進んでいく

のだ。トキワシティにもジムはあるのだがリーダーのサカキが不在なので入れない。シナリオでは最後に訪れるジムとなる。

とりあえずはこれに従って進もうとレッドは思っている。このゲームではどこまで当てになるか知らないが、知っている情報がある方が攻略も早いだろう。

よってマサラタウン　一番道路（今ココ！）である。

道路は遠くまで見渡せる草原だった。草は意外と深く膝丈だ。日光を浴びて伸び伸びとしている。

ゲームでは数分歩けば終わる一番道路も、この世界では一日かけて踏破できるかどうかという距離になっている。レッドはあまりの距離にビビってバスがないか探したのだが、トレーナーは移動も修行だと言うことで乗車を拒否られ、歩いていくことになってしまった。そういえばゲームでも、そこボート使えばよくね？　という場面でも波乗りがないと進めないしね。

幸い野宿するための道具はあるし、途中に宿泊小屋も作ってあるという。進むのに必要なのは根性だけだ。

「よしー！」

レッドは頬を叩いて気合いを入れ、記念すべき旅の一步目を踏み出した。

そして直後にモンスターに襲われた。

ブン！ と瞬時に辺りがバトルフィールドに覆われる。少女の手に大槌が具現化され、レッドの前にバトルウインドウが形成される。ウインドウの中を『BATTLE START!』というテロップが警告のように赤い文字で流れた。

ガサガサと草むらが揺れ、モンスターが飛び出してくる。

（記念すべき初のポケモンだ ……………これポケモン？）

「チュー！」

ヒゲを震わせこちらを威嚇してくるのは、ずんぐりとした茶色い体の、でかいネズミだった。

そうネズミ。断じてコラッタではない。前歯も飛び出てないし、目も耳も大きくない。そこらへんの下水道から出てきたぜ！ と言わんばかりの汚い毛皮は、ポケモンと呼ぶには大変な抵抗があった。恐らくEilonaに出てくるモンスターなのだろう。モンスターと呼ぶのにすら抵抗があるが。

ウォン！ と少女が大槌を構えて風が起き、それを頬が撫でたことでレッドは考えを打ち切った。ポケモンっぽくないからとはいえ、



バトル空間が形成されている。これは戦いが終わらなければ無くないのだ。

だったら、倒すまでである。

「行けえジハード！ 『攻撃しろ』！」

今回は、技を使わない状態でダメージを計ることにしたため、指示は『攻撃しろ』である。敵のレベルは2だ。試す余裕くらいあるだろう。

トレーナーのブースト効果によって、レッドの声と共に輝いた少女は頷き、大槌を振り上げる。

ジハードが持つ大槌は、長い鉄の棒の先にギアのようなデコボコとしたものがひつついているもので、ミニ四駆の前輪と後輪の駆動を連結させる長いパーツみたいな形状だ。素材は鉄でできており、殴られればそれはそれは痛そうである。

「あああッ！」

先手はこちらだ。少女はネズミに走り寄り、大槌を振り下ろす。レッドはバトルウィンドウの敵のHPバーを見て、どれくらいダメージが入るか確認しようとしていた。そのレッドの耳に聞きなれない音が響く。

グチャッ！ というえぐい音だ。

「？」

顔を上げたレッドの頬に、何かの飛沫が飛んでくる。頬をこすってみると、赤い物が手に着いた。これは何？ いったいどこから？ 答えはすぐに分かった。少女の槌の下でミンチになっている何かからであった。

少女はにつこりと笑っている。しかしその下にあるのは紛れもなく、こと切れた死体。

死体だ。頭蓋をたたき割られたネズミの眼球は飛びだし、視神経がつながったまま地面に落ちている。血痕が放射状に広がっていた。

（えっぐツツッ！）

死体を生で見たのは初めてだ。瞬間的に吐き気がする。

しかし、吐き気は嘘のように収まって行った。精神が許容値をオーバーしそうになったため、防護機能が働いたのだろう。VRゲームでは基本的な機能だ。感情を操られているようで不快だが、取り乱さないのはありがたい。

でもあえて言うなら、こんな機能が必要ないような世界観が良かったよお爺ちゃん。

「  
」

少女が駆け寄ってくる。近くに立ち、レッドを見上げてくる。褒めて欲しそうだ。少女の白い服に赤い飛沫が飛び散っていた。それもバトル空間が消えると同時にかすれて消え失せていく。頬の血の跡も同様だ。

現実感が少し希薄だった。

レッドはとりあえず、という風に少女の頭を撫でた。うれしそうにする少女がさらに現実感を遠ざける。

しかし忌避感を感じないのだ。不思議な気分だ。これにも慣れなければならぬのだろうな、とどこか他人事のように考えた。

レッドがショックから抜け出す前に、次のモンスターが襲ってきた。

今度出てきたのは、大きなノウサギだった。レッドを見て、敵意をむき出しにしており、それを見たジハードが好戦的に、壮絶な頬笑みを浮かべた。

レッドは躊躇している。

このゲームには残酷な残酷があります。このゲームには流血の描写があります。VRゲームはこれが初めてだが、そのようなゲームは腐るほどやって来た。少々気分が悪くなりつつも、臨場感を出すための良いスパイスだと思っていた。

しかしそうではないのだ。血とは、命の中を流れる物であり、残酷さとは、それを無碍に摘み取る行為に冠せられるものだった。

「……」

ジハードが不安そうな顔をしてレッドを見ていた。そうだ、例えばレッドが怖気付き、このバトルを放り出したとしよう。すると、どうなるだろう。

結論として、ジハードが傷つく。

触らなければバトルウィンドウは20秒で勝手に閉じる。あとは『自由に行動しろ』がバトル終了まで選択され続けるらしい。

少女は、ネズミを一撃で屠った。しかし、レッドがブーストせず、技も使わせなければ、血を流すのは今度はジハードになるかもしれない。

ヒトカゲにやられて苦しそうな少女の姿が、脳裏にフラッシュバックする。

自分が傷つくのであれば、ウジウジするのも良いだろう。しかし他人が傷つくのであれば、それは害悪である。ジハードに情が移っている。彼女が大事だ。自分の弱さでジハードを傷つけるのは許容できない。

（それはダメだ…っ）

レッドはそう思った。意を決し、バトルウィンドウに指を伸ばす。指示は『たいあたり』。

ブーストしたただの攻撃でネズミは死んだ。ウサギのレベルはネズミと同じく2だ。技をブーストしたら大変なことになるだろう。

それでも、少女が傷つく可能性を減らしたかった。

「一撃で倒せジハード！ 『たいあたり』だ！」

レッドの言葉がジハードをブーストさせる。少女は叫び、地面の土を踏みぬいて駆け、ウサギへぶちかましを食らわせた。ウサギは少女がぶつかった瞬間、ビチャツ、と血袋のように弾け飛んだ。

想像以上にエグイ。直視したくない。とても勝利を喜べない。しかし、これがこの世界の現実なのだ。目を背けてはいられない。

「むう……」

口を噛むレッドに、血まみれの少女が走り寄ってくる。レッドは彼女の勝利を喜べない。しかし労ることはできた。

「お疲れ様」

頭を撫でると、少女は目を伏せる。顔にべったりと血が付いているので分らないが、もしかしたら照れているのかもしれない、とレッドは思った。

【少女のジハードはレベル6になった！】

【少女のジハードは『にらみつける』を覚えた！】

第四話 クワガタは母と呼んでほしかった（後書き）

二つに分けても良かったですね…

## 第五話 ロミアスとすれ違った（前書き）

なぜか感想を受け付けないというマゾい設定にしていたので誰でも書けるように直しました。



## 第五話 ロミアスとすれ違った

少女が先ほどレベルアップした。ウサギを体当たりで爆散させて血まみれになった少女だが、今は返り血も消えており、綺麗なものである。

レベルアップしたといっても見た目はまるで変化はないがこれでレベル6。着実に能力値は変化している。具体的に言うと、HPと攻撃がやや高めに上がり、それ以外はほとんど上がっていない。成長量は他の初期ポケモンと同じくらいのようだった。

少女のジハードは格闘タイプである。最初に戦うことになるジムリーダーのタケシと闘うまでに、格闘タイプの技を習得してほしいところだ。モンスターが出たら積極的に戦うとしよう。少女は相変わらず闘志むき出しだし、僕も戦闘に慣れる必要がある。

しかし……ポケモン由来のモンスターもスプラッタなやり方をするのだろうか……。見たくなえ…。

一応、気絶させるだけでも戦闘は終了するようだが、そんな手加減ができるわけがない。実際、気絶によって戦闘が終わったのは一回だけだ。それ以外は皆、酷い状態になってくたばった。

「はあ……空は青いな……」

色々と精神的に疲れてクワガタさんの家に帰りたくなるが、甘え

てばかりもいられないので先に進むことにした。クワガタさんに甘え過ぎると泥沼に嵌る気がするのだ。あの人はなんだかんだで超甘えさせてくれそうだし。

朝にマサラタウンを出発し、幾度か休憩を入れて歩き続けて昼になった頃、ついにポケモンのコラッタが現れた。初の野生のポケモンである。

この時までには、少女はネズミを四匹、ノウサギを三匹、（腕くらいある）ムカデを一匹叩き殺している。それらに加え、プチという異様に柔らかい、絞り出したホイップクリームみたいな見た目のモンスターも倒した。プチはEionnaの最弱級のモンスターだとかどおりで勢い良く弾けたわけである。

殺していると稀に皮やら骨やらがドロップする。血痕とそれだけが残るので結構不気味だが、メッセージさんによると売れるかもしれないのでレッドは全部確保することにした。なんだか、この頃からシステムメッセージの人格のことを心の中でメッセージさんと呼んでいたことに後で気がついた。名前も知らないものでこれで良いかな、と思っている。

そろそろ戦闘には慣れてきていた。少女が血みどろになって微笑んでいる姿を見ても割と平気になってきている。

レッドがそこまで進歩している間に少女のレベルはもう一つ上が

り現在Lv7であった。やっぱり大した変化はなかったがお腹は空くそうで、今は口をもぐもぐ動かして、さっきドロップした『プチの死体』という名の生肉を食べているところだ。

ドロップした　つまり地面に落ちた肉は汚いと思うのだが、『プチの死体』がドロップした時、レッドが拾う前に少女が拾って即座に食べ始めてしまったのだ。お腹が空いていたのだろう。生肉を貪る少女は予想以上に酷い絵面であり、レッドは発する言葉を失った。ちゃんと止めておけばよかったとレッドは後悔している。

口の周りが血だらけの少女は猟奇的に過ぎるのだ。

そこにコラッタが飛び出してきたわけである。

「  
」

モンスターが襲ってくる前兆は、バトル空間の展開である。周囲に緑色の薄いバリアーが張られ、外界と隔離される。レッドの前にバトルウィンドウが出現し、少女は急いで口の中の肉を咀嚼した。

ガサリ、と草むらが揺れ、コラッタが飛び出してくる。目が大きい。耳が大きい。歯が出過ぎている。可愛さを優先し、およそ野生を生き抜くには適さない身体構造。

（これでこそポケモンだ！）

これまでプチとヒトカゲを除いてでかくなっただけの動物ばかり見てきたため、レッドは少し感動した。

しかし今からこのコラッタを血祭りにあげなければならない。動

物をミンチにするのはもう割り切ったが、ポケモン相手だとちょっと腰が引けてしまう。

そんな自分を叱咤し、レッドは『たいあたり』を選択した。初見の敵にはとりあえず最大火力をぶつけて見るのだ。コラッタはLv5なので、恐らく負けないと思うのだが……

これまで、何体かモンスターを倒したのだが、ヒトカゲを除いてまだ『技』を使われたことは無い。『技』の威力の高さは少女の戦闘ですでに分かっている。レッドは自然と慎重になった。

## 第一ターン！

敵の方が早い！ レッドのバトルウィンドウにコラッタの技名が映る。『しっぽをふる』だ。

コラッタがこちらに尻を向けて、割と長い尻尾をフリフリと可愛らしく動かしている。なんだか蠱惑的な動きで、つついレッドも体が動いてしまいそうである。

「……！」

レッドがそうなのだから、敵をミンチにすることとお腹いっぱい食べることを以外考えてなさそうな少女のジハードはばっちり引っかかっていた。

だめだ、警戒心が薄れている！ このままでは攻撃されたときに旨く防御できないだろう。これが『しっぽをふる』の効果か……！

「ダメだジハード、惑わされるな！」  
「！」

レッドの声に少女はハッと気が付き、しかし自然と彼女の眼はコラッタの尻尾を追ってしまふ…。ああ、自然と体までフラフラと…！  
『しつばをふる』、なんと恐ろしい技だ……！

「ええい！ 一撃で倒してしまえば問題ないさ！ ジハード！  
たいあたりだ！」  
「ッ！」

その声を聞いてジハードは敵を倒す衝動を思い出したようである。

少女は大槌を放り捨て（技を使うと毎回放り捨てるのだ）、奇声を発しつつコラッタに襲いかかる。体に力を入れ、向かい打つコラッタ。

二者の間でゴギ、と鈍い音がして、少女が駆けて戻ってくる。コラッタの方を見ると地面につけた四肢がプルプルと震えていた。前歯が折れている！ 目に力がない！

（こ、これは割と瀕死な状態だ！）

いける！ とレッドは考えた。彼はオーキドから図鑑と一緒にモンスターボールを貰っていたのだ。これならゲットすることができ  
る！

原作なら草むらで「おじさんのポケモンゲット講座」を見てからなるのだろうが、そんなことは知ったことじゃない。今ココに！

瀕死のポケモンがいるのだ！

バトル中にはポケモンにも触れないし、鞆の中に手を入れることもできない。ではどうするかというと、バトルウィンドウの『アイテム』から、モンスターボールを選択するのだ。

第二ターン！

レッドの手の中にモンスターボールが出現する。レッドはそれを握りしめた。

「おらっしやああああああ！」

レッドはオーバースローでモンスターボールを投げつけた。このボールがぶち当たったらコラッタ死んじゃうかもと思ったが、そうなったらその時である。

コラッタは僅かに逃げようとしたようだが、瀕死の体ではそれも無理だ。敵を弱らせるないと捕まえられないのはこのタメだったのか！

しかし、コラッタはただ漫然とボールを見ている訳ではなかった。気力を振り絞り、尻尾を振り回したのだ。

パーン！ と空中で弾かれ、分解するボール。

（弾いた！？ ていうかボール壊れるの！？ 脆<sup>もろ</sup>っ！）

二度と使えそうにないほどバラバラになったボールが虚空に消え、コラッタはカッとレッドに向けて威嚇する。こ、こいつ、そんなに僕につかまるのが嫌なのか……？

その後はサクサクと、コラッタの『たいあたり』で少女が少しダメージを受け、コラッタは自由に行動した少女に殴り殺されてミンチになった。それはそれは酷い光景だった。コラッタのこぼれた脳みそなんて、子どもが見たらひきつけを起こすだろう。

コラッタの死体が消えた後、そこにはなぜかコラッタの剥製はくせいが出現する。

【E10naでは生物を殺すと剥製やカードが時々ドロップするのです。良かったですね】

そうですか、としか言いようがない。こんなかさばる物何に使うのだろう。意味不明だ。

しかしこのコラッタ、やたら顔がキリッとしてる。ちょっと格好いい。そんなに重くもないし持って行こう。初めての野生ポケモン記念だしね。

「高く売れるかもしれないし」

【それはありません】

「ないのか……」

少女は疲れたのか、コラッタの剥製に座って「ふう……」と休んでいた。それを見て椅子にも使えるか、と剥製に利用価値を見出したレッドだったが、やっぱり罰当たりな気がするのでやんわりと注意しておいた。

空が夕焼けに染まってきている。モンスターとの戦闘に時間を割き過ぎた気がするので、行程は遅れている可能性があった。お陰で少女のレベルはまた上がったが、小屋が見つからなければそろそろ野宿する場所を決める必要があるだろう。

（どれくらい来たかな）

ポケモン図鑑でマップを確認すると、一番道路の真ん中あたりにレッドの居場所を示すポインターが点滅している。半分ほどは来ているようだ。GPS搭載のこの図鑑は、子どもにほいほい上げていような物ではないのと思うのだが、オーキドはそれだけレッドに期待しているという設定なのだろう。

後ろを無言で着いてくる少女を振り返ると、レッドを見上げる彼



女に先の戦いで負ったダメージは見られなかった。戦い終わりに全快するわけではないが、ポケモンと違ってよほどひどいケガでない限り、時間経過で勝手に回復するようである。『きずぐすり』の節約ができて大変助かる。もう一つも持っていないが。

しばらく歩いていると行く手に小屋を見つけた。「無料で使っていていい」「綺麗に使ってくれ」「長期間の利用は遠慮してくれ」という内容が書かれた看板が立っている。探していた無人宿泊施設に間違いがないだろう。

ヤレヤレ良かったと中に入って休もうとすると、ちょうど中から人が出てくるところだった。

年上の青年で、西日に照らされた髪の毛が凄まじい色になっている。元の色は恐らく緑色ではないかな、とレッドは見当をつけた。

「む」

「あ、どうもこんにちわ…こんばんわ？」

「子供か？ こんな時間にこんなところで何をしている」

それはこっちのセリフでもある。大体この世界がポケモンのゲームなら子どもが一人、街の外でフラフラしているのも別に变ではないだろう。その気持ちが顔に出ていたのか、緑髪の男は弁解を口にする。

「…そのような顔をしないでくれないか？ 樹海から出てきたばかりでこの辺りの事情には疎いのだ。何せ…」

（樹海……？）

「どうしたのロミアス、誰がいるの？」

小屋の中から女の人の声がして、ロミアスと呼ばれた青年が振り返る。背中には大きな袋を持っていた。もしかしてこの小屋から出ていくところだったのだろうか。

この時気がついたが、ロミアスの格好は現代人の物とは違い、少々古風であった。ベルトの代わりに皮の帯で腰を閉めるような衣服である。

「ああ、子どもだ。『少女』を連れている」  
「そう……」

女の人の声に答えると同時に、ロミアスは中に入って行ってしまった。

「どういうことだろう……分かる？」

首を横に振る少女と顔を見合わせていると、中からボソボソと会話が聞こえてくる。

……トレーナーかしら……恐らくな。証をつけている。しかし……  
……それなら、お互いに関わらない方がいいわ………だな……

このまま聞き耳を立てるのが失礼に感じて、少し距離をとろうかと思っていると、二人が小屋から出てきた。緑色の青年と、水色の髪の毛をした二十代前半の女の人である。女性は周囲に清涼な風が吹いているような不思議な雰囲気があった。服装は青年の物と似ている。

女性はふわりと笑いかけてくる。

「こんばんわ。空が綺麗でいい夜ね」

「は、はあ……」

生返事を返すレッドに緑髪の男が話しかけてきた。

「折角の出会いを大事にできないのは残念だが、急いでいるので私たちはもう行かせてもらう」

「え、はい」

「それと、駆け出しであろう君に一つ忠告しておこう。早く街へ行くことだ。じきにエーテルの風が吹く。君がシェルターを持ち歩いているなら話は別だがな」

「……さようなら。あなたの旅に、風の加護があることを祈ってるわ」

エーテルの風とは何だろうか。危険な物のようだが……。レッドが疑問を発する前に二人は歩き始めていた。まあいいか。メッセージさんに聞けばいい。

そんなことよりレッドは疲れていたのだ。早く休みたい気持ちでいっぱいだった。ふかふかのベッドと1kgの金塊であれば前者を選ぶくらい疲れていたのだ。

小屋の扉を開き中に入ろうとして、ジハードの様子を見ると、彼女は二人が去った方をじっと見ていた。

「ジハード？」

呼ぶと何事もなかったかのようにちょこちょこ寄ってくる。顔を見つめると小首をかしげて疑問を浮かべるだけだ。まあいいか。

それよりさつさとご飯でも食べて寝てしまおう。

小屋の扉を開けると、木材の匂いが溢れてくる。

「結構広いね」

15畳ほどの小屋の中には寝台が二つと、木製のテーブル、そして台所があった。壁にコンロに流し台、包丁などの台所用品にどうやって水を引いているのか蛇口もある。調味料の類も完備しており、電灯まで付いていた。至れり尽くせりであった。トイレがないことに気がついたが、そう言えばこの世界ではトイレに行かないでいいのだ、と言うことに気がついた。

「はー、すごいねえ。これなら簡単な料理ができるよ。さつき拾った肉で何か作ろうか」

そう言うと、少女は顔を輝かせて頷いたのだった。

【エーテルの風ですか。先に聞いてしまうのですか？】

「先に聞いとかないと危ないことだと思っただけど」

【そうです。しかしレッド様が突然風に吹かれて慌てふためくシーンを、私は楽しみにしておりました】

（性格悪っ！）

メッセージさんは、レッドに対して協力的なのかどうか計りかねる存在である。夕食の席で、肉のスープを食う少女を横にレッドはそう思った。

鞆の中に入っていた幾つかの木の实と鶏肉のスープは存外に美味しく、レッドは満足だった。少女もそう思ったようで、黙々とスープをすすっている。

スプーンの持ち方が変だったので直してやりながら、レッドはメッセージさんに話を聞いてみたのだ。

【エーテルの風は、Elonaにおいて一年に4回、三の倍数の月の頭に吹き荒れるエーテルを含んだ風です。人間がその風を浴びるとエーテル病という病気にかかり、頭が肥大化するなど体の一部が醜く変化します。

治療には高価な薬を飲むしかなく、エーテルの風が吹く時はシエルターに入るのが常識です】

「そ、それって知らないことにならないんじゃない？」

【なつて欲しいという、私のささやかな願望はすでに打ち砕かれてしまいました……。

しかし尋ねられると答えなくなる私の性<sup>さが</sup>には逆らえないのです……！ ああ……】

「メッセージさんえげつねえ……」

なにやら悲嘆にくれた声を出しているが、言っていることは最低である。レッドが疲れてこぼした言葉に、メッセージさんは反応した。

【む？ 今なんと？】

「え、いや……そう意味じゃなくて、ほんの少し思っただけっというか。ほら、あれだよ」

【そうではなく私を『メッセージさん』だと……おっしゃいました？】

「い、言いましたけど何か……？」

やべー、地雷踏んだかなあと思ってレッドは焦る。しかしメッセージさんの答えは「否」であつた。

【いえ！ メッセージさんと呼んでくださって結構です。お気になさらず。むしろ推奨しますので、存分にどうぞ】

凄く気に入ったらしかった。偉そうにふんぞり返っているお姉さんの姿を幻視してしまった。メッセージさんはさらにブツブツと続ける。

【しかし名付け親には敬意を払うべきですよ。……父と呼んでも構いませんか？】

やめてください。

硬い寝台に少女と身を寄せて眠りに着く。外は肌寒く、荷物には薄っぺらい毛布が一枚しかないので苦肉の策だ。レッドの腕を抱えて寝ている少女が暖かい。

（うつむ…これは…良くない……）

ぜひ毛布の購入をしなければならぬと思いつつも、モンスターボールに少女を仕舞うという案は却下した。4才だとはいえ姿は15歳前後の女の子がひつついてくるのを嬉しく思わない奴はタダのホモだ。少女って実はかなり可愛いし。

と言う訳でそれなりに興奮していたが、疲れてもいたのでレッドは早々に眠りに落ちた。

なんでこの世界、排泄しなくていいのに性欲はあるんだよ、と思いつつ。

翌朝、レッドは良い気分で目を覚ました。

木の匂いと節々の痛みに、一瞬どこだか分からなかったが、すぐに思い出した。隣の少女は眠ったままレッドの服を噛んでもごもご

している。ご飯を食べる夢でも見ているのだろうか。苦笑し、食いちぎられない内に少女を揺り起して、朝ごはんの用意を始めた。

今日中にはトキワシティに着くだろう。原作のポケモンでは、最後のジムリーダーがいる街だ。この世界では一体どうなっているだろうか。

レッドはまだ見ぬトキワシティに思いをはせるのだった。



## 第五話 ロミアスとすれ違った（後書き）

綺麗なロミアスもたまにはいいかと。

## 第六話 ウンガガは死んだ（前書き）

途中で出てくる                    はここで半分ですよ、というマークです。長くて読むのがめんどい、という方がいたら、そこで休憩入れて下さい。

まあ6千字足らずなのでそうそういらっしやらないでしょうけど。

## 第六話 ウンガガは死んだ

「メッセージさんは、ストーリーを知っているの？」

【いえ、私は基本的な情報を与えられたにすぎません】

「じゃあ、このことは知らなかったんだね」

【そうですね。まさか、トキワシティのジムが       】

昼過ぎである。小屋から歩き続け、少女のレベルが10になり、『けたぐり』『きあいだめ』を覚えたところで、トキワシティが見えるところまで来た。

そして、もうもうと上がる黒い煙を見たのであった。

何かの行事のせいかと思いついたが、駆けつけて見ればトキワシティのジムからものすごい勢いで火の手が上がっていた。すでに消化は終盤に差し掛かっており、水ポケモンが大量の水を噴き出しているシーンであり、レッドたちにできることは無かったが、レッドはそれなりにショックを受けたのだった。

【そもそも、このゲームにはストーリーと呼べるものがありません。各地にいるNPCが自分の都合で動くので、思い通りに操作するのは困難ですし、計算領域が絶対的に不足します。そもそも思考に過度の制限などを加えれば違和感が残り自分がデータだと気が付いてしまうNPCが出てくるため思考に手は加えられていません。

もちろん、特定の思考傾向を持った人物を配することでレッド様

を誘導することはできませんが、真実決まったシナリオはないのです】

「で、その結果がトキワジムが全焼と…」

少女のジハードもほけえ、と消火活動を見上げている。トキワジムは体育館ほどの大きさがある、立派な建物だったのだろう。しかし今は見るも無残。ここでバッジを貰おうと来た人にとっては残念な事態だ。他のバッジを取り終えるまでに治っていると良いなあ、と他人事丸出しな思考でレッドは思う。

「お、レッドか。ちょうどいいところに」

突然肩をたたかれる。振り返れば、懐かしい顔があつた。懐かしいといつてもあつたのは一昨日のことなのだが、濃密な一日がそう思わせたのだろう。

「グリーン！」

少女に頭を凹まされたライバルのグリーンである。彼は健康そのものの顔で、よ、と手を挙げる。元気そうな様子に安心した。

「今暇か？ いや、何か用事がないんなら付き合ってくれ。一人じやあ不安だな」

グリーンはソワソワと街の東側を見ながら言う。この身はグリーンの友達だという設定で、グリーンはレッドの性格の変化を当然と受け止めるように思考回路を誘導されているNPCらしい。つまり未だに向こうはレッドのことを友達だと思ってくれているのだ。そこはメッセーじさんが太鼓判を押してくれているので問題ない。

設定上とはいえ友達の頼みだ。暇だし手伝うのもやぶさかではないが、いったい何を手伝うのか。その辺を聞いてからにしたかった。

「じゃあ歩きながら説明するよ。できればポケモンはボールに入れておいてくれ」

不満そうな少女にボールに入って貰うと、グリーンはせかすように街の東へ歩き出した。確かあっちには山があるだけだ。道はない。

「実は俺、この火災の犯人を見たんだ。その片割れをさっき見つけてな。尾行しようと思ってる」

そう呟く顔は、冗談を言っている風には見えなかった。

グリーンが尾行する相手を見て、レッドは声をあげそうになった。

ロミアス！

ここに来る途中ですれ違った緑髪の青年だ。特徴的な服ではなく

なっていたし帽子で髪を隠していたが、チラッと顔を見たところ間違いがなかった。

物陰から買い物をするロミアスを見つつ、グリーンは小声で喋り出した。

「昨日の夜、ヒトカゲが急に騒ぎ出して、俺は宿の人の迷惑になると思って外に出たんだよ。そしたら、あー、俺が泊まっていたのはポケモンセンターの無賃宿で、だからトキワジムのすぐ裏だろ？俺が出たところ叫び声がしてな。何か険悪な様子だったから隠れて見て見たんだよ。別に酔っ払いの喧嘩だったら放って帰ればいいし、誰かが絡まれていたりしたら助けたいと思って」

自分の少年臭い正義感が少し恥ずかしかったのか鼻をこすり、グリーンは続けた。

「そこにいたんだよ。あの緑色の髪した男と、水色の髪をした女だ。影になって見えなかったけど、誰かと言い争ってた。そのうちポケモンバトルをしまして、バトル領域で区切られて、こっちに声が聞こえなくなったから、ヒトカゲも寝てたし、俺は帰ったんだよ。ただの喧嘩かってな。でも、今朝起きて見ればトキワジムが燃えてるし、あれはきつと関係あると思うんだ。犯人って決めつけるのは違うかもしれないけど、話を聞こうと思って。あ、動くぞ」

ロミアスは多くの食糧を買い入れ、さらに幾つかの衣料品をまとめて買って、早足で歩いていく。隠れながらついていくのは割ときつかった。トキワシティに街路樹が多くて割と助かっている。

息を切らしながらレッドは応えた。

「わかった、手伝うよ。時間はあるし」

良かった、とグリーンは笑った。

「あいつら凄くレベルの高いモンスター使ってたから、一人じゃ不安だったんだ。お前がいて良かったよ」

「え、レベル高いのは……何もできないかも」

「隣にいただけで良いんだ。俺が心強い」

グリーンは言い切った。決して撃たないけど懐に入れておくと度胸が持てる拳銃のような扱いだった。

レッドは自分になる前の主人公がどんな友情を育んでいたのか知りたくなった。また、このグリーンの期待を裏切りたくないな、とも。

ロミアスは街の郊外まで来て、辺りを見渡すと山の中へと踏み込んだ。

「もしかして、仲間が怪我でもしてるのかもな」

道路の汚れを見てグリーンは言った。良く見ると、それは渴いた血液に見えなくもない。

「後を追おう」

ロミアスを追って踏み込もうとするグリーンを、レッドは止めた。服の後ろを掴んだので首が詰まってらしい。グリーンは不機嫌な声で囁いた。

「なんだよ。怖くなったのか？ いやいきなり連れてきちまって悪いとは思ってるけど……」

「そうじゃないって。見て」

レッドが指差した先を、グリーンも見る。指差した先には、ごく細い糸が張ってあった。光の当たり具合によつては全く見えないほど細い。

「何か分からないけど、あの人もここを通る時ちよつと大きくまたいでた。きつと踏まない方がいい」

「おお、マジか。良く見てるな」

「たまたまだよ」

謙遜ではなく真実だったが、グリーンはニヤリと頬を歪める。

「そう言うことにしておいてやるよ。じゃあこの先も気をつけていこうか。またこんなのがあるかも知れないし。頼りにしてるぜレッド」

「たまたまなんだけどなあ……」

レッドはぶつぶつ言いつつグリーンの後に続いた。



ロミアスが通った場所は割と分かり易かったが、木々に覆われた山道は険しく、道なき道を進む二人はすぐに汗まみれになった。上手く根の上を歩けた時はいいが、乾いていない土を踏んだ時は足が沈み込み、靴に泥という重りが付いてくる。グリーンも苦しそうだ。笑いそうになる膝を叱咤しつつ、なぜグリーンがここまで執拗に犯人を追うのか、少し気になった。

「そんなに思い入れのあるジムじゃなかったんだ」

尋ねて見ると、案外簡単にグリーンは喋り出した。

「クチバシテイってパツとしないだろ。タマムシシティやグレン島みたいに特色があるわけでもないし。でもさ、ここセキエイ高原に一番近いから、俺、全部のバツジ集めてからここで最後のバツジとってチャンピオンロードに挑もうと思ったんだよ。なんか勢いに乗れる気がするだろ？」

チャンピオンロードがあるセキエイ高原に一番近い街は確かにここだ。レッドはうなずき、先を促した。

「そう思うとさ、ここの無駄に立派なジムとかが特別に思えて、来た日は2時間くらい眺めてたんだよな。ヒトカゲが腹減ったって鳴かなかつたらもつと見てたかも。だけど今朝起きたら燃えてて、つまり、俺かなり腹が立ってんだよ」

要領を得ない喋り方で、最後のところだけ言えばいいのにダラダラと話されて理解に時間がかかったが、まあ、思っていることは伝わった。

「追いついて、どうするの？」

「分かんねえ。でも、なんで燃やしたか聞きたいかな」

やがて行く手に洞窟が見えてきた。入口に足跡が入って行っている。グリーンと顔を見合わせ、互いに頷いてゆっくりと中に侵入した。

洞窟の中は暗く、明りがなければ相当危険そうだったが、今は別だ。バトル空間の緑色の光で照らしだされたそこではバトルが行われていた。レッドとグリーンはサツと入口近くの岩陰に身を隠す。

見覚えのある水色髪の女の人とロミアスに、一人の男が対峙している。濃紺の髪をした端正な顔つきの体の細い男だ。タツグバトルのように見えるが、一人一体しかモンスターを出していない。状況がつかめなかった。

男が呟く。

「ウンガガ、『ほのおのパンチ』！」  
「ブオオオオオオオオオオッ！」

牛の顔をしたニメートル半はある大きなモンスターが、咆哮する。同時に右腕から炎が発生し、白熱した。周囲が陽炎で揺らめくほどだ。

牛男は雄たけびとともに炎を纏った腕を振り上げロミアスのモンスターへ叩きつける。熱気が渦巻き、赤黒い牛人間の体が残像を残すような速度で動いた。

しかし攻撃はロミアスのモンスター、ストライクの体を素通りして、地面を砕いただけだった。陥没し熱された地面が硝子のように結晶化する。良く見れば、ストライクの体が三つある。そのうち二つ

が幻影だともいうのだろうか。

「『かげぶんしん』は厄介ですね……」

「ミノタウロスの攻撃など、まともに受けてなどいられないからな。ストライク、『つばさでうつ』だ！」

ヒイン、と羽を震わせストライクがふわりと舞い上がる。次の瞬間、ミノタウロスの体から耳が張り裂けそうな破裂音がし、ミノタウロスが壁へと叩きつけられる。高さ4メートルはあるかという壁の上から下まで亀裂が走った。

「ヤドラン、『サイコキネシス』」

追い打ちをかけるように、女の人が低く言う。彼女の前にのぼーと立っていたヤドランが、腕を上げた。

指先の空間がぐしゃりと歪み、ミノタウロスが叫びつつ顔を抑える。指の間、目と耳と口から血が噴き出し、ミノタウロスは地面へ倒れ伏す。その体が薄れるように消え去った。

バトル終了とみなされたのかバトル空間が消滅していく。

男が舌を打ち、懐から緑色の紙を丸めた物を取り出した。巻物のようだ。

「口惜しいですが、二対一では仕方ありませんね。出直しです」

「テレポートの巻物だと!？」

「……次は必ずあなた方を連れもどしますからね」

「私たちは話し合いたいただけなのだけど」

「話し合いの余地はありません。あなた方は罪人です。弁解は森に戻ってから首長にどうぞ」

「断るわ」

「でしょうね」

男は皮肉気にそう言うと、広げた巻物へ噛み千切った指先を走らせ、血で線を引く。巻物が眩く発光し、男の体が掻き消えた。

ロミアスがおいおい、と呟く。

「あいつ、金を払わずに逃げたぞ……」

「もう、そんなことはどうでもいいわロミアス。それより……誰かに見られてるわ」

女の視線がヒタリと張り付くようにこちらを見る。

「！」

体がびくりと跳ねるようだった。レッドの肩を上から押さえつける物がある。グリーンの手だ。僅かに震えるその手から、彼の決意が伝わってくる。

（何をするつもり！？）

しかしレッドはどうすればいいのかわからない。グリーンがすうと息を吸い、飛びだそうとする。それを制するように、女の人が呟いた。

「アイテムがないから口封じは難しいわね。ロミアス、逃げましょ  
う」

「ケガはもう大丈夫か？ それに……何も言わなければ恐らく誤解されるだろう」

「……どちらが正しいのかわんて、分からないわ。何が誤解かも、ね。それより、私たちにはあまり時間がないわ」

「そうか」

一つ頷き、ロミアスはストライクを仕舞って新しいモンスターを呼び出した。レッドも見ただことのあるモンスター、プチだ。ただ、体の色は赤く、白い大きな羽が生えている。進化先だろうか。

ふわりと浮きあがるプチに、ロミアスがするりと縄をかけ、女の人と共にその縄につかまった。

「羽プチ、『そらをとぶ』だ」  
「ミ、っ！」

可愛らしい鳴き声と共にプチが羽ばたくと周りの空気が渦を巻き、こらえきらずに目をそらす。

岩に隠れるグリーンとレッドの上を、高速で何かが通り過ぎ、洞窟の外へと逃れていった。

「ま、まてえ！」

グリーンが完全に遅れたタイミングで叫ぶと、洞窟内に、まてー、まてーと反響するばかりで、当たり前だが返事は帰ってこない。切なさが増える彼の背中をとりあえずレッドは慰めた。

「ま、まあそんなこともあるよ。グリーンは頑張ったさ。ドンマイ」  
「う、うるせえー！」

グリーンは恥ずかしそうに叫んだ。

街に戻る途中、緊張から解放された反動かグリーンは喋りとおし  
だった。

「いや、火事のことを聞けなかったのは残念だけだよ。なんか俺、  
やる気が湧いてきた。だってあの人たちが使ってるの知らないモン  
スターばかりでさ。技もすげえ強いし、なんかワクワクしてきた  
ぜ！ レッドもそう思うだろ！？」

「うん、まあね。羽プチとかどう見ても羽スライムのパクリだった  
けど」

「スライム！？ あんな酸で溶かしてくるようなグロい奴らとプチ  
を一緒にスンなよ！」

「え、ええー…」

意味不明なんですけど。ここのスライムって酸をはくの？

困惑するレッドの前を歩きながらグリーンは洞窟の中のことを思  
い出して興奮しているようだった。

確かに、上級者の戦闘が見えたのは良いことかもしれない。ここ  
に来る前、少女のジハードが二人の去った後をじつと見ていたのは  
彼らの強さを感じ取ったのかもしれないなあ、とレッドは思った。

「それにしてもよ」

山を下りたくらいで、グリーンが切り出した。靴の裏に着いた泥  
を木の枝でこそぎ落しながら、靴を軽くしようとしている。レッド  
のシューズも裏や横に土がひっついてかなり重かった。

「なんか罪人とか言ってたけど、何だっただらうな」

「さあ、ね。火事に関係あるのかな」

「普通に考えたらそうなるけど、俺、そうは思わないね」

グリーンは枝を放り捨てながらこちらを見た。空はもう夕焼けが沈もうとしており、グリーンがなんかイケメンに見える。もともとか。

「俺風が吹いたときに見たんだけど、あの人たち耳が尖ってた。エレアだよ。もしかしてロケット団の奴らかも」

「ほう……」

まったく分かん。耳が尖ってた エレア ロケット団という論理構造全てが分からない。ロケット団以外の言葉の意味も不明だ。あとでメッセーじさんに聞かざるを得ない。

「ロケット団が関わってるとなると、一気にきな臭くなるなあ」

「そうだね」

その後も魔法の言葉、「そうだね」を連発して何を逃れようとしたレッドだが、いつの間にか明日の朝に、ポケモンバトルをするこ  
とになっていた。

「よし、朝十時な。遅れんなよ！」

「そうだ……何だと!？」

「あー、今日は疲れたなー。なんか旨い物食べてゆっくりするかー」

グリーンはすでに夕食のことで頭がいっぱいのようなのだ。ちよつとそこどころk w s k! と叫びたい気分だったが、まあいいか、  
と思い直す。



今日のバトルを見て、感化されたのはグリーンだけではない。レッドもポケモンの可能性を感じて大いに興奮しているのだ。

確かにこれはバトルでもしなければ治まりそうにない。その相手として戦うのがグリーンなら、望むところである。

「相手として不足なし、だね」

屋台のおじさんが、何言っただこのガキ、みたいな視線で見ていることに気づき、レッドは慌てて、キリッとしていた顔を直し、そそくさとポケモンセンターへ歩き始めたのだった。

## 第六話 ウンガガは死んだ（後書き）

お気に入りを入れて下さっている方、ありがとうございます。  
マイナー作家ですが、頑張らせていただきます。

## 第七話 カブトムシの本気（前書き）

ちよつとエグイ描写あり。

## 第七話 カブトムシの本気

太陽が高く上がったお昼時。

レッドはポケモンセンターの待合室でイライラしながら名前が呼ばれるのを待っていた。

ポケモンセンターはコンビニくらいの広さしかないが中には人がかなりいる。3階建てで地下まであり、一階は各業務の窓口として機能しているのだらう。隣に体の大きい人が座って窮屈だったが、イライラの原因はそれだけではなかった。

「5番の番号札をお持ちの方ー」

ハツと顔を上げ、小走りに受付へと向かう。のっぺりとした顔の看護婦さんが業務用の笑顔でモンスターボールを渡してきた。

「はい、すっかり元通りですよー」

モンスターボールの中には金髪の少女がいて、レッドを見ると内側をバンバンと叩き始めた。レッドは安堵の息を吐く。

（良かった……）

ジハードだ。元気そうだ。ポツポの風起こしでバラバラになった時は心臓が止まるかと思った。

生き返ると知識で知っていても、不安なことは不安だった。

そう、レッドはグリーンにバトルで負けたのだった。

レッド氏はかく語る。

いやあ、あれは無いですよ。僕なんか一匹しか持っていないのに、グリーンは3匹もモンスター連れてたんですよ。それにですね、あいつ、ヒトカゲを捨て駒にしたんです！ 許せない！ 尻尾を振るだけの要員にするなんて！

ヒトカゲはどうしたかって？ ヒトカゲは尻尾を振り続けた後、水の入った風船みたいに弾けて死にました。少女のナイスキックが炸裂しまして。ジハードに容赦って言葉は存在しません。

ええ、ジハードだって頑張りましたよ。その次に出てきたポップの『でんこうせっか』を二回耐えきって、お返しにミ

ンチにしてやったんですから。でもまあそこにグリーンが出てきたのがまたポッポ！ お前どんだけポッポ好きなんだよ、っていうね！ 明らかにこっちの弱点を突く気満々じゃないですか！

ああ、それで『かぜおこし』されて少女は死にました。カマイタチでバラバラになって……。あいつ、ヒトカゲのレベル上げずにポッポのレベルばかり上げてたんですよ。ヒトカゲに愛想尽かされてしまえばいいのに。

はい。正直やる気が無くなりました。少女をこんなにしてまで旅を続ける意味はあるのかなって。でも、少女がリベンジに燃えてるんです。僕が怖気付いてる場合じゃないですよ。一緒に血祭りにあげてやろうって少女と誓い合いました。

『はい、新人トレーナーのレッドさんでした。良い笑顔でしたね！ ぜひりベンジ頑張ってほしいです！ 以上、タマムシテレビ、』  
突撃 新人トレーナー』のコーナーでした！』

インタビューに言いたいことを吐きだしてすっきりしたレッドは、打倒グリーンに燃える少女と一緒にポケモンセンターを出た。

ジムが燃えたことでこの街の機能はかなりの割合で停止してしま

っている。本来なら、武器を売っているという武具店で少女の武器を棘バットに変更してやるところだが、武具店もあおりを受けて臨時休業中である。ジムではバトルではなく戦い方の訓練ももらえるようだが、それもできない。

アイテム屋さんでドロップ品の骨やら皮やらを売り、回復薬や食糧を購入すると、トキワシティでやることは今のところなかった。そしてお金も残り20円になった。

「よしジハード！ 次はトキワの森だ！ 芋虫どもを潰しに行こう

！」  
「」

ショックによってややダークサイドに落ちてしまったレッドは少女を引き連れ、意気揚々とトキワの森へ向かうのだった。

そう言えば聞き忘れていたことをメッセージさんに聞いてみた。エレアという耳の尖った種族と、ロケット団についてである。

【聞き込みとかならないのですか？】

「あ、いや、メッセージさんの美しい声が聞きたいんだよ！」

【またまた…お世辞がお上手ですね。ホント】

そう言いつつも悪い気はしてなさそうな声音である。

【では、お答えしましょう。エレアとはエルフの末裔です】  
「エルフ？」

【はい。そして彼らはその希少性と美しさから観賞用としてもつばら剥製を求めるために殺されるのです。殺しても生き返る世界なので何度も何度も。捕まえて媚薬浸けにし、気持ちいいことをするために飼うこともあります。女性の方が人気ですね】

「エグイなあ……」

そんな厳しめのファンタジー設定はいらないなあとレッドは思っ

【ロケット団はポケモンや兵器を使って世界征服をたくらむ組織です。彼らは構成員の多くがエレアだと言われています】

「兵器まで使うのか……」

そりゃあ酷い扱いされたら世界征服もしたくなる。レッドは深く納得した。この世界のロケット団には正当性があるような気がする。協力を求められたら応じてしまいかもしれない。

「なんにしても、よく話を聞いてみないとね」

あの二人連れにあつたら話を聞いてみようと、レッドは思った。

トキワの森は木々の疎<sup>まば</sup>らな開けた森だ。



踏みならされた道は土が露出し、歩きやすい。日光を適度に遮る枝葉が快適な空間を作り上げ、まるで散歩のためにあるようだ。半日はかかる広さだったが、歩き始めたばかりなので、レッドはまだまだ元気である。レベルが上がってパワフルさが増した少女は言うまでもない。

その二人の前に一人のトレーナーが木の陰から躍り出てくる。

「今こっちにキャタピー逃げてこなかった!？」

麦わら帽子に短パンを履いた活発そうな少年だ。手には虫取り網を持っており、虫籠のひもをたすき掛けにしていた。

「いや、見てな…」

「あ、お前トレーナーじゃん！ 勝負だ！」

「うわあ、強引」

言葉は途中で遮られ、有無を言わずバトル空間が形成される。レッドの左腕にはめている腕輪を見た瞬間目の色を変えて、虫取り少年は戦いを挑んできたのだ。

少年は虫籠からモンスターボールを取り出し、ポケモンを呼び出した。

「行けえトランセル！」

（でかいサナギが出たー！）

大きさが70センチほどもある大きなサナギが地面に突き刺さるように立っている。少女を睨みつける目が、闘志にあふれていた。

「さあお前の強さを見せろトランセル！」  
「……………」

が、所詮はサナギである。  
硬くなることしかできないトランセルは、二発で沈んだ。少年の持ちポケモンはトランセルだけだったらしい。硬くなるだけのポケモンしか持っていないのに勝負を挑んで来るとは男気に溢れすぎて前が見えなくなっている。これは腕輪の効果なのだろうか。恐ろしい。

「と、トランセルうー！」

運よく形の残った（気絶で決着した）トランセルを抱えて男泣きする少年。

そんな子どもからお金をむしり取れる人間が居るだろうか。

「さあ、お金を出しなさい」

居るのである。ダークサイドに落ちたレッドにとってはむしろ余裕だった。

「くう、僕の小遣いが……………」

優しい口調のレッドに渋々差し出される84円。それでもレッドの財布の中身よりは多いところが泣けてくる。レッドはありがたく頂戴した。

【少女のジハードはレベルが11になった！】

【レッドのトレーナーレベルが2になった！】

【レッドの所持金が104円になった！】

「虫取り小僧の一郎を倒したらしいな！　だが、奴は虫取り四天王の中でも最弱！　本当の地獄はここからだと知るがいい！」

「ジハード！　『たいあたり』！」

ビチャア！

「ぼ、僕のキャタピーがあ！」

「うわあ……」

「一郎と次郎を下したか。しかし奴らは数合わせのための雑兵に過ぎん！　ここからが本当の地獄だと知れ！」

「ジハード！　『カラテチョップ』！」

どぶちゃあ！

「わ、私のコクーンがあ！」

「中からスパアになりかけのドロドロの物体が出てきてエグイなあ……」

「他の奴らはみんな倒されてしまったのか…ふがない…。弱らせることもできないのか。やはり四天王などというのは間違いだった。そもそも私が居ればうんぬんかんぬん」

「話が長いよ！ もう一回『カラテチョップ』！」

ズバーン！

「ま、真つ二つだとお！？」

「急所にあたったね」

四人の虫取り四天王とやらを倒し、さらに襲いかかってくるキャタピー、ビードルの芋虫ポケモン、上から落ちてくるコクーン、トランセルのさなぎポケモンを蹴散らしていると、少女のレベルは13になっていた。カラテチョップを覚えたのはレベル12になった時である。

そして満を持して登場したのである。彼らの親玉、虫取り魔王が。

突如として吹いた風にざわりと木々が風ぎ、レッドの心も栗立つようだった。

バトル空間が形成され、薄緑色の光に辺りが包まれる。レッドと対峙する男は不敵に笑った。

「子どもたちが世話になったようだね」

毛むくじやらの男だった。ランニングシャツに包まれた体は不節制の塊でメタボ腹が突き出している。麦わら帽をかぶり、首にはタオルを巻いていた。

「では始めようか。思いあがった子どもには罰を与えるのが大人の務め……出でよ！ カブトムシ！」

出てきたモンスターは黒光りする雄々しい角を持ち、6本の脚で地面を踏みしめる。レッドは思わずつぶやいた。

「ちっさ」

10センチしかなかった。これ、ただの昆虫じゃないだろうか。そこらの木から持って来たようにしか見えない。

虫取り魔王と自分で名乗ったその男は、レッドの顔を見て不愉快気に鼻を鳴らす。

「ふん、侮るなら侮ればいいさ。だけどこいつの肉は食べると筋力がつくんだぞ？」

だから何？

とりあえずバトルしないことには始まらない。レッドはバトルウインドウに技を入力する。一応PPなる物が設定されているが、知っているものの10倍はあり、たいあたりが350回使えるという時点で気にすることが馬鹿らしくなっていた。つまり技を使いたい放題である。

今回選択したのは『カラテチョップ』だ。威力が一番高いし良く急所に当たるので重宝している。250回使えるし。

第一ターン！

「私が先行だな！ 死ねえ！『つのドリル』！」  
「なッ！？」

10センチしかないカブトムシが、羽を広げて飛びあがる。ぴたりと空中で停止した虫は、その場で激しく横回転し、ドリルのように回りながら少女へと突っ込んだ。レッドは思わず呟いた。

「おっそ」

横回転は異常に速いが、進む速度はハエがとまるような遅さだった。

少女は避けた。大げさなまでに飛び退る。カブトムシはやや進路を変更するも、当たらずもなく、地面に墜落し、激しく掘り返して止まった。

シュールな光景にしばらく黙っていたレッドだが、とりあえず指示をした。

「あ、じゃあ攻撃で」  
「ふんぬうッ！」

加減という物を知らない少女のジハードは鼻息荒く、全力でチョップを振り下ろす。地面を割裂くような一撃はカブトムシの頭を叩き潰した。なんだかレベルが上がってこの森では無双状態である。

「あのね？ 君、レッド君って言うの？ もうちよつとさあ、優しくさっというのを大事にした方がいいと思うよ？ 僕のところに来た小学生泣いてたんだよ？ おじさん全然関係ないのに断りきれなくてさあ。何が魔王だ！ タダのカブトムシ養殖業者だよ！」

「ノリノリだったじゃないですか」

「お金まで取られて散々だよ！」

「200円だから良いじゃないですか」

「そうだけどね……」

失意に沈むおじさんを放って、レッドは歩き出した。大人が持つ金額として、400円は少な過ぎやしないだろうかと考えながら。

ちなみにカブトムシはElonaのモンスターらしい。

時間にしてお昼過ぎ。

グリーンが取った数で攻めるという戦法に少女をやられて、レッドは反感を覚え、もういつそ少女一体でクリアしてやる！ という気持ちだったのだが、そのポケモンが飛び出して来た時、少し考えてしまった。

「ピカチュー！」

アニメ版でのアイドル、電気ネズミである。このポケモンは少女が苦手とする飛行タイプの除去には非常に役に立つ。

捕まえるべきか……。いや、捕まえたところでピカチュウはそれほど強くなかった気がする。

「まあ攻撃を耐えることができたなら、でいいか。『たいあたり』！」

「ピガあああーッ！」

ピカチュウは断末魔を上げ、物理的に散った。どうやら少女は攻撃の上昇値が半端なく高いらしい。威力の上がり方がおかしいのだ。小さなお友達には見せられない光景の中、レッドは被りを振る

「こうなることは分かっていたのに、つついブーストしてしまう僕を許してくれ……」

「？」

哀愁を漂わせるレッドに、少女はクエスチョンマークを出しながらどこから持ってきたのかお肉をもぐもぐしていた。そして時折体を震わせている。

後で聞くと、少し耐電性能を得たらしい。一体何を食ったんだ。

その後、芋虫やさなぎや、時折ピカチュウ、そしてElonnaのモンスターである、カブトムシやムカデや大根みたいなモンスターを倒し、最後に森の出口に居た虫取り少年のタツヒロ君が出てきたビードルLv9を一発で倒し、レッドたちは森を抜けたのであった。





## 第七話 カブトムシの本気（後書き）

大根みたいなモンスター：マンドレイク

カブトムシ：カブトムシ

どちらもElonaのモンスターで特殊能力を持っていません。

なんだかダラダラ進んでいて申し訳ないです。起承転結はハードルが高いですね。

## 第八話 イシツブテが大きかった

ポケモン原作での序盤のルートは、以下である。

… > トキワシティ > トキワの森 > ニビシティ > 三、  
四番道路 > お月見山 > …

と言う訳で、トキワの森を超えたレッドはニビシティに着いた。  
石畳の道、博物館。そして初めてのジム戦がレッドを待ち受けて  
いる。

ここでやることは決まっている。ある一つの建物へと大股で歩み  
寄り、レッドは扉を開け放つ。カラン、とドアベルが鳴った。

「おじゃまします!」

レッドは驚いて口を開いたままこちらを見ている男に言った。

「強力な防具をください!」

そう、やることと言えばトキワシティで買いそびれた武具を買う  
ことである。できれば防具が欲しい。少女の撃たれ弱さは攻撃の高  
さに比例している気がするのだ。

そして、ジムは少女を強化した後に行きたい。

面と向かって叫ばれた男はしばし呆然とした後、気の毒そうな顔  
をしていた。

「あの、俺、客だから」

その男の指差した方を見ると、カウンターにいるお姉さんが生温かい目でレッドを見ていた。

「またお越しくださいませー」

やる気のない声と共に送り出されたレッドは気落ちしていた。  
お姉さんは言ったのだ。

「あのね？ 782円じゃ今どきモンスターボールも買えないのよ？」  
「SHIT！」

お金が足りないなんて！ レッドは欲しくてたまらなかった棘付き肩パットを泣く泣く陳列棚に戻した。少女の悲しそうな表情が超痛かった。

しかしあの肩パットは割引価格22万1980円。とても高い。  
ちなみにモンスターボールは値段が上がって一つ20000円だそうである。これも高い。

このままトレーナーからお金をむしり取ることを続けても全く足りそうになかった。

「ねえメッセージさん、お金を稼ぐにはどうしたらいいんですか？」

レッドの旅を補佐してくれる頼れるメッセージさんに尋ねると、  
簡潔な答えが返ったきた。

【ダンジョンに潜るのですよ】

「だ、ダンジョンかぁ……」

ついに来たかという気持ちであった。

母役のクワガタさんから教えられ、さらにタウンマップ上にもチラチラと名前が出ていたダンジョンが、お金を稼ぐ上では重要らしい。

【ダンジョンでは、多くのアイテムが落ちていますし、モンスターもいます。お金を稼ぐためだけでなく、力を付けてこれからの旅を快適にする上でも潜る意義はあるでしょう】

「そうかぁ……」

【しかし、ダンジョンは難易度に応じた数のバッジを持っていないければ入れません。少なくともバッジ無しでは赴くだけ無駄です】

ダンジョンとポケモンセンターはセットで、街中では無いのにポケモンセンターがあれば、そのポケモンセンターからダンジョンへと潜ることができるらしい。そこで同時に、バッジの数による入場規制も行っているようだ。

「ということは、先にニビジムを攻略しろと」

【その通りです】

かくて順序は前後することになったが、レッドはニビジムの中にやって来た。

ニビジムは、広い体育館ほどこの中に、幾つか部屋が設けてある。訓練室、休憩室、救護室、等等だ。

ここにいるトレーナーはジムに所属するトレーナーばかりではなく、レッドのように各地を放浪するトレーナーもいるようだった。

「ジムリーダーに挑戦したいんですけど、手順とか教えてもらっていいですか？」

受付のイケメンなお兄さんに聞くと、歯を光らせながら快く教えてくれた。

「ジムに来るのは初めてのようだな。ジムリーダーに挑戦するなら、まずはここに所属するトレーナーを持つているバッジの数プラス一人だけ倒してもらうことになる。この条件を満たしたうえで、ジムリーダーに挑戦できるのは月に一回だけ。もちろん申請して受理されてからだ。君のバッジの数に応じて、トレーナーは自分の戦力に制限をかけることになる。ここまでは良いか？」

ジムリーダーがトレーナーに合わせて戦力を変えていることはなんとなく想像していた。でなければ、タケシは弱すぎる。

レッドが頷くと、気さくなお兄さんはパンフレットを指でさしながら説明を続ける。

「トレーナーが忙しい時もあるから、順番待ちをすることもあるだろう。そんな時は休憩室でトレーナー同士の交流を深めると良い。人脈を築いておくといざという時に頼りになるからな。あとは……」

お兄さんがパンフレットをはぐると、施設の説明が書いてあった。

「トレーナーにアドバイスを貰ったり、トレーニングルームを使用したりすることもできる。それと、プラチナ硬貨っていう珍しい硬貨があるんだけど、これを使ってモンスターに技を覚えさせたりすることもできる」

「プラチナ……？」

「そう、プラチナ硬貨だ。人助けをしたりダンジョンのボスを倒したりした時に、強い感情の動きが結晶化するといわれているんだ。まあ手に入ったらラッキーだと思えばいいさ」

「はあ……」

「各施設の利用には仕様料の前払いが必要だから、何をするかは財布と相談するように。もちろんジムリーダーやトレーナーに対戦を申し込む時もお金がかかるぞ」

「え」

レッドの財布には782円しか入っていない。道中モンスターを倒してドロップした残骸（瞳・心臓・骨・皮）はまだ換金してないが、これは旅に使う諸経費に充てたいので、できればとっておきたい。

「料金はここだ」

ジムリーダーへの挑戦料：1000円。勝てば賞金30000円。  
トレーナーへの挑戦料：500円。勝てば賞金10000円。

指差されたところを見ると、パンフレットに載っている料金は安かった。大丈夫だ、これなら払える。

安堵の息を吐くレッドに、お兄さんは申し訳なさそうに笑った。

「いやあウチのジムも経営が火の車だね。とうとうお金を取るようになったのさ。さて、今ならトレーナーもあいているし、戦っていくかい？」

「ええ、ぜひ！」

勢い良く答えると、お兄さんはニヤリと笑った。

爽やかさと無縁なその笑みを見て、正直早まったかとレッドは思った。

『さあー！ 始めましたポケモンバトル！ 東から現れたのは、我がニビジムの誇るNo.2！ 頬笑みの貴公子、ダイゴロウだー！』



ワーワー！

『対して西から現れたのは、このジムへと殴りこんできたニューカマー！ 新人トレーナーのレッド君だ！ 連れているモンスターは相手を殺す気満々だぞぉー！』

ワーワー！

どうしてこんなに盛り上がっているのだろうか、とレッドはスポットライトで照らされつつ考えていた。ニビジムで一番面積を取っているそのバトル場は、観客席もしつらえられ、蛍光ボードには互いの名前と、賭けのオッズが映し出されている。

レッドが勝つと、28倍の配当金が貰えるらしい。どんだけ舐められているのだ、と思ったが、そもそもまだバッジを一つも持たないひよっ子だ。いずれ評価をひっくり返すにことにして、今は耐えるしかない。

「君のモンスターは『少女』か！ ちょうどいい、この間捕まえたポケモンの強さを試させてもらっよう！」

さっきの受付のお兄さん、微笑みのダイゴロウとやらが繰り出してきたのは岩だった。

いや、岩に見せかけて、腕も生えているし目もあった。

「ガッツイン！」などと叫び声をあげてファイティングポーズをと

るその岩は、恐らくイシツブテだろう。

そのモンスターを見て、レッドは疑問を感じる。

「あの…」

「なんだい？」

「大きくありませんか…？」

イシツブテはでかい。レッドの身長くらいある。確かイシツブテって20センチくらいじゃなかったっけ？

レッドの問いに、お兄さんは頷いた。

「うむ、良く岩を食べて育っている！ 果たして君のモンスターはこいつを倒せるか！？」

「せ、成長するんですね……まあやるだけやってみますけど」

ヒュオンヒュオン！ と槌を振りまわして、少女は構えを取った。殺す気満々でとても頼もしい。

おまけに、無駄に槌の扱いに慣れてきている。攻撃にはほとんど使わないのに。そして防御にも使わない。何のためにあるんだアレ。

互いにバトル画面に入力を終わると、視界の人が叫んだ。

『互いに準備は良いな！？ では構えて、バトルう、スタぁートゥッ！』

第一ターン！

「先手はこっちだ！ ジハード、『からてチョップ』！」  
「キイエエエエエッ！」

どこからそんな声が出るんだという奇声を上げつつ、少女は飛びあがる。レッドの言葉によって鈍く輝くジハードが右手を高く掲げ、イシツブテの上に落ちるとともに振り下ろした。

ズグッ！

恐ろしい勢いの手刀が、たやすくイシツブテの岩の皮膚を切り裂いていく。そのまままで真つ二つに行こうという勢いで

「た、『耐えろ』 おおおおおお！」  
「フングウウウ！」

頬笑みお兄さんが頬笑みをかなぐり捨てて必死に叫ぶ。でかいイシツブテが顔を赤黒くしながら歯を食いしばり、ブルブルと震えた結果、少女の手刀は10センチくらいめり込んだところで止まった。観客席がどよめく。確かに高く飛びあがった少女の手刀がイシツブテを叩き切るのは格好よかった。騒ぐ気持ちも分らない。実況が絶叫する。

『た、耐えたあああああああ！ イシツブテ、何とか致命傷を耐えきりました！ しかしそのHPはすでに残りわずか！ 恐るべきは、少女の攻撃力！ レベル差が10もあるイシツブテをあわや一撃で倒すところでした！』

「え」

やばい、確認し忘れていた。バトル画面をみるとイシツブテのレベルは何と23もあった。最初のジム戦で出てくるレベルじゃないふざけんな。

お兄さんがニヤリと笑う。

「耐えきつたらこっちのもんさ！ 行けイシツブテ！ マグニチュードだ！」

「え、それ初代の技じゃないですよね……」

すでにブーストを使っているためタダ技名を叫んだだけだが、イケメンのお兄さんがやるとそれだけで様になる。羨ましい限りだ。

イシツブテは「ガッツイン！」とまた謎の叫び声を発し、地面へと両腕を叩きつける。

ゴオン、と地面が揺れ、少女の周りが唐突に隆起した。周囲を囲まれた少女に逃げ場はない。

折りに囲まれた少女の足元から最後の岩が隆起する。

ドゴオ！

下からはね上げられた少女が、地面に落ちる。すぐに立ちあがったが、足取りは怪しい。やはり防御の薄い少女は、被ダメージが大きい。

「く、頑張れジハード！」

レッドは歯ぎしりしながら、少女を見る。少女は痛みを隠せないながらもニコリと頬笑み、す、と親指を立てて見せた。

「ジハード…！」

あまりの勇姿にレッドと観客の一部がキュンとした。

## 第二ターン！

「いけえええええええ！」

「ウオリヤアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

雄たけびと共に少女が再度飛びあがる。スポットライトに照らされたその様はまるで天使のようだ。高々と掲げられた右手刀がイシツブテの頭部の亀裂に向かって、全身の力を収束して振り下ろされる。

頬笑みの貴公子はまた頬笑みをうつちやって絶叫した。

「『逃げる』イシツブテええええええええええええええええええ！」

ブーストがかけられ、イシツブテの動きが急に素早くなる。両手を地面に着き、跳ね上がるように移動する。

このままでは当たるかどうか微妙なところ。すかさずレッドも叫んだ。

「させるか！ 『外れるな』 ああああああああああ！」

トレーナーの叫びは現実を望んだ方向に捻じ曲げる。

少女の手を振り下ろす軌道が急激に曲がり、右斜め45度の角度から、飛びあがったイシツブテへと叩きつけられた。

ズバァン！

その斬撃、イシツブテの体の上三分の一を切り飛ばし、イシツブテだった物（大）とイシツブテだった物（小）が次々と地面に落ちて砕け散った。

『決まったあああああああ！ レッド選手の勝利！ まさかまさか、頼笑み貴公子を下すとは！ トレーナーレッド、大金星です』

【少女のレベルが二つ上がった！ レベル15になった！】  
【レッドのトレーナーレベルが上がった！】

ウオオオオオオオオオオオオ！

観客席から怒号のような歓声がする。勝者は狂喜し、敗者はチケツトを破って投げ捨てる。競馬場のように賭けに敗れた人々のチケツトが紙吹雪のように舞っていた。

雪のように舞う紙の中、少女がトコトコ戻ってくる。

「むふー」

「お疲れ様だね。偉い偉い」

頬を赤くして鼻息荒く戻って来たジハードの頭を撫でてやる。岩

を砕いた手が痛くなつてないか心配だったが、ちょっと赤くなっているだけのようだった。技を出す時は特殊なエネルギーが何かで保護されているのかもしれない。

微笑みの貴公子を見ると、イシツブテの残骸を暗い表情で見ている。レッド的にはやる前から分かり切っていた結果だったのだが。

そもそも鈍足な岩タイプを相手に少女が先手を取れないはずがない。少女は格闘タイプで、格闘タイプの技は岩タイプのポケモンに効果抜群である。そして少女は攻撃力の伸びが高い。

レベルが高かったのは予想外だが、それでも負けは無いとレッドは思っていたのだ。

「イシツブテLv23でも敵わないとはな」

「バツジ無しのトレーナーになんてLvのポケモンを…」

レッドが火ポケモンしか持つてなかったら確実に負けていた。反則じゃないのだろうか。

類笑み貴公子の叫びのせいで危ない場面もあったし、苦しい戦いだったと言えるだろう。

【そのお陰で、レッド様のトレーナーレベルも上がっていますよ】  
「あ、そうなんだ」

トレーナーとのバトルに勝つとトレーナーレベルと言うレッドに設定されたレベルも上がるらしい。これが高くないと懐いてないポケモンを複数所持することができなかったり、魔法具とやらが使えなかったり、魔法とやらを使えなかったりするらしい。

トレーナーレベルが上がれば、ポケモン同士を遺伝子配合させるというドラ エモンスターズみたいなこともできるようになるとか。

レベルが低い今はそれほど変化はないようだが。

【加えて、少女のジハードが新しい技を覚えたようです】

少女が新しく覚えた技がバトル画面でキラキラ輝いている。

『たたきつける』と書かれている。

（うわぁ……またエグそうな技だなぁ……）

叩きつけて何かがパンと弾ける光景が目に見え、  
強力的な攻撃技が増えたのは素直にうれしい。

【登録しておける技は4つだけです。どの技を消去するか選択してください】

「うーん、じゃあ……たいあたり」で

【消去します】

これで、槌を使うことも増えるだろう。無駄にならなくて良かったというべきか。

悔しそうな頬笑み貴公子からお金を受け取りながら、そのようなことを考えていたその時だった。

司会の男が、なにやら緊迫した声で喋り出した。

『ただいま入ってきた情報だ！ 心して聞いてくれよ！ ニビシテ  
イの博物館に先ほど侵入者があり、現地のトレーナーとポケモンバトルを始めたようだ。危険は無いと思うが、もし間違ってバトル空間に巻き込まれたりしたら悲惨なことになる。お客様はひとまずここで待機してくれよ！ それとトレーナーの諸君！ 我こそはとい



う者は現地向かい、ニビジムのトレーナーを援護してやってほしい！ 博物館を襲った奴らの名前は　　だ！』

ワーワーと煩くなる観客達の声の中、アナウンスはかき消される。それに気づいたのだろう、司会役だった男は声を張り上げ、繰り返した。

『　　もう一度繰り返す！ 襲ったのは、ロケット団だ！ トレーナーの諸君、健闘を祈る！』

第八話 イシツブテが大きかった（後書き）

1 / 7 誤字修正

## 第九話 レッドは居なくてもよかった（前書き）

微笑みの貴公子ダイゴロウは前回レッドが戦ったトレーナーです。  
念のため。

## 第九話 レッドは居なくてもよかった

司会役の人がマイクに向かって叫ぶ。

『トレーナーは支給品を受け取って、博物館へ急いでくれ!』

その言葉で動きだしたのはレッドの他にもいるようだった。

「これが支給品よ! 活躍に応じて報酬も用意してあるから、頑張っ  
てね!」

「はい! 頑張ります!」

レッドはアイテムの入った袋を受け取り、他のトレーナーたちに  
続いて戦場へと走った。渡してくれたのは昨日武器屋でレッドを可  
哀そうな子扱いしていた店員のお姉さんだ。さっきニビジムのトレ  
ーナーを倒したことで少しばかりは期待されているということだろ  
う。

走りながら袋の中を確認する。

『きずぐすり』が5つ。大盤振る舞いだった。アイテム屋で買う  
とレッドの所持金では足りそうにない。

活躍しなければあとで料金を徴収されて借金をする羽目になるか  
もしれない。

「これは頑張らざるを得ない…!」

とりあえず少女に傷薬を渡した後で(少女は容器をひっくり返し  
頭から浴びていた)気合いを入れるレッドの肩が叩かれる。さっき  
戦った微笑みの貴公子ダイゴロウがレッドと並走していた。

「そんなに硬くならなくても大丈夫さ！ 一人でダメなら協力すればいいんだから！ 危なくなったらぜひ頼っておくれ！」

「ええと、いいんですか？」

「もちろんさ！ 僕のポケモンはイシツブテだけじゃないってことを見せないとね！ だから守りはまかせてくれ！ その代わり、君のポケモンの攻撃力は頼りにさせてもらおうよ！」

そう言つて、ダイゴロウは歯を光らせる。イケメン過ぎてレッドには眩しかったが、ジハードを評価してくれるというのは自分の事のように嬉しかった。

「は、はい！ ジハードとやれるだけやってみます！」

「その意気だ！」

周囲のトレーナーたちも「俺もやらねえとな！」「あなたの出番はないわよ！」などと喋っている。レッドと共にジムを飛びだしてきたのは7人ほどもいたのだ。その内5人ほどはジムバッジを二つ以上胸につけている。そして、上着を羽織ったダイゴロウの胸には、7つのバッジが付いていた。

（ロケット団がどれくらいいるか知らないが、これなら大丈夫なはずだ…！）

などと無意識でフラグを立てつつ、レッドは走る。すぐに博物館が見えてきた。

博物館前の道路は破壊後で瓦礫の転がる酷い有様だった。

「もう少しだ！」「あの化け物をぶつ殺せ！」「畳みかける！」

巨大なモンスターに無数の攻撃が集中する。氷塊が、水流が、急速に成長し隆起した木の拳が、次々に当たり、破碎音を響かせる。

【ポケモンバトルは一对一でやることが暗黙の了解ですが、多人数対多人数でも二勢力に分かれてバトルすることは可能です。また、すでに出来上がっているバトル空間から外に出ることはできませんが、外から中に侵入することはできるのです。その場合どちらに着くか選択でき、ポケモンごとの素早さや技によってターン内に行動できる順位が決まります】

「それがこの光景なのか……！」

博物館とその前の道路を飲み込んで巨大なバトル空間が出来上がっており、その中には20人を超えるような人間が居た。

しかしほとんどが黒づくめの人間だ。おそらくロケット団。それに対し、こちら側と思われる人間は一人しかいない。

その一人、短い髪形で目が糸のように細い男に向かって微笑みの貴公子ダイゴロウが叫ぶ。

「お待たせしましたタケシさん！」

「来たか！ 正直キツイ！ 次のターンから加勢してくれ！」

「わかりました！」

（あれがジムリーダーのタケシかッ！）

タケシのモンスターは、一身に攻撃を受けていた、巨大な人型のゴーレムであった。顔は無く、口だけがぽっかりと穴をあけている。赤黒く光沢のある肌をした、二階建ての家よりも高い怪物だ。

腕が異常に太く、ゴーレム自身の胴体ほどもあった。見ているだけで腰を抜かしそうな威圧感がある。

その頑丈そうな体も、多くの攻撃を受けたのだろう、ボロボロと表皮が剥落し、縦横無尽にヒビが走っていた。『やどりぎのタネ』と思われる巨大な種子もところどころめり込んでいる。

「最後だ！ みんなが加わる前に、一撃食らわせてやれアダマンタイトゴーレムッ！ 『おいわなだれ』！」

タケシの言葉によって眩く光ったゴーレムは、その巨大な腕を地面に突き込んだ。そして信じられないほど大きな岩塊を引き上げる。ゴーレム自身の三倍はあるような巨大な岩盤のような塊だ。直後ゴーレムはそれを放りあげる。あっという間に小さくなる岩塊。

「ルオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

歯をむき出しにして咆哮し、ゴーレムが跳びあがった。踏み込みによって地面に大きく亀裂が走る。

風が渦巻き、巨体だというのにゴーレムは投げ上げた岩に追いついていた。そして体をひねり、巨大なハンマーのような拳を岩塊へと叩きつけた。空中で砕ける岩の塊。

砕けた岩が次々と、その一つ一つが自動車ほどもあるような流星群となって降り注ぐ。

バトル空間の中はまるで地獄のようだった。空中から降り注ぐ災

厄は博物館を崩壊させ、無数のクレーターを作り上げ、その下でモンスターたちが次々と潰されて行く。巻きあがる土煙りに血霞が混じり、悲鳴が上がる。

それは人間すらも例外ではなかった。タケシ自身は上手く避けていたが、ロケット団たちにも直撃したのだ。

次々と潰されるロケット団の中、3人が岩をはね退ける。

「フツハハハハハハ！ さすがジムリーダー！ 一筋縄ではいかんなあ！」

「わ、笑っている場合じゃありませんよ！ ……仲間も増えましたし！」

「し、死ぬかと思っただであります！」

顔の濃い大男と、気弱そうな男、そして生真面目そうな青年だ。その三人は黒い服を着ていたが、他の者とは違って銀のラインが入った服である。

「幹部が三人も…！」

横でダイゴロウが苦々しげに呟く。初代ポケモンでは下っ端とサカキしかいなかったはずだが、このゲームではばっちり幹部が居るらしい。

その三人のポケモン、

カンガルーと恐竜を合わせたような姿のポケモン、ガルーラ  
水色の肌をしたキリットした河童みたいなポケモン、ゴルダック  
短い足に太い胴体、ヤシの木のような姿の、ナッシー

それらは全て生きており、避けたゴルダック以外はクレーターの



中からはい出しているところだった。伝説のポケモンがさらに混ざっていることにレッドは戦慄を覚えた。

「倒せないか……せめて幹部の一人くらいは脱落させておきたかったな……」

タケシが険しい表情で睨みつける。そのこめかみには汗が流れていた。

顔の濃い男が豪快に笑う。なんだかレッドのとり憑いた神様・オパートスを思い起こさせる笑い声で、レッドは彼が一発で苦手になった。

「下っ端と一緒にされてはかなわん。我々もこれが残り一体になっちゃったのだ。やり返させてもらおうでしょう！ ガルーラ！ 『れいとうビーム』だ！」

ゴーレムと相対していて分からなかったが、ガルーラもかなりの巨体だ。3メートル以上はある大きいガルーラが、口をあける。腹の袋の中で子どもも大きく口を開け、二つの口から吐き出された青白い光線がアダマントイトゴーレムへと直撃する。表面が凍りつき、その肌がビシビシとひび割れた。

続けてですます口調の生真面目そうな男が叫んだ。

「これで決めるであります！ 『はっぱカッター』！」

「ばっ、おい止める！ ワシらまで巻き込まれる！」 「は、早く伏せましょう！」

ナツシーが頭を揺ると、その頭頂部にある大きな葉がざわりと蠢き、急速に伸び始める。

それはぎゅるぎゅると互いに絡み合い、巨大な刃となった。ゴー

レムの身長ほど、つまり9メートル近くあるサイズだ。

「シャアアアアアアアアア！」

ナツシーは巨大な刃がついた頭を、ぐるりと振り回した。それは旋風を巻き起こしながら伏せた大男のすぐ上を通り、斜めの軌道を描いてゴーレムを上下に両断する。旋回して戻ってきた刃が、慌てて飛びのいたゴルダックの尻尾を掠り、地面へと落ちて深い亀裂を生んだ。

重々しい音を立てて斜めにずれ落ちるゴーレムの横で、タケシが悔しそうな表情をしている。

「行くぞ！」

微笑みの貴公子が険しい形相で叫び、レッドたちはバトル空間へと踏み込んだ。

正直レベルが違う。

役に立てるのか。むしろ邪魔にならないだろうか。

そのような不安を抱えるのは、やる気満々の少女を見てやめた。そもそも、死んでも生き返れるのだ。レッドも少女も。ためらう必要はないだろう。

「ダメだったら死ぬだけさ。行こうジハード！」

獰猛に笑う少女を引き連れ、バトル空間の中に入り込む。すぐにバトルウィンドウが展開され、『どちらの陣営に味方しますか？』という質問が出る。

『タケシ：残り一体、死亡五体』

『ギルバード：残り一体、死亡五体』

アインク：残り一体、死亡五体

アーノルド：残り一体、死亡五体』

濃い顔の大男がギルバード、気弱そうな男がアインク、生真面目そうな青年がアーノルドであった。

見る限りどちらかなり削り合ったようだ。味方する陣営に『タケシ』を選択すると、強烈な圧力を感じ、タケシの側へと押しやられる。

転びそうになって顔を上げると、タケシが細い目をこちらに向けていた。

「君も協力してくれるのか。頼りにしてるぞ」

「は、はい！」

手を差し出されたので握手でこたえる。タケシの手のひらはごくつととしており、力強かった。

に、とタケシは笑い、最後のポケモンを繰り出した。

ボールから光として飛び出したモンスターは地面に降り立つとともに瞬く間に巨大化する。

岩の連結した長大な体は、大きさなら先ほどのゴーレムに劣っていない。

タケシの代名詞とも言える、イワークだ。

「こいつらに貴重な化石を盗まれている！ 決して逃がすな！」

「おう！」

タケシにみなが叫び返し、次々にモンスターが出される。分かるモンスターはガーディとアーボックだ。

他の人のは緑色の髪をした幼い娘だったり、腕が四本ある仏像みたいなモンスターだったり、レーザーでできたボディスーツのような服を着込んだハードゲイだったり、まじめに見ていると頭がどうにかなりそうなラインナップだ。

頬笑みダイゴロウが出したモンスターがサイドンで、妙に安心した。

レッドは技を入力し、始まりを待つ。

第一ターンの！

「よし俺が最初だ！ いけハードゲイ！」  
『飛びこみ自爆』！

「Hooooooooooooo!」

ハードゲイはそれほど速そうには見えなかったため、恐らく電光石火＋自爆のような効果を持つ技なのだろう。

一番視覚的に危険だったモンスターが超速で走り込み、水泳の飛び込みのようにゴルダックへと突っ込んでいった。

カツ！

ハードゲイは内側から爆発し、ゴルダックがボロボロになる。黒焦げになって地面へと倒れ伏し、ピクリとも動かなくなった。

氣弱そつな男が唇をかむ。

「く……！ まさか最初から命を捨ててくるなんて……」

「どうせ俺のレベルじゃあ大した活躍できねえからな！ 結構ダメ

ージをくらってるようだったし、一番危険な奴を潰させてもらったぜ！」

確かに、『なみのり』などを使われたら一網打尽になる可能性がある。ハードゲイのレベルは25、敵のレベルは全部50以上だ。まさに一花咲かせたわけだ。

「ゴルダックが落ちて次は私たちみたいねガーディ。燃やしてあげなさい！『かえんほうしゃ』！」

凜々しい顔をした女性が叫ぶと、大型犬のようなサイズのガーディは毛皮を膨らませる。

逆立った毛皮から火の粉がちりちりと飛び散り、次の瞬間口から炎の奔流が吐き出されていた。

「つッ！」

思わずレッドが顔をかばうほどの熱量を撒き散らしながら、炎の奔流が ナッシーを飲み込んだ

葉っぱが一部燃え落ち、ナッシーが地面を転げまわる。

「ち、削り切れなかった……！」

「俺がやってやるよ！俺の妹Lv62ならいける！」

「お兄ちゃん！」

（妹？ ていうかレベル高っ！）

緑髪の幼い娘モンスターの頭を撫でていた男が、手を離して叫ぶ。

「『ばくれつパンチ』だ！」

「えい！」

気の抜ける声とは裏腹に放たれた矢のような速度で跳び出した少女が右腕を叩きつけると、ナツシーが恐ろしい勢いで吹っ飛び空中で爆発する。パラパラと焦げた残骸が辺りに振り注いだ。

アーノルドが啞然としている姿をしり目に、嬉しそうな顔をして妹が走って戻ってきて男の懷へと飛び込んだ。

「お兄ちゃんっ！」

「流石俺の妹だ！」

「ローランの攻撃力が高いだけじゃん。あんまり知られてないけどね」

女性が隣で呆れたように肩をすくめている。ローランと言うことは、妹って少女と同じように一つの種族なのだろうか。紛らわしい。タケシが叫ぶ。

「残り一体だ！ イワーク、『しめつける』！」

ギャルギャルと地面を削って岩の蛇が滑るように進み、その巨体をガルーラの体に巻きつける。

ギユチッ！

イワークの体でほとんど見えなくなったガルーラからすりつぶされるような音が響き、岩の隙間から血が噴き出した。

「ぬうう！ 小癪な！ 至近距離で食らうがいいわ！ 『れいとうビーム』！」

ビキビキと氷に覆われていくイワーク。同じ光景を見ているとい

うのに、タケシは笑みを浮かべてこちらを見た。

「これで、君の技がさらに効果を発揮するだろう？」

実はさつき見えてな、と言うタケシの言葉通り、レッドの選んだ技は相手が重ければ重いほど威力の上がる『けたぐり』だ。

ガルーラの体重と、それに巻きついていているイワークの分を合わせると一体どれほどの威力になるだろうか……！

「はい！ ジハード！ 『けたぐり』！」

「せええええええええいッ！」

すでに駆けだしていた少女は左足で地面を削ってブレーキをかけながら、僅かに露出したガルーラの足元へ滑り込み、レッドの言葉によってブーストのかかった右足をサッカーボールを蹴るように振りぬいた。

ズシィ！

空気が震えるような音が響き、振動が地面を揺らす。次いで、骨が折れる鈍い音が聞こえ、イワークに巻きつかれたガルーラが地面に膝をついた。レベル53のガルーラのHPが半分くらい削れた。少女のレベル15なのに、すごい威力だ。すぐにダイゴロウが叫んだ。

「タケシさん！」

「ああ、引けイワーク！」

微笑みダイゴロウは、イワークが退き、膝をつく姿を晒したガル



ーラを指差し叫ぶ。

「『とつしん』！」

その攻撃をレッドは見る事ができなかった。気づけばガルーラが血袋のように弾け、その血を被って雄たけびを上げるサイドンが居たのである。

とんでも無い攻撃力。

（正直僕いらなかったんじゃないか……？）

とレッドが思つのも無理がなかった。もう一人、仏像のようなモンスター、阿修羅を出していた人は攻撃の機会すらなかったので彼よりはマシかもしれないが。

「ふふ、俺何しに来たんだろうなあ……」

彼のセリフがひたすら切なかった。

【少女のレベルが4上がりました。レベル19になりました】

【レッドのレベルが4になりました。初歩的な魔法具が使用可能になりました。】

バトル空間が解け、無茶苦茶に破壊されていた博物館や道路が何

事も無かったかのように元に戻る。

外に待機していたジュンサーさんたちがロケット団を捕縛しようと殺到してきた時、とターンという銃声が続けざまに聞こえた。

「ぐっ」「げ」「あ…」

次々にロケット弾の幹部の頭が弾け、死体となり変った。唐突な出来事にレッドはうろたえる。

「な、何が……」

「あつちだ！」

声が上げた男は屋根の上を指していた。そこにいたのは、ロープをまとった人物であり、その手には銃身の長い銃が握られ、銃口からは硝煙が漂っていた。

「水を差すようで心苦しいですが、幹部候補生と言えども大事な人材なのですよ。それでは」

その人物は薄く笑うと、懷から巻物を取り出し、おそらく魔道具だったのだろう、跡かたも無く消え失せた。

「ど、どうということなの……？」

「うむ。おそらく、捕まえられては困る事態になったのだろう。人間は死体になると最後に行ったポケモンセンターで蘇生されるから、それを狙ってのことだろうね」

「ダイゴロウさん」

後ろからの声にレッドが振り向くと、ダイゴロウは頬笑み、道路を指差してみせた。そこでは薄れて消えていく3つの死体がある。

「でも、モンスターボール以外のアイテムや魔道具なんかの持ち物は基本的に放棄されるんだ。あの通り、盗まれた物もね」

ジュンサーさんがその場に残っていた大きな化石を拾い上げ、太った男性に渡している。あれが館長さんなのだろうか。

「なにはともあれ、無事に終わったというところかな」  
「はあ……」

ダイゴロウお兄さんは齒を光らせる。レッドは何もしてないような気分だったので微妙な返事しか返せなかった。

「そうそう、戦いに貢献した君には報酬が出ると思うよ。あとでジムによってね」

そう言い置いて、ダイゴロウさんはタケシと共にジムへと歩いて行く。

「まあ貰える物は貰おうか。ん？ ジハード？」

ジハードを振りかえると、彼女は蹲っている。苦しそうにうめき、体が薄くチカチカと光を放っていた。

「どうしたの……？ まさか腹痛！？ 拾い食いばかりするから！」

慌てながらもジハードの背をさするレッドに、メッセーじさんは冷静に言った。

【腹痛ではなく、レベルが規定値に達したので進化しようとしてい

ます】

「ええ！？ し、進化！？ 少女って進化するの！？」

【それですね、フラグを立てているため幾つか候補が選べるのです。どれにしますか？】

レッドの前に展開される画面には『ファイター格闘少女』 『チャーム淫乱少女』 『エ稲妻少女』という進化先が表示される。

（ど、どうしよう……）

思ってもみない展開にレッドは戸惑い、迷いに迷うのだった。

## 第九話 レッドは居なくてもよかった（後書き）

主人公が関わらない話は面白くないですね！  
すいませんすいません！  
明日からがんばる。

良く分からない一文を消しました。指摘感謝！

### 【用語】

なんちゃらゴーレム：なんちゃらのところに金属名やそれに類する  
名詞が入るゴーレム。希少な金属であるほど強い。

アダマントイト：Elonaの中でもっとも希少かつ有用な金属で  
す。アダマントイト製の武器は重いですが威力がとて高くなりま  
す。

## 第十話 少女がノー だった（前書き）

このゲテモノ気味な作品をお気に入りに入れてくれている方が10名もいらっしやるようです。

なんとまあ、物好き…ありがたいことですね！  
これからもがんばります！

## 第十話 少女がノー だった

『ファイターガール  
格闘少女』 格闘  
『チャームガール  
淫乱少女』 ノーマル／格闘  
『エレキガール  
稲妻少女』 電気／格闘

落ち着いて候補を考え、三つ示された進化先の内、とりあえずレッドは一つを除いた。

（淫乱少女は無いな。全然ない。言い間違えて淫乱処女とか言いそうになるし）

チャームされたら一発で落ちる可能性があるレッドは、そのような意味危険な生物に少女を進化させたくなかった。

そして残り二つ。ここまでくればもう決まったようなものである。

「苦手な飛行系を丸焦げにできる、これに決定だ！」

【進化先を指定しました】

少女が一際大きく震え、体を覆う光が強くなる。

「ウウ……ウアアアアアアアアア！」

カッ      と少女が輝き、戻った。

【『少女』のジハードは『稲妻少女』に進化しました。『でんきシヨック』を覚えました。忘れる技を選択してください】

バチバチバチ、と周囲に電気を撒き散らす少女がそこには立っていた。髪は逆立ち、ワンピースの裾が波打ち、髪に隠れていた緑色の瞳が露出している。まるで別人、スーパーサイヤ人2のような姿である。またその姿に見合うように、攻撃と素早さが1・3倍になっていることをステータス上で確認した。上がり過ぎだと思う。

しかし、近寄るだけで感電しそうだ。それとは別に衝撃的な事実もあって、ジハードにかける声は若干震えていた。

「じ、ジハード？」  
「？」

話しかけてみると小首を傾げる仕草は変わりない。レッドは密かに安堵の息を吐いた。突然饒舌になっていたりフハハ笑いし始めたかどうかと思うっていたのだ。

「何でもないよ。それよりそのパチパチって引っ込められないの？」

そう尋ねると、す、と電気は引いて行った。  
引っ込められるらしい。

バチバチしていた電気がなくなると、逆立っていた髪が戻り、以前の少女との違いがまるでなくなった。

「良かった…あのままだと頭を撫でるのに耐電グローブを買わなきゃいけないところだった」

レッドの言葉に不安になったのか、少女は頭を腕にぐりぐり押し



付けてくる。

進化しようと、口数が少なく精神の幼い少女なのは変わっていない。

苦笑しつつ頭を撫でる。まったく痺れない。手を離すと髪が数本ひつついてくるので静電気は発生しているかも知れないが、些細なことだろう。

「ジハードも強くなったし、報酬も貰えるんだ。参加して良かったかも」

ひとり言のように呟き、レッドはジムに足を向ける。

いや、向けようとして踵を返した。まずは服屋に行かないといけない。

なぜなら、さっきサイヤ人状態になってワンピースの裾がフワフワした時、少女は穿いてない娘であることが判明したからだ。

ちなみに技は『きあいだめ』を忘れさせて、『からてチョップ』

『けたぐり』『たたきつける』『でんきショック』という頭の悪そうな攻撃一本の技構成になった。

結局買い物に時間がかかったために、一晩ポケモンセンターの無賃宿で泊まらせてもらった明くる朝。

ニビジムはこの前よりも閑散としていた。恐らく多くのトレーナーが昨日のバトルで疲労し、ポケモンを休めているのだろう。

微笑みの貴公子さん他三名のジムトレーナーは昨日の事件を受けて街中を巡回しているようだ。受付をジムリーダーのタケシ直々に行っていた。

「協力ありがとうレッド君。これが君への報酬だ」

「え、と…これバッジじゃありませんか？」

渡されたのは岩を模した灰色の金属片だった。昨日トレーナーが胸に着けていたバッジの二つと酷似しているので、恐らくバッジに間違いない。

「その通りだ。昨日の攻撃は見させてもらったからね。あれなら、属性も手伝ってバッジ一つ相当の岩タイプなら一撃で沈むことになる。わざわざ自分のモンスターを砕かせるのは嫌なんだな」

目が細くて分かりにくかったが、タケシは多分ウインクをして、他のみんなには内緒だぞ、と言った。

「グレーバッジをつけていれば、君のトレーナーレベルに関わらず、モンスターを三体まで連れ歩けるようになる。そして、ほんの少しだけだがモンスターがなつきやすくなるよ」

「ははあ、便利ですね」

モンスターを連れ歩く数に制限があることを初めて知った。メッセーじさんは色々と説明が足りてないと思う。

「加えて、秘伝マシンのフラッシュをバトル中じゃなくても使えるようになる。とは言え、あんまりピカピカしているとバッジは没収さ

れるから節度を持ってくれよ」

没収とかあるんですね……

「さらに！ このバッジを持っているだけで君のポケモン攻撃力が一割増える！」

「ははあ……」

防御じゃないのか。

また、お金はやらないが技マシンはくれるというので技マシン「がまん」を貰った。2ターン我慢して食らったダメージを二倍にして返すという、壁タイプのポケモンのためにある技だ。

防御がふやけたダンボールみたいに弱い少女にはまるで向いていない。売るしかないような気がする。

最後に、タケシは真剣な顔つきになって、昨日のロケット団のことを話し始めた。

「これは昨日のメンツ全員に伝えていることなんだが、昨日戦ったロケット団の幹部候補たち、全員エレアじゃなかったことには気づいていたか？」

「へ、あー……」

全く気付いていなかった。戦う最中にそんなところまで気が回らなかったし、ロケット団 エレアと言う種族、という等号はレッドの中では少々繋がりにくいのだ。

「もしかしたら素行の悪いトレーナーを仲間に入れ始めたのかもしれない。何か情報があればポケモンリーグの本部へ伝えてくれると

嬉しい。じゃあ長々と引き留めて悪かったな。また何かあればジムに寄ってくれ。……それとも何かやって行くか？」

「あ、いえ、結構です。ダンジョンに潜ろうと思ってるので」「ほっ」

タケシは面白そうな顔つきになる。

「ダンジョンか。俺も良く潜ったよ。まあ楽しんで来ると良い。地上と違って、中々刺激的だからな」

ニヤリと笑ったその顔に、不吉な予感をかきたてられるレッドだった。

ニビシティの西にある山の麓にそのポケモンセンターはあった。看板に大きく『初心者のお部屋』と書かれている。

センターの中のダンジョン入口は扉で仕切られた中にあり、バツジを胸に6つ付けたお姉さんがモンスターが中から出てこないように見張っていた。

その入口の前で、レッドはわなわな震えている。衝撃の事実に震えが止まらないのだ。

「も、もう一回言ってもらえませんか？」

【ダンジョンの中はターン制じゃありませんのでレッド様も何か武器を持ち込むべきだと申し上げました】

しれつと応えるメッセージさんに、レッドは思わず叫んでいた。

「は、早く言つてよ！ そう言うことは早めにね!？」

【ニヤリ】

「ッ!？」

（こ、こいつワザとだ！ ワザと伝えず、僕のうろたえる姿を楽しんでいる…!？）

「お客さん、入らないのか？」

見張りのお姉さんが気味の悪い物を見る目でレッドに声をかけてきた。キモイからどつか行ってくれないかな、と顔に書いてあつてレッドは凹んだ。ちよつと綺麗な人だったので尚更だ。

しかし凹んでいても何も変わらない。とりあえず次からは人前でメッセージさんとの会話は控えようと誓いつつ、レッドはお姉さんに声をかけた。

「あの、ここって武器を売ってたりしません？ この中が危険なことを知らなくって」

「え、ああ。初心者セットっていう威力は無いけど取り回しの簡単な拳銃なら売ってるよ。すぐ分かる場所に置いてあるから買ってくれば？」

「はい。そうしますね……。くそっ、気づいておけば…」  
「……………」

毒づきながら出ていこうとすると、見張りのお姉さんが呼び留め

てくる。振り返ると、さつき払ったばかりの入場料を返してきた。

「え、ええと…？」

「なんか可哀そうだから入場料は返してやる。どうせすぐ来るんだろ？ そんな時また払いな」

「うわぁい、お姉さん超美人！」

「よせよ。ただの気まぐれだ」

ちよつと照れているお姉さんにお礼を言つて、レッドは扉を開け、明るいセンター内に戻った。

武器を売っているコーナーには、初心者セット1500円の他に凶悪そうな銃器や、身の丈ほどもあるような弓が置かれていた。

レッドの残金は1823円。微妙に以前から変化しているのはいいらない物を売ったり食糧を買ったりしたためだ。

残念なことに初心者セットには弾がマガジン（11発入り）一つしか含まれておらず、さらに弾を買おうとすると入場料200円が払えなくなる。というかお姉さんが返してくれていなければダンジョンに入るためにさえ金策に走らなければいけないところだった。危ない。

とはいえ、少しばかり安くしてもらえないと弾が買えないことに

変わりはない。レッドは生まれて初めて値切るといふ行為を行っていた。

相手は売り子のお兄さんである。イケメンでまつ毛が長かった。

「あ、あのお」

「1500円になります」

用件も聞かずに即答された。言葉が詰まりそうになりつつもレッドは頑張った。

「や、安くなりませんか」

「いいえ。1500円にしかありません」

「そこをなんとか！ ちよつとだけ！」

「じゃあ1800円になります」

「増えたっ！？」

粘ったがどうにもダメそうなので技マシンを買い取って貰おうかと思っていると、売り子のお兄さんはため息をついて分かりました、と言った。

「弾を100発付けましょう。それで1500円。これ以上は無理です」

「いえ、ありがとうございます！」

「初心者セットでここまで粘るお客様は初めてです」

「ご、ごめんなさい」

申し訳ない気持ちでいっぱいになりながらお金を渡すと、お兄さんは几帳面に硬貨を数え、初心者セットと弾丸のケースを渡してくれる。その際、鋭い視線で睨まれた。

「この銃はダンジョン以外の場所で使うと即犯罪者になるのでそのつもりで」

「あ、そうなんですか？」

「そうなのです。それと、私に割引させたのですから決して死に戻りなどしないように。いいですね？」

「は、はい！ 頑張ります！」

「試射室はあちらです」

レッドの言葉をスルーしてお兄さんは傍らにあつた扉を指差す。死に戻りと言うのは、ダンジョンで死んでこのポケモンセンターで復活することを言うのだろう。このポケモンセンターは優しい人が多いなあと思った。

ターン！ と音だけは大きく鳴りながら銃弾が飛んでいき、木製の案山子の表面を削った。

さすが初心者セットの拳銃だ。威力は低く、射程も短い。しかし自動拳銃なので弾込めの頻度も少なく、また反動が小さくて狙いもぶれにくいので初心者でも牽制くらいはできるだろう。

初めて戦闘することになるかもしれないので、レッドはどうにも安心できなかった。不安になりながら引き金を引いていると、いつの間にかマガジン一つ分を撃ち尽くしてしまっていた。この銃弾がいくら安いとはいえ（むしろ安すぎる）、撃ち過ぎたかも知れない。



いつの間にかかいていた汗を拭っていると、肩をポンポンと叩かれる。振り返るとジハードが自分を指差して、チラチラと銃に視線を送っていた。こういうのにも興味があるらしい。昨日買い物した時はまるでオシャレに頓着しなかったので、彼女の成長を見守る者としては少々複雑である。

「……撃つ？」

聞くと激しく首を縦に振る。興奮したのかちよつと電気が漏れるほどだ。

レッドは少し考え、撃たせてあげることにした。どうせ弾を込める練習もしなくてはならないのだ。ちょうどいい。

カチンカチンとマガジンに銃弾を送り込んで行き、１１発入ったところで銃把に下から差し込むと、シャコ、と良い音がして嵌った。

「はい。持ち方はわかる？」

「！」

コクコクと首を振り、跳ねるように銃を受け取ると、ジハードは小さな両手で銃を構えトリガーを引いた。

弾は出ない。

「????」

「ああ、それはセイフティーロックが……ってそれは危な……！」

ジハードが拳銃の銃口を覗きこむようにしており、しかも指はトリガーにかかったままで、おまけにいじくり回すからセイフティー

が偶然外れた。

「ちょ  
」

飛び出る弾丸、少女は顔を揺らし、レッドは叫び……そうになった少女が弾丸を避けたことに気がついた。

天井で跳ねた弾丸が壁に埋まって止まる。レッドの口から笑い声のような呻きが漏れた。

「は、はは……」

超至近距離の発射を避けた少女に驚けばいいのか、死ななかったことに安堵すればいいのか、よく分からない。とりあえず拳銃を返してもらうのが先か。

びっくりしている少女の手の中でまずセーフティを止め、拳銃を取り上げる。

「危ないから触るの禁止ね」

シュンとしてしまった少女の頭を撫でつつ、銃を初心者セットに着いていたホルスターに仕舞う。腰にある拳銃は少し重いが、動きにくいほどではない。

それよりも落ち込んでいる少女を気にしてしまつて動きにくい。だいたい、危険性を伝えなかったレッドが悪いのだ。伝えれば、頭が悪いわけではない少女はきちんと理解しただろう。

レッドは頭を振り、ジハードに話しかけた。

「まあ、ダンジョンから帰ってきたらまた練習しよう」  
「！」

花が咲くように少女は顔を輝かせた。これで前髪に目が隠れていなければ惚れていたかもしれない。

まあ機嫌が直ったようであるによりである。

ダンジョンに続く扉をあけると、見張りのお姉さんがニヤツと笑った。

「おう、来たな。拳銃意外と似合ってるじゃん」  
「そ、そうですね」

綺麗な人から褒められというのは格別である。レッドは気恥ずかしくなって少し慌てつつ、200円を渡した。

「入場料です」  
「ん、確かに。じゃあ、頑張ってくださいよ」

激励と共にパン、と背中を叩かれて、レッドは気合が入るのを感じた。ジハードを見ると、レッド以上に気合いが入っている。この中にはモンスターがいっぱい居るといったせいだろう。鼻息が超荒い。

この中に入って、美味しいご飯が食べられるくらいには稼いで来たい。少なくとも現在のカツカツな生活からは脱却したい。

「よし」

もう一度、気合いを入れ、ダンジョンの入口の階段へ踏み込む。

「行こう」

声をかけるとジハードは力強く頷いて、レッドの後に続いた。

## 第十話 少女がノー だった（後書き）

ダンジョンはEionnaのネフィアですけど、もっこの小説ではダンジョンで通します。

## 第十一話 モヒカンが声をかけてきた

ダンジョンは死んだモンスターを最下層で復活させる仕組みを持った深い穴だ。何階層かに分かれており、最下層には機構を守るモンスター、守護者がいる。それを仕組みを壊さないように修練場としてうまく使っているのが現状だった。

ポケモンセンターから階段を下りていくと上階から届いていた明りが薄まり、いつしか暗闇の中にいた。

それでも階段を踏み外さないのは、となりでジハードがスーパーモードになっているからだ。電光で辺りを照らす彼女が居なかったら松明で片手がふさがるどころだった。

階段を下りた先は大きな部屋で、幾つかの出口がある。部屋の隅や通路の暗闇に蠢く影があり、否応なく緊張が高まった。足が僅かに震える。

遠くから「ギャー！」という人の叫び声がした。それが合図だったかのように、暗がりからモンスターが飛び出してくる。

「ゲギヤギヤギヤ！」

子供のような体躯をした醜悪な顔つきのモンスターだ。体が緑色で、短い槍のような物を持っている。脳内でメッセージさんが【イクです】と告げた。

入ってすぐに襲われることも予測はしていたが、正直テンパった。銃を苦勞してホルスターから抜きつつレッドは裏返しそうになる声で叫ぶ。

「頼むジハードッ！」

「はあああああ！」

叫ぶ必要はなかったかもしれない。

隣にいたはずの少女はすでに電気の残滓を残して走りだしており、気づいた時にはイークの体が高々と跳ね上げられていた。

そして跳びあがった少女が雷光を纏いつつイークを槌で殴りつけ、地面にたたき落とす。

ぶちゃあ、と地面で弾けるイーク。

とんとん、と跳ねるようにジハードは隣へ帰ってきた。非常にうれしそうな顔をしている。この子は本当に殺すのが好きである。

それにしても圧倒的だ。イークは暗いところからとび出して来ただけで何もできていない。

「ブーストいらないね……」

とりあえず少女は初心者の迷宮において、強すぎるのかもしれないかった。

レッドの考えは正解していた。モンスターは次々と現れたが、レッドが何かする前に少女が殴り殺して行く。途中人間っぽいのが石を投げてきたりしたが、姿を確認する前にミンチになっていた。善<sup>カ</sup>人度が下がらなかったので大丈夫なのだろう。

それにしても少女の動きが速すぎる。何を殺したのかもよく分からない俊足っぷりだ。

レッドもたまに銃を撃つのだが全部外れている。そもそも拳銃だから射程が短いのだ。弾がもつたいないのでやがて撃つのも止めた。

だがレッドはいらない子になったわけではない。

このダンジョンにはモンスターを殺しに降りてきたわけではなく、お金を稼ぐために来たのだ。お金の元はダンジョンの地面に無数に落ちている。

題名の読めない本、武器、防具、何かの液体が入った瓶、巻物、杖……これらはトレーナーが落としたりモンスターが所持していたものらしい。モンスターは復活するので、半永久的にこれらは供給されるのだ。

少女のお陰ですこぶる安全なので、レッドは地面を這いずり回り、落ちている物を片端から背の鞆の中に放り込んでいく。初心者の洞窟なので価値の高い物は無いかもしれないが、そこは数で補うつもりだった。



「ふう……これぐらいにしようか…」

レッドの背負っている鞆は中身の体積を無視し、重量を軽減する鞆である。その鞆がずっしりと重く感じるくらい詰め込んだ時、ようやくレッドは顔を上げた。

ダンジョンの中は幾つか大きい部屋があり、それらを連結する通路がある。

通路は人が並んで二人通れるかどうかという狭さなので戦いには適さないが、多数を相手にすることになれば逃げ込むことも考えねばならないだろう。

壁や床の材質は押し固められて岩石のようになった土である。復元作用もあるようで、少女が全力でモンスターを叩きつけたところが少し窪んでいたが、ゆっくりと元に戻って行った。

現在、ジハードはレッドの方をぼうっと見つめ、途中でドロップした肉をまたモグモグしている。

少女がエレキガールに進化したのはピカチュウの肉を食ったことが原因のような気がするので、拾い食いはもう好きにさせることにしたのだ。

落ちている中には他のトレーナーが倒したモンスターのドロップと予測できる、腐った肉もある。少女はそれもおかまいなく食べるのだが、腐った肉を短べた時だけは非常に渋い顔をする。何とものいふなのでそのまま好きにさせているが、渋い顔がブサ可愛い感じでレッドはちょっと心動かされていたりするのだった。

「ここに来るまでに下りの階段であつたっけ？」

床ばかり見ていたために注意力散漫だったレッドとは違い、少

女は敵が視界に入るや否や弾丸みたいに飛んで行つてぶつ飛ばしていたのでレッドよりは周りを見ているだろう。

尋ねると少女は頷き、部屋の隅を指差した。少しわかりづらいが、四角に切り取られた地面が見える。

近くに寄つてみると、まるで落とし穴みたいに唐突に地面が階段になつていた。

（これ明りが無かつたら落ちて骨折くらいはするんじゃない？）

ジハードが居ることをありがたく思いつつ階段を降りようとする  
と、階段の下の方でうめき声がする。

苦しんでいるような声だ。

「うう……」

「だ、大丈夫ですか？」

レッドは思わず声をかけていた。呻いていたのがおじいさんの声  
だったからだ。

レッドの祖父も最近腰が痛いだの足が痛いだのうるさくていつ死  
んでしまつか冷や冷やさせられているので、おじいさんに対しては  
ダークサイドに落ちかかっているレッドでも優しくしてしまうのだ。

階段にさかさまに寝転がるおじいさんは豊かな赤い髭で口元を覆  
われた背の低い人で、登山家のような格好をしており、額にはライ  
トをつけていた。残念ながらライトは割れてしまっているようだ。  
脂汗をにじませながらおじいさんは呻く。

「お、落とし穴じゃ！ 足が折れてしもうた……！ 痛い……っ！」

（ここに犠牲者がイタ

！）

などと胸中で叫んでいる場合ではない。レッドは急いで自分の鞆をあさり、全ての怪我に効く万能薬『きずぐすり』を取り出した。キヤップを外して逆さにし、腫れ上がった足にぶっ掛ける。

「ふおっ！ 冷たいっ！」

「ああ、動かない方が。すぐに治ると思うので」

レッドの言葉通り腫れがみるみる引いていき、赤黒かった足も清浄な色へと戻って行った。

落ち着いたおじいさんは髭をしごきながら恥ずかしそうにお礼を口にした。

「いやあすまんの。初心者向けのダンジョンだからというて気を抜き過ぎておったわい」

おじいさんの名はガロクという加治屋さんで、ここでしか取れない鉱石を採掘しに来たという。普段は雪深い山の麓に住んでおり、里にはめったに下りてこないとか。

「ここも来る度に地形が変わるもんで、老骨には応えるわい。まさか階段に落ちたとは思わなんだ」

モンスター相手なら負けんのじゃが、とハンマーを握りしめる姿はモリモリの筋肉もあって頼もしい。自分の力を信じていたためライトが壊れても歩き回り、落ちて足を折ったということらしかった。

「助かったぞ若い。お礼に何かやりたいのじゃが……手持ちは無いしのう」

「あ、いや別に気になさなくても」

レッドの言葉を全く聞かず、爺は傍らで暇そくにパチパチ光っている少女に目を向ける。

「そうじゃ、お前さんのモンスターの道具を強化してやろう。このハンマー、ガロク槌だな」

タダでワシに鍛えてもらえるとはお主も幸運じゃのう、などと爺は言うのだった。

どうやって強化するのかわかったら、お爺さんのハンマーをジハードの槌に叩きつけるだけであった。

誰でもできるじゃん、と思ったがおじいさんがやることに意味があるらしい。何か変な能力でも持っているのだろうか。

カーンとハンマーが打ちつけられて、少女の槌がわずかに輝く。

「うむう、少し力を入れ過ぎたかのう…… 神器 になっちまったわい」

【ちょw】

メッセージさんが慌てているが、意味の分からないレッドはスルーである。なにやらしい物になったみたいなので、ヘー良かったね、と思うくらいだ。

強化された少女の槌は、なにやら神々しい光を放つようになった。

説明はメニュー画面のステータスから見るできるので、早速見て見ることにした。

鉄塊と呼ばれる棍棒 かぐわしい足

それは鉄で作られている

それは炎では燃えない

それは両手持ちに…

……

…

•

それはあなたを浮遊させる

効果はズラズラと書かれていたが、筋力を維持するとか速度を維持するとか訳の分からないことばかりで読むのをやめた。

（でも、かぐわしい足は無いよなあ……）

レアな武器にはシステムが勝手に名前を付けるらしい。ちょっとセンスがない、いやむしろあるのか？ などと思っていたら、武器を持ったジハードがフワフワ浮き始めてレッドはビビった。

トリックではない、足の下には何もなく、引っ張り上げられている訳でもなかった。

「ま、まさか電磁浮遊……？」

【説明読みましょうよ……】

メッセージさんが呆れた声を出す。ヘルプをまるで読もうとしないレッドに、彼女はこの現象の説明をしてくれた。

【武器のエンチャントの中には装備者を浮遊させる効果の物があります。この世界では「じめんタイプの攻撃無効」が付与されます】

割と反則臭い効果だった。地面タイプが涙目すぎる。

（そんなのありなのか……）

「」

浮き上がって空を自由に飛んでいる少女を見て、少女用のズボンの購入を真剣に考えていると、おじいさんが満足そうに言った。

「電気タイプの娘さんみたいじゃから、ちょうど良かったの。弱点が一つ消えたようなものじゃ」

「そ、そうですね…」

「それじゃあワシは帰る。シロガネ山の麓におるでな、気が向いたら来ると良い。歓迎するぞ」

豪快に笑いながらおじいさんは去って行った。

突発的な事態だったが、『きずぐすり』を使った以上の見返りがあった。親切は人のためならずとはよく言ったものだ、レッドは思った。

メッセージさん曰く、ダンジョンの最下層にいる守護者は、倒すと必ず宝箱を落とすらしい。

何とも冒険心をくすぐるシステムだ。

「どうせなら、守護者も倒して帰ろうか」

そう提案すると、ジハードはとてもやる気を見せたので、このダンジョンを攻略して帰ることになった。

二階層も問題なく進む。少女は相変わらず見敵即殺を繰り返し、槌のおかげで空を飛んで逃げようとするコウモリも殴り殺せるため、殺す量が明らかに増えた。

レッドは少女無双に見とれたり、落し物を拾ったりしながら二時間ほど歩いた辺りで、三階層への階段を見つけた。

三階層に入ると、明らかに空気が違った。ピリピリと、緊張感に満たされている。

「これは、この階層に守護者が居るね……」

姿も見えないのに圧迫感を与えてくるのだから、相当な強者だろう。

しかし、階段を降りて間髪いれずに近くにいたゴブリンみたいなモンスターを殴り殺した少女も負けてはいない。

レベルも一つ上がって20になったし、レッドがブーストすれば、バツジ一つ相当のダンジョンの守護者に負けはしない……はずだ。

レッドがシリアスに考えていると、こちらに背を向けた少女が屈み込んでゴブリンの死体があったところを見ていた。すでに死体は消えているが、何かを落として行ったのだろうか。

「何してるの？」

覗き込むとキラキラと光る鉱石が落ちている。ジハードはそれを同じくキラキラした目で見ていた。

凄く欲しそうだ。これまで、落ちていた物は肉を除いて全部レッドが拾ってきたから遠慮しているのだろうか。

「いや、気にしないでいいよ。ジハードがいるなら拾ったら？」  
「！」



言つや否やサツと少女の手が動き、地面の上から鉱石が消え失せる。宝石を欲しがると、かつてないほどの女の子らしさを見せるジハードを見てみると、彼女は、す、と手を後ろに隠した。レッドは苦笑する。

「いや、別に取らないから」

「あげないよ！」

「う、うん……とらないからね？」

今までにないほど強固に主張するジハードに気後れしていると、どん、と衝撃が響く。部屋の壁からだ。

「！」

ジハードがポケットに鉱石を突っ込み、腰を落として槌を構える。レッドも拳銃を抜いた。

次の瞬間、部屋の壁を内側から粉碎するように、一匹のモンスターが現れた。

（昨日も居た、あのモンスターだ！）

昨日のロケット団戦で活躍できなかった腕が四本ある仏像みたいなモンスター、確か名前は阿修羅といったか。

背が二メートルはあり、細い腕は金属のように光沢を放っていた。

「オオオオオオオオオオ！」

一体どこから出しているのか、空洞を風が抜けるような声を出し、

阿修羅は四本の手に持った短剣を構える。2メートルの巨体と合わせ、圧迫感がレッドを押しつぶすようだった。

阿修羅は袈裟のような衣服に隠れた足を動かし、こちらに突っ込んで来る。

「ああああッ！」

レッドがひるんでいる内に、ジハードの姿がブレ、電光を伴って横側から阿修羅へと突進する。これまでならこの一撃で勝負がついていた。

だが、守護者は伊達ではなかった。

阿修羅は素早く振り返り、突っ込んでくる少女に短剣を突き出した。

刃が根元まで突き刺さり、ボタボタとジハードの腹から血が流れ出る。だが腕の長さの差は武器の長さで相殺されている。リーチはほぼ同じで、攻撃は相互に届いていた。

阿修羅の頭蓋に、少女の槌がめり込んでいるのだ。

「ああああッ！」

「オオオオオッ！」

しかしどちらも倒れない。武器を相手の体から互いに引き抜き、至近距離で戦い始めた。防御を考えないような回避とカウンターの応酬である。血飛沫が辺りに散り、両者が見る見るうちに血まみれになって行く。

銃を撃つたら、どちらに当たるか分からない。レッドにできるのは、ただ叫ぶことだった。

だが、この世界ではその叫びが力を与えるのだ。

「ジハード！ 『でんきショック』！」  
「アアアアッ！」

槌を振り払うようにして距離を取ったジハードが咆哮を上げ、全身から電光を噴き出させる。

ジハードの緑色の瞳が爛爛と光を発し、直後彼女の体から電光が放たれた。

電気の奔流は一瞬で部屋の反対側までを貫き、何らかのモンスターが巻き添えになって弾け飛ぶ。

「オオオ…オオ…」

ガクン、と阿修羅の動きが止まった。麻痺状態だ。レッドは直観的に悟り、叫んだ。

「『たたきつける』ッ！」

少女が槌を掲げる。その姿が、電光とブーストによって光り輝いた。

振り下ろされる槌が、阿修羅の頭を粉碎して胸部までめり込む。阿修羅の手が痙攣し、短剣が一本落ちて地面へ転がった。しかしまだ生きているというのか、阿修羅の手が緩慢に動き、握られていた短剣が少女の脇腹を挟む。

苦悶に顔をゆがめる少女に、レッドも辛くなりながら叫んだ。

「もう一回！」

『たたきつける』だ！」

ズボオ、と引き抜かれた槌がもう一度高々と掲げられ、天から落ちる雷の如く、阿修羅へと叩きつけられた。

「お、終わった…」

レッドはため息をついて座り込む。少女も疲れたのか隣で座り込んでいた。

ジハードは恐ろしいほどの出血をしていたが、『きずぐすり』を4つ使うとどうにか血は止まった。『きずぐすり』は無くなってしまったが、これは必要なことだった。頭を撫でると少女は無邪気な笑顔を見せ、レッドを心底安心させた。

少女が粉砕した阿修羅の残骸の下に、宝箱が出現していた。大きさは20cm×10cm×20cmと小さいが、宝石に彩られて豪華な掬えである。

「これが……」

レッドはぐくりと唾を飲む。少女も興味があるようで隣に屈んでレッドの手元を凝視していた。

（鍵は… かかって無い！ よし……）

しかし、事態はそう簡単に進まなかった。わずかに宝箱を開けた時、かすかにガチャ、と鉄をこする音がしたのだ。畏か、とレッドの手が止まりかけるが、聞こえてきた方向は真後ろだ。

少女がバツと顔を上げる。しかしその動きはすぐに止まった。

「おっと。動くなよ。ブスっといっちまうぜ」

首筋にいつの間にか針が付きつけられていたのだ。身の丈1メートルもある蜂のような虫ポケモン、スピアーだった。

ここまで気がつかれずに近寄るなど、恐ろしい隠密性だ。

しかし声をかけてきたのはスピアーではない。声がした方を振り向くと、モヒカン頭の男が上下二連の散弾銃をレッドに向けていた。

「おい、ミンチになりたくないやあ、その箱からゆっくり離れな」

そう言って顎をしゃくる。

ニヤニヤとした笑い方が癪に障った。が、ここはおとなしく引いた方がいいだろう。そう思い、傍らを見ると少女がこちらを見上げていた。その首筋から血が一筋流れている。

（さ、刺さってるじゃないか……ッ！）

途端にレッドの中は怒りで満たされた。能面のように表情が消えるのを自覚する。そんなレッドを見て、少女が目を輝かせたのはなぜだろう。

レッドは、す、と立ち上がった。右手が影になるように半身で男に向き合う。男が眉をひそめて喋る。

「おい、さっさと退けろってんだよ」

「お断りだよトサカ頭」

静かに返すと、男の頬がヒクリと震えた。レッドの右手は、男に見えないようにゆっくりとホルスターから拳銃を抜いていく。

「いい度胸じゃねえか坊主。ああ、見上げた度胸だ。ご褒美に鉛玉をプレゼントだ」

男の顔から笑みが消え、同時にレッドも拳銃を抜き放っていた。

「死ねクソ餓鬼！」

「あんたがな！」

二発の轟音が同時に響き、レッドの体を衝撃が襲った。

第十一話 モヒカンが声をかけてきた（後書き）

引つ張っちゃったぜ！ すみません。

毎度、お読みいただいてありがとうございます！

12/28 誤字修正

## 第十二話 レッドはエンジェルだった

同時に二人の銃弾が発射される。

レッドは咄嗟に左手で顔をかばっていた。次の瞬間、拡散した銃弾が無数の針の如く体に刺さった。

「ッ！」

声にならない悲鳴が漏れた。

レッドは衝撃に体を回されつつ、押し飛ばされ、地面を転がる。体から血が出ていくのを感じた。

「ぐああ……」

熱い。体の前面が全部火傷を負ったようだ。しかし、生きていた。きつとフハハ神を信仰しているからだ。レッドはオパートス神の加護に初めて感謝した。

じやり、と耳元で足音がする。

「よう、下手くそ。一体どこ狙ってたんだ？ お前の銃弾はどっか行っちゃったみたいだぜ。ハハハ」

モヒカンの声だ。

いつの間に来たのか、地面にあおむけに倒れるレッドの頭蓋に、散弾銃の銃口が押しつけられた。発射の余熱が残る銃口がこめかみを焼く。

痛い。痛い。レッドの口は笑みを作っていた。へへ、と口から



声が漏れる。

「何笑ってんだ？ イカれたか？」

「ぼ、ボクが何を一番大事にしていると思う……」

「あ？」

レッドが狙ったのは、今まさに自分を撃とうとしていたモヒカンではない。大体彼我の距離は10メートルもあった。絶対に当たる、という距離ではない。

では何を狙ったか。

そんなの、近くにいる奴に決まっている。当たらなくても、注意を逸らすことができれば十分だった。

「僕は自分より、ジハードが大事なんだよ」

「おい、何言って

」

男は最後まで喋れなかった。スピアーの首を引きちぎったばかりのジハードが、横腹にとび蹴りを食らわせたからだ。

傍らで痙攣していたスピアーの死体が、消えていく。脳内でメッセーじさんが告げた。

【正当防衛とみなされました。カルマは変化いたしません】

モヒカンは地面と水平に吹っ飛び、壁に激突して落ちる。その場で痙攣し、口から濃い色の血を吐いた。

「ゲハッ、ガハッ……てめえ……！ スピアーまで……」

地面でのたうちながら、モヒカンは憤怒の形相でレッドを睨みつ

ける。信じられないことにジハードの蹴りをくらって男は生きていくようだった。

少女はレッドを見て、恐ろしいほどの怒りを顔に浮かべ、体中から電撃をほとばしらせる。電撃がモヒカンへと迫る。

だが黒焦げになる前に、モヒカンは懷からモンスターボールを取り出した。

「い、行け…ワイバーン…」

「ギョオオアアアアアアアアアッ！」

電撃はそのモンスターに当たって霧散する。大して効いているようには見えない。

ボールから出現したのは、こんなところで出すようなモンスターではなかった。

ダンジョンの天井がおおよそ５メートルほどだというのに、そのモンスターは頭の高さから尻尾の先までで１５メートルはありそうな巨大なモンスターだったからだ。今まで見た中で一番大きい。

正直レッドは自分の頭を疑った。幻覚でも見ているのではないかと思ったのだ。

体長１５ｍの羽根つきトカゲ、それがワイバーンであった。

窮屈そうに頭を巡らせ、口の端から炎をこぼしながら、ワイバーンがこちらを睥睨する。

その足の下で、モヒカンが懷から出した瓶を飲み、傷を癒す。

一体どれほどの傷薬を使ったのか、何事もなかったかのようにモヒカンは立ち上がった。その口は優越感に歪んで非常に醜い。

「死にかけてんなあ。いい気味だぜ。おい、俺が何故ここまですると思う？」

「し、知らないよ……」

「それはなあ……！」

男は声を荒らげる。

「お前のモンスターが俺の混沌キノコを粉々にしたからだよッ！」  
「は？」

混沌キノコとはモンスターだろうか。

戸惑いつつもレッドは思い出す。そういえば、阿修羅と闘う少女の電撃が、阿修羅を貫いて何かを粉々にしていた気がする。

あれか？

「優しい俺が宝箱を譲るだけで許してやろつてのに、この野郎、スパイアまで……もう、殺さなきゃあ治まらねえ……！」

「そっちがしかけてきたのに……！」

最初から事情を言っておけばレッドだって宝箱を譲ったかもしれないのに、この男……。

レッドは血の混じった唾を吐いて、モヒカンを睨みつける。

「そんな理由で……！」

「はん、せいぜい悔しがれ。非力なガキにできることは死ぬだけだ。やれワイバーン。ケシズミにしろ」

モヒカンの指示で、ワイバーンが口を開ける。即座に喉奥から炎の奔流が飛び出した。

洞穴のような大きさの顎から飛び出した炎は、あっという間に地

面を火の海にし、レッドたちを飲み込もうとする。

その一瞬前に、少女がレッドの襟をつかみ、跳ねるように跳びのいた。助かったのは嬉しいが、首が閉まって変な声が出る。

「ぐうつ…！」

「逃げれると思うな！」

ワイバーンは炎を吐き続けながら首をめぐらせ、少女を追いかける。部屋の端から端まで届く炎の舌が瞬く間に部屋の温度を上げ、至近距離に迫る熱気にレッドの肌が焦げる。

だが、ジハードの動きは巧みだった。時には走り、浮かび、確実に炎をかわしつつ通路へと逃げていく。

（もう少し　　！）

だが、火を吐きながらもワイバーンは動いていた。

あと数歩で通路に逃げ込めるところで、ワイバーンが跳び、入口にぶち当たった。巨体で壁が砕け、完全に通路が見えなくなる。

（まずい　　）

出口がふさがれた。どうすればいい、少女が慌てて踵を返そうとするが、尻尾と炎に囲まれている。彼女だけであれば炎の中を突っ切ることができるかもしれないが、彼女の手は、血を流し続ける主人の首を離そうとしない。

レッドは視界がぼんやりしてきた。

「もういい、君だけでも逃げて……」

しかし少女は首を横に振る。

レッドが死んだって復活できるということを知っているだろうに。少女はニコリとほほ笑むと前を見据え、全身から電流を出す。しかしさつきもほとんど効いていなかった。

レベルが違いすぎるのだ。レッドは、『逃げる』と叫ぼうとした。トレーナーの言葉には、ブーストだけでなく強制力も宿るから。

しかしその前に、ワイバーンが悲鳴を上げた。

「ギヤアアア……！」

「ど、どうした！ 何が起きた！」

チェーンソーが回転するような音が聞こえ、通路に半分突っ込んでいた足をワイバーンが抜く。その先がえぐり取られて血を吹いていた。

通路の奥から、重い足音が聞こえる。暗闇の中に縦二列に並んだ8つの光が見えた。

シュコー…シュコー…

ヘルメット潜水のような姿をした異形が瓦礫を崩しながら出てくる。左手にはショットガン、右手の先には大きなドリルが付いており、ドリルの先端から血が滴っている。

背負ったタンクに繋がれたマスクで呼吸をしつつ、ヘルメットの中でライトを光らせている。ニメートルほどの身長で、通路の天井をこするように歩いて出てきた。

【あれがビッググダディです。リトルシスターも一緒のようです】

「  
」

その後ろからご機嫌な様子で鼻歌を歌う黒髪の幼ない娘が出てきた。ボロボロの黒いドレスをまとい、手には巨大な注射器を携えている。目が濁った白目だけで、かなり不気味だった。

「ビッグダディ…？」

リトルシスターを引き連れたビッグダディ。確か、二人揃っていると危険だったか。

しかしその視線はレッドに向いておらず、明らかにモヒカンへと向けられているのだった。

オッ  
オッ  
オッ  
オッ  
オッ  
オッ  
オッ  
オッ  
オッ  
オッ  
ッ！

ビッグダディはくぐもった唸り声をあげた。辺りの空気が震撼し、レッドにさえ、怒っているということが分かった。

ビッグダディが地面を踏み砕きながら、走り出す。右腕のドリルを振り上げ、回転させ、ワイバーンには目もくれずモヒカン男へと突進していく。速い。ワイバーンが尻尾を振って叩きつけるが、揺るぎもせずに走る。妨害にもなっていない。

「クソあ！」

モヒカンが放った散弾銃が火花を散らし、ビッグダディの表面で弾かれる。ビッグダディのドリルが壁に突き刺さった。モヒカンは間一髪体をひねっている。だが、服の一部が縫いとめられていた。ゴギギ、という鈍い音を立て、壁に亀裂が走る。

「じよ、冗談じゃねえぜ。瓦礫でも当たっちゃったのか？ ついてねえぜ…今日は厄日だ……」

ビッグダディのヘルメットの中のライトが、モヒカン男の顔を照らし出し、直後ビッグダディのショットガンが弾丸を吐きだした。ライトの光の中でモヒカンの頭が吹き飛び、血やその他の物が壁にビチャリと飛び散った。モヒカンの首なし死体がビクンと跳ねて、地面へと落ちる。

どう見ても即死だった。

あまりにもあつけない。レッドたちが追いつめられていたトレーナーを簡単に殺すとは、レッドたちとどれほどの力の差があるのだろうか。

トレーナーが死んだためだろうか、ワイバーンが消えていく。  
モヒカンの体も徐々に薄れだした。

「天使！ 天使だわ！」

そこにリトルシスターが飛び付いた。手に持っていた注射器を突き刺し、体液をすい始める。注射器の後ろにあるタンクが一杯になるまで、何度も何度も突き刺しては吸い上げた。

モヒカンの体が消え去る頃にはタンクがいっぱいになり、少女はそのタンクのふたを開け、美味しそうに飲み干して行く。

（何をやってるんだ……！？）

レッドの疑問に答える者はいない。少女はビッグダディを警戒しているのかレッドを庇うように立っているし、ビッグダディもリトルシスターをかばう位置に立って、こちらをじっと見ていた。

（もしや、あの死体の後は僕の番なんじゃ……？）

レッドの頭に恐ろしい想像が浮かんた。蘇るとはいえ、体の液体を抜き取られてしまうというのは背筋を這い上る物があった。しかし、二人揃うと危険だという、クワガタさんの忠告が思い出され、その想像は瞬く間に現実味を帯びる。

少女に「逃げよう」と伝える間もなく、リトルシスターがタンクの中の物を飲み終わり、口を拭う。

白目しかない目が動き、レッドを見た。



（ツッ！）

レッドは緊張する。リトルシスターが嬉しそうに笑った。小さな指がレッドを指差す。

「Mr・Bubbles！ あそこにも天使がいるわ！」

（クソおおおおおっ！）

ビッグダディが反応した。巨体が一步を踏みだす。右手のドリルが絶叫するように唸りを上げて回転し始めた。

「ジハード！『でんきショック』だ！」

「アアアアア！」

少女の体からバチバチと電光が弾けビッグダディを飲み込んだ。一瞬足を止め、しかしすぐに動き出すビッグダディ。

（効いてない…）

少女は犬歯をむき出しにして唸り、ビッグダディへと跳びかかった。そして一撃で払われ、部屋の壁に叩きつけられる。壁が砕け、めり込んで手足の先しか見えなくなる。

「ジハード！」

叫んだときには、レッドを大きな影が覆っていた。ビッググダデイだ。眩いライトの光がレッドの目を焼く。

（チクシヨウ　　）

レッドの頭にドリルが突き刺さろうとした、その一瞬前にビッググダデイの動きが止まる。ドリルがキュウン……と回転を止め、ビッググダデイが踵を返した。

「……は？」

いつまでも痛みが来ず、目を閉じていたレッドが顔を上げると、ビッググダデイはノシノシと階段へと向かっているところだった。

リトルシスターもさっきの楽しそうな様子を無くし、その後にく。

やがて階段を上り、見えなくなった。

「な、なにが……？」

瓦礫を吹き飛ばして出てきた少女も、ビッググダデイがいなくなっていて戸惑っているようだ。とりあえず彼女がピンピンしていることに安堵の息を吐く。

ビッググダデイが去った理由を知っている可能性があるのはメッセージさんだけが、聞いても教えてくれるかどうか。

一応聞いてみる。

【ビッググダデイと対峙したことによって情報規制が緩和されました。ビッググダデイ・リトルシスターの情報を聞きますか？】

教えてくれた。

【ビッグダディとリトルシスターは、ダンジョンにて人間の体液を採取するモンスターです】

「それはさっき見たね」

【はい。彼らの目的は、体液を集めてリトルシスターの体内で生成する薬物を持ちかえることにあるのです】

「薬物って……。持ち帰るのはどこに？」

【場所の開示はできません。しかし、レッド様が一番聞きたいのは、多分なぜこのタイミングで帰ったか、ということでしょう。それは天候と密接に関係しているのですよ】

「天候？」

【はい】

メッセージさんは勿体つけて言った。

【外では今、エーテルの風が吹いているのですよ。ビッグダディ達は、エーテルの風が吹いている中を、移動するのです】

とまあそんなことを言われてもエーテルの風のことも良く分かつ

ていないレッドに、その中を通ることがどういふことが理解できるはずもない。

よく分かんないなあ、という結論で、メッセージさんの説明会は終了した。

それよりも大事なことは、危険が去ったということだろう。レッドの口から息が漏れた。そして体の痛みを思い出した。

「いてて……！」

本来ならイテテどころか物言わぬ死体になっている傷なので贅沢は言えないが、それでも痛い物は痛いのだ。オパ様のご加護によって傷の治りも早くなっているらしく、ちよつと治っていたりするか放つといても良いかもしれないが、痛いし、すぐには動けない。

そう言えば、さっきモヒカンが傷薬を飲んで瞬く間に回復しているのをレッドは見ていた。

モヒカン男の死骸があつた場所には、幾つかの物が落ちている。死ねば荷物の大半を放り出すというのは、ダンジョンの中でも適用されるようだ。

残して行ったものの中に回復薬があるかもしれない。

「ジハード、あそこにある荷物を持ってきてくれない？」

少女は頷き、そそくさと荷物を取りに行く。

【モンスターを使うことで死体漁りの善人度減少を防ぐとは、中々やりますね】

「ええー……」

レッドが漁っていたらカルマが下がっていたらしい。なんというトラップ。この世界の基準が良く分らない。

少女がモヒカンの残した物と、ついでに宝箱を持ってきた。

モヒカンの男の持ち物には、ゴ丁寧にラベルが貼られており、名前から効果を類推できた。レッドの拾った物の中には瓶も結構あったが、毒薬も交じっていたりするので、うかつに使えなかったのだ。でも、これなら使える。

『エリスの癒しのポーション』という、いかにも効きそうなポーションがあったので飲んでみると、それはもう、瞬く間に傷が治った。もう一本あったので少女にも飲んで貰った。

【そう言えば伝え忘れておりましたが、お二方ともレベルが上がっております】

「そ、そうなんだ」

忘れるとかありなのかと思ったのだが、メッセージさん曰くピンチの連続で気が気ではなく、そんな余裕がなかったとか。

どこから突っ込めばいいのかよく分からなかったが、メッセージさんも実はいい人なのかもしれない。

【それでは宝箱を開けてみましょうよ】

そういえば、開けようとしたところでモヒカンに襲われたんだっ

た。  
いつの間にか少女が隣に座ってワクワクしている。メッセージさんの声からも期待している様子がうかがえる。

レッドはもう一度ぐりと唾を飲み、宝箱に手をかけた。

## 第十二話 レッドはエンジェルだった（後書き）

15メートルと言うとモンハンのリオレウスくらいです。  
ワイバーンを捕獲してみて、その大きさにびっくりしました。

2011/12/28 ちょっと修正。

### 第十三話 お兄さんが怖かった

多大なる期待の元、宝箱をレッドは開けた。隣で興奮している少女の鼻息が荒い。

「こ、これは……！」

宝箱の中を見る前にフライング気味で驚きながら中を覗き込むと、中からポン、と幾つかのお宝が飛び出してきた。

光る鉱石が二つと、本と、布でできた何か。

受けとめることができたのは後ろの二つだけで、鉱石二つは腕からこぼれて地面に落ちた。そしてジハードが素早く拾ってポケットに仕舞いこむ。

欲しいのならあげるからそんなに素早く動かなくてもいいのに。

早業に驚いてみると、少女はポケットを押さえて言った。

「あげないよ！」

「う、うん……」

鉱石は確かに綺麗だと思うが、レッドにとってはそれほど魅力的でないことをどう伝えればいいのか。そしてジハードは何故これに関してだけ激しく主張するのか。

疑問は尽きない。



それはさて置き、宝箱から出てきた物は、鉱石の他に本と布でできた何か。何かというよりも、三角形の生地が二枚合わさって穴が三つ開いた、いわゆるパンツだった。女性物である。

「な、なぜパンツが宝箱に……！？」

それほどのお宝なのだろうか。レッドは戦慄する。

そういえばジハードの下着を貰おうとして、パンティーが異常に高価だったことを思い出す。あの時はなんでこんなに高いんだと思ったものである。

現在はふんどし的なもので代用していて少女も特に不満を漏らしていないが、これは少女に女性らしい下着を穿かせてやりなさいという天の啓示なのかもしれない。

というかいい加減持っているのが恥ずかしくなってきたので、少女にプレゼントすることにした。

「はい」

渡すと少女は無言でポケットにしまった。

「いや仕舞うんじゃないかね？」

「？」

もしかして、レッドの前で穿きかえるのが恥ずかしいのかもしれない。もしかしくても恥ずかしいか。

いずれ見ていないところで穿きかえるのだろうと思い、レッドは何も言わずにおくことにした。

少女が敵に向かってパンツを投げつけて敵が発狂して死ぬという

訳の分からない事態を目の当たりにすることで、自分の考えがまるでの外れだったことをレッドが知るのはこの後すぐである。

【電撃少女のジハードは、布のギャルのパンティーを装備しました】

もう一つのお宝アイテムは、本である。しかもレアで貴重なものだという。

その名も、『お嬢様の日記』。荘厳な装丁のその本は手の中でやけに重たい。

「なにコレ……」

何故こんな物が宝箱に入っているのか。そして何故レアなのか。どの辺が貴重なのか。すべては謎に包まれる。

【読まないのですか？】

「い、いや読むよ。意味が分からなすぎてなんか怖くて……。よし！ よおし、さあ行くぞ！」

過剰な気合いを入れつつ、レッドは本を開く。

目に飛び込んできたのはほとんどが白紙の中、中心に書いてあった一言。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

見つけましたわ！

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

「な、何を　　！？」

丸っこい文字で書かれた言葉にビビって、反射的に本を閉じる。  
明らかに日記じゃない。

しかし本が急に輝きだし、レッドは非常に焦った。

「なんでこれ光ってるの！？　これなんの本！？」

【ビビりなレッド様もまた、良いものですね……】

「そう言つの良いから！　これなに……？」

パニック気味のレッドの手の中で本は明滅し、一筋の光が天へと伸びていく。ゴゴゴ、と不自然な地鳴りが始まり、レッドのパニックは最高潮になった。

そんな彼にメッセージさんが叫ぶ。

【上を見るのです！】

言われるままに見上げると、天井付近に空間が歪んだような穴が開き、中で何か混沌とした物が渦巻いている。

その中心から、人の足が出現する。黒い革靴を履いていて、学校指定っぽい黒い靴下をしている。次いでお嬢様学校的な制服に身を包んだ体も出てきて、やがて頭も見えた。女の子だ。

ツインテールにしたカラシ色の髪の毛の女の子が、ミニスカートの裾をフワフワさせながら降臨したのだ。同い年くらいだろうか。この子はスカートの中に短パンを穿いており、秘密の領域をしっかりとガードしていた。

混乱しつつレッドは叫ぶ。

「メ、メッセーじさん！？ 女の子が！」

【正確にはお嬢様です】

「た、確かに！ どこからどう見てもお嬢様だ！」

レッドの前まで降りてきて、地面へ足をついたお嬢様は、カツ！と目を開く。茶色の目が、しっかりとレッドを見つめていた。

お嬢様はスカートを軽く持ち上げ、優雅にお辞儀をしてくる。

「はじめましてお兄様。お嬢のネメシスでございますわ」

「う、うん？」

ネメシス

天罰というごつい名前のお嬢様が訳の分からないことを言いだし、レッドはまた混乱し出した。お兄様？ 超展開過ぎてどこから認識すればいいのか分からない。

「これからよろしく願いますわ」

【お嬢のネメシスLv1が仲間に加わった！】

「く、加わったの！？ ていうかLv1！？ 弱っ！」

展開が早すぎる。

レッドが戸惑っているうちにお嬢のネメシスはジハードに対しても自己紹介をして、固い握手を交わしている。すでに仲間になるのは決定事項のようだ。

「でもLv1って……今からレベル上げるの？ っていうか僕はジハード一人でよかったんだけど……」

「わたくしの力をお知りになればそのような言葉は出ない筈ですわ」

レッドがぶつぶつ言っていると、お嬢のネメシスが自信たっぷりに流し目を送ってきた。

レッドは焦る。なんだかんだいって彼女は美人だったのだ。

「そ、そうなの？」

「もちろんですわ。……あら、あちらにちょうど良い相手がいますわね。わたくしの華麗な戦い方を見て、考えを改めていただけると信じておりますわ。……それっ！」

お嬢様はお上品に叫ぶと、懷からポーションの瓶を取り出して、ちょうど部屋に入ってきたイクに投げつけた。

カチャン、と当たって割れる瓶。体の小さなイクはずぶ濡れにされて怒りだした。

「ええと…？」

彼女が一体何をしているのかレッドには理解できない。メッセー

ジさんが説明してくれた。

【これも一種の攻撃です。お嬢の特殊能力として、無から生成したポーションを投げつけることができるのですよ】

「え、それってすごくない？」

【はい。しかし生成されるポーションはランダムです。相手が弱る時もある、強くなる時もあり、仮に生成されたポーションが火炎瓶だった場合は環境にも寄りますが火災が発生します。問題は投げてみるまでお嬢にも効果が分からない、ということですね】

「予想以上に使えない！？」

生成して投げることが一連の動作となっており、確かめてから投げるといった行為がシステムの許されてないらしい。

これはポケモンが技を使った時に、途中で中断できないことと原理を同じくするらしい。

ポケモンは穴を掘ったら当たらなくても頭を出さなければいけないし、空を飛んだら穴を掘って潜っている相手にでも急降下しなければいけないという、悲しい運命を背負っているのだ。

「そおれそれ！」

お嬢様は次々に瓶を投げる。

カチャンカチャン、とポーション瓶が当たるたびにイークは濡れ、怒り心頭のイークがお嬢の元にたどり着くころには5回ほどポーション投げをくらっていた。

いつからか、すっかりしていたはずのイークの足取りは非常にフラフラしていた。歩く最中にも何度か嘔吐しており、何故か酔っ払っているようだった。

「ういっ！」

赤い肌のイークなのに、顔色が青を通り越して土気色になっている。

【投げたポーシヨン類の中に、呪われたお酒が混じっていたようですね】

「呪われた…？ 酔っ払うの？」

【性質の悪い酔い方をします。飲むと胃の中の物を吐いてもまだ吐き続けることになり　　】

イークが、あと一歩でお嬢にたどり着くというところまで来た時、また嘔吐した。

まるで、吐く物がもう残っていないのに絞り出すような、見ているだけで苦しくな姿だ。

しかし何も出ない。

「オエッ！ オエエエエ…！ エエッ……！」

出ないのに吐こうとしていたのだが、何故かイークが内側から破裂した。パーンと飛び散った血液がお嬢にビタビタと降り注ぐ。

【この通り、飢餓に耐え切れなくなって破裂します】

「……なんで？」

【仕様です】

そうですね。

そのままイークは消えて剥製が残った。苦悶の表情を浮かべる剥製がひたすら切ない。

「どうですかお兄様？」

「う、うん。良いんじゃない？」

服に着いた血の汚れを払ってからドヤ顔を向けてくるお嬢にレッドは曖昧な笑みを返した。

しかし、呪い酒で殺すことができるなら、格上の相手にもお嬢が活躍するかもしれない。パーティに入ってもらうのも悪くは無いかな……とレッドが思うのだった。

呪い酒で酷い殺し方をしたお嬢だったが、その使えなさが露呈するのはすぐだった。

加速のポーション、という相手をスピードアップさせるポーションを弓を持っているイークに投げ、少女が反応する前に速攻で射殺されたのだ。



「キヤー」と言ってミンチになるお嬢。流石Lv1である。防御が薄いしHPも凄く低い。矢が命中したことで体が粉々になり、非常にスプラッタな光景が展開された。

「……お嬢様は綺麗だから、あんまり死ぬところは見たくないな」

という建前の元、お嬢様がパソコンの住人になることが決定した。

【パソコンに預けられている間は主人公の家、すなわちクワガタさんの家で、自由に活動できます。訓練をすることも可能なので、しばらく預けておけば戦いに耐える程度にはレベルが上がっているかもしれませんよ】

「育て屋さんみたいになってるのか。それは助かるね…」

とりあえず今は地上に戻らなければいけない。見敵即殺に磨きをかける少女と共に、レッドは階段を上り、ポケモンセンターへとたどり着いた。ダンジョンの入口の扉は、なぜか開け放たれており、見張りのお姉さんはいない。

どうしたのかと疑問に思ったが、『シエルター』という文字と、その場所を示す矢印の書かれた立て看板が立っていたのでレッドは納得した。

そういえば、外ではエーテルの風が吹いているのだった。そのおかげでビッグダディから逃れられたのに、すっかり忘れていた。

エーテルは美しい光の粒だった。

建物の中にも微妙に侵入しているらしく、空気中に青く光る粒子が疎らに浮いている。それに腕が触れた少女が、顔をしかめた。

白い肌が少し赤くなっている。

「触らない方がいいね。シエルターに急ごう」

少女も賛成のようだったので、避難することにした。

ポケモンセンターの地下に設けられたシエルターは悪天候の時なら無料で開放されているらしい。貧乏トレーナーにはありがたい話だ。

降りてみると、シエルターの中には職員やトレーナーなど、結構な数の人がいた。見張りのお姉さんとガロクおじいさんも居て、にこやかに手を振ってくれる。

お姉さんとおじいさん、それに他のトレーナーたちは様々なことをしていた。

「ふん！　ぬはあ！」

おじいさんは台に寝転んでバーベルを上げ下げしているし、

「はっ！　はっ！」

見張りをしていたお姉さんはランニングマシンの上で汗をかい

ているし、

「うむむ…」

知らない人が大きな本を前に唸っているし、

「さあできましたよ。食べる人はお皿を持って並んでください」

売り子をしていたお兄さんはキッチンで料理をふるまっていた。

シエルターというからにはもっと広くて暗くてジメツとしている場所を想像していたのだが、実際には意外と狭い中に様々な器具が置いてあり、食糧や水も潤沢に用意してあって、全体が明るい雰囲気満ちていた。

ポケモンを出している人も多く、和気あいあいと交流を楽しんでいるようだった。

ジハードがよだれを垂らしていたので料理を貰う列に並ばせ、レッドはトレーニングマシンが置いてある一角を見学に行った。

トレーニングマシンは色々とあり、どれも人間が使うための器具だった。

ちょうどお姉さんは料理を食べに離れていくところで、レッドは顔を赤くしてダンベルを上げるガロクさんの近くに行つてその肉体的美を観察することにした。

「ぬぐう……！ んん？ おう、坊主か。武器の使い勝手はどうじゃ？」

「良い感じですよ。ガロクさんは帰らなかったんですか？」

「まあの」

ガロクさんがバーベルを置き、体を起こす。タオルを取って、体を吹き始めた。

上半身の服を脱いでおり、汗に濡れた強靱な肉体が電気の光を照り返している。バーベルの重さを見ると片側だけで三桁あり、レッドの頬が引きつった。

「すぐに帰るつもりじゃったが、一步出たとたんにこの天候でな。慌ててここに引込んだわ」

ガハハと笑うガロクさん。ガロクさんみたいな筋肉モリモリの人でもエーテルの風は怖い物らしい。

レッドの中でエーテルの風の危険度が跳ねあがったその時、やにわにシエルターの中が騒がしくなった。

シエルターの入口から一人の男が転がり落ちるように入ってきたのだ。

それだけではない、その男は頭がスイカくらいに膨らんでいた。赤黒く膨れ上がり、そう言うモンスターだという方がしっくりくるような容姿であった。「エーテル病が発症してる」と誰かが呟くのが聞こえた。

（あれがエーテル病……）

「だ、誰か！」

男はくぐもった声で叫ぶ。その声に少し聞き覚えがあった。良く見れば肥大した頭の上に萎れたモヒカンが乗っている。洞窟の中で出会ったモヒカンだ。

「誰かエーテル抗体ポーション持ってるだろう！ はやくくれ！」

しかし誰も動こうとはしない。侮蔑の視線を向けるだけだ。レッドのにも理由は分かった。

『この男は善人度カルマが低い犯罪人だ』という情報が、男を見ているだけで頭に浮かんだからである。

レッドと会った時はこんな情報は浮かばなかった。死んだ後、何かがきっかけとなってカルマを減少させたのだろう。

「はやく寄越せよ！ お前魔法具店の店主だろ！ 早く出せ！ 息がしにくくて苦しんだよ！」

モヒカンはローブ姿の男に向かってにじり寄って行く。手にはすでにショットガンが握られていて、ローブ姿の男に照準が合わされていた。レッドの中でモヒカン男に対する同情が完全に消えた。

少女に指示してモヒカンを追い出そうかと思っていると、ローブ姿の男を庇うように、初心者セットを売ってくれた売り子のお兄さ

んが前に出る。手に包丁を持ったお兄さんは酷薄な表情で、吐き捨てるように呟いた。

「見苦しいですね。犯罪者め。ここから去るか死ぬかを選んでください」

「なんだと！ お前から殺してもいいんだぞ！？」

「わかりました」

風切り音と共に、モヒカン付きの肥大した頭がゴトリと床に落ちた。売り子のお兄さんが包丁を振ったのだろうか。何も見えなかった。

首なしの胴から吹きあがる血を迷惑そうに見つつ、お兄さんは包丁の血を払う。

「死ねば体内のエーテル濃度が下がると聞きます。ちょうど良かったじゃないですか」

「下がり切ったカルマも少しは上がるしな。まさに一石二鳥だ。幸せなモヒカン野郎だぜ」

我関せずと料理を口に運んでいた見張りのお姉さんが続けてそう言い、鼻を鳴らした。

二人ともぞつとするほど冷たい声だった。他を見渡しても誰もモヒカン男の死に対して同情の表情を見せていない。

これが犯罪者の末路かとレッドは心底恐怖した。人間だというのはジハードよりも強そうなお兄さんが、躊躇せずに攻撃してくるような存在となってしまうのだ。

犯罪は絶対にしないでおこうとレッドは思った。

その後、エーテルの風は三日ほど吹き続け、レッドはシエルターの中で自堕落な生活を満喫した。

激しくトレーニングをするジハードを眺めたり、汗を流して走るお姉さんのお尻を眺めたり、ガロクさんの広背筋を眺めたり、とにかくボーッととして過ごしたためこの世界に来てからスプラッタなことに続きでややダークサイドに落ちかけていた心が癒されていくように感じた。

途中お姉さんが尻に刺さる視線に気づいて一悶着あったが、それもまあじゃれ合いのような物だ。お姉さんにはいじられまくったが、それもまた、悪くない。

一応、ダンジョンで拾った物を行商人の人に売り払って少女の靴を買ったり（少女はずっと裸足だったのである！）、料理を教えて貰ったりもするなど意味のある行動もし、エーテル風が止む頃にはすっかり旅立つ準備ができていた。

そしてエーテルの風が止んで、清浄な空気が漂う朝。

「まあせいぜい頑張れやムツリ少年」「それじゃあ元氣での」

三日間で仲良くなったガロクさんや見張りのお姉さんが見送ってくれる中、レッドとジハードはニビシティの次の街、ハナダシティに向けて旅立つのだった。



### 第十三話 お兄さんが怖かった（後書き）

Elonaでは吐き過ぎると飢餓に耐え切れなくなって破裂するというすごい死に方をします。説明は浮かばなかったのですが、できるだけ忠実に生きたいのでそのまま書きました。もっと私に想像力があれば……！

## 第十四話 プリンが可哀そうだった（前書き）

更新間隔開いてすいません。久しぶり過ぎて忘れている人（作者とか）のための簡単なステータス

レッドLv5（トレーナーレベル）

ポケモンの行動のブーストが可能・初歩的な魔法具が使用可能

少女のジハード（稲妻少女）Lv21（電気格闘）

技：『からてチョップ』『けたぐり』『たたきつける』『でんきシヨック』

装備：鉄槌「かぐわしい足」（装備者に浮遊付与）、靴、布のパンティー（投擲武器）

お嬢のネメシスLv1（エスパー）

主人公の家（クワガタさんの家）で生活中

現在地：4番道路

ニビシテイ 3番道路 4番道路 おつきみやま … ハナダシテイ

あと空手チョップですが、かくとうタイプで据え置きます。直すよりは先を書くという暴挙です。ご指摘いただいたのに申し訳ない。

## 第十四話 プリンが可哀そうだった

麗らかな晴れの日である。

4番道路は道路とはいえず録に舗装されていない、雑草だらけの道だ。そこをレッドはジハードと歩いていった。

モヤシゆえにゆっくりと歩くレッドとは別に、存在の逞しさが二次関数ばりの上がり方を見せているジハードはチョロチョロと動き回り、木の実や何かを手にとっては頬張っている。

進化したことでさらに腹が減るようになったということなのだろうか。

動きがやたらと素早いことを除けば、微笑ましい光景だ。

少女は以前のレッドなら見失うほどの速度で動き回って拾い食いをしていたが、トレーナーレベルが上がったおかげか、なんとか見える。

メッセージさんによると、トレーナーレベルの上昇は動体視力と滑舌などに大きく影響するらしい。戦闘のサポートがしやすくなるということだ。

だが、この辺りではサポートがしやすくなったことを実感できそうにない。レベルが既に20を超えた少女はこの辺りだと敵なしだからだ。

既に通り過ぎた三番道路で、少女は多くのモンスターを血達磨へと変えてきた。

「あなたトレーナーね！ 勝負よ！」 「キヤー！ ぽ、ポッポお

おおおっ」

「俺のキャタピーをみろー！」 「こ、粉々に…！？」

「ふん、バツジーつか！ ワシのオニスズメにビビるがいい！」  
「ワシのオニスズメがーッ！」

ミニスカートの女子校生も、虫取り網を持った少年も、杖をついた老人も、皆が惨劇に涙した。

相手のモンスターが行動を起こす前に、ジハードの空手チョップや電気ショックが炸裂し、一撃で勝敗が決してしまう。

それもこれも、ジハードのスピードと攻撃力が高いためだ。

同レベル帯ならともかく、こちらのモンスターは野生のもので平均Lv8、トレーナーが持っているものでも平均Lv12。勝負になるはずもない。

レッドは無邪気な娘に弱い者いじめをさせているお父さんみたいな気分になってすこぶるブルーだった。

早くこんな場所を通り過ぎてしまいたい。だが、レッドの移動速度には限界がある。

というかジハードが強すぎるからいけないのだ。もう少し同じくらいの強さならこんなことは思わないはずである。  
よって四番道路でポケモンセンターを見たとき、

（お嬢のネメシスを育てよう）

とレッドは決意したのだった。

ポケモンセンターは、かなり人が多かった。エーテルの風が吹き終わったため、トレーナーたちがここぞとばかりに活動を再開したのだろう。

モンスターを次々に預けられて目を回しているジョーイさんを尻目に、レッドは人込みをかき分けてパソコンを探す。

「そこな坊主。コイキングを500円で」  
「結構です」

怪しいおじさんの言葉を切り捨て歩き去り、ポケモンセンターの片隅にあるパソコンを見つけた。運よくちょうど空いた所である。

パソコンにはトレーナーごとにマイページなるものが設定されているので、パスワードを打ち込んでログインする。

マイページにはメニューが浮かんでいたが、その上でメールが届いていることを示すアイコンが浮かんでいた。

クワガタさんからだった。

『お嬢のネメシスは預かった。この子が惜しくば至急レッドの寝顔を写した写真を転送すること。これが満たされなければ、大変なことになる』と心得よ』

（えー…）

物騒なことが書いてあった。クワガタさんのキャラがつかめない。

とりあえず返事を書いておく。

『ネメシスは元気ですか？』

返事はすぐに来た。

『虚ろな瞳をしているぞ』

（アウトーツ！）

『というのは冗談だ。ネメシスは調理技能の飲み込み早い。教えたのは数品だが、それに関してはレッドも満足するはずだ。応用もできるようだし期待するといい』

（おお……！）

マサラタウンで食べたクワガタさんの料理は絶品であつた。あの味が味わえるなら、ネメシスは弱くても連れ歩く意味がある。大いにある。

むしろ専属料理人として旅への同行を頼みたいくらいだ。そのあたりを見抜いたクワガタさんの策かもしれない。

『寂しそうなのでそろそろ旅に連れて行ってやれ。もうそちらに転送しておいた』

画面上でメールの時とは別のアイコンが点滅し、モンスターが転送されてきたことをレッドに知らせる。

クリックすると、画面からモンスターボールが転がり出してきた。

ころりと転がるモンスターボールの中から、お嬢様がこちらを見

上げている。

囚われのお姫様を彷彿とさせるその光景に、新しい扉が開きかけたレッドは慌ててボールを開き、狭いボールからネメシスを解放した。

ふわりと立ったネメシスは大きく息を吸い、目を開ける。

「ああ……また会えて嬉しいですわ。わたくし頑張りますので、今度は連れて行って下さりませんか？」

開口一番、そのようなことを言うネメシスはレッドと同じくらいの背丈、同じくらいの年齢の美人さんだ。

至近距離で微笑まれると、若干挙動不審になってしまつのは仕方のないことであつた。

「う、うん。よろしくね」

「こちらこそ！」

お嬢の笑顔でさらに挙動不審になつたレッドはさて置き、ネメシスに横から一つの実が差しだされる。アピの実という、それほど美味しくはないが保存に適した食べ物だ。

差し出したのはジハードだ。

彼女が食べ物を譲るなんて、とレッドは感動した。恐らくネメシスを歓迎しているのだらう。

「お前はアピの実でも食べておけと……？ いえ、ジハードさんはそのような汚れた考えは持っておりませんわね。ありがとうジハードさん」

嬉しそうに微笑むネメシスに、ジハードもどこかしら嬉しそうである。モンスター同士仲良くしてくれるとレッドも助かる。

「それでは」

ネメシスは振り返ってレッドに言った。

「戦いに参りましょう！ 母様の家で鍛え上げた技を御覧に入れま  
すわ」

「う、うん…。頑張ろうね」

ネメシスは相変わらずLv1で、増えている技が「おりょうり」と謎のものだけだったが、そこには突っ込まず、レッドは曖昧に頷いた。

この当たりの平均レベルは10前後。お嬢を使うなら、少女で蹂躪していた敵が今度はこちらを圧倒する側になる。

これからが本当の戦いだ…！ とレッドは気合を入れた。

四番道路はトレーナーがいなかったので、お嬢の復帰後初戦闘は草むらから飛び出てきたモンスターであった。

毎度お馴染みのバトルフィールドが展開され、レッドの前にバトル画面が展開される。



二人ともボールから出していたのでどちらで戦うか画面上で尋ねられる。ネメシスを選択すると、ジハードが自動で腰に付けたモンスターボールへと戻っていった。

モンスター選択ではダブルバトル形式も選択できる様子だったが、今回はやめておく。ジハードがいたらネメシスが何もできないだろう。

薄緑色のドームの中、相手の野生モンスターが闘志に身を震わせる。

「プリ！」というかわいらしい鳴き声を上げるのは、フワフワとした体の丸いポケモン、プリンであった。バトル画面に表示された敵の情報を見るとLv9である。

お嬢の技は「ポーション投げ」と「おりょうり」だけだったので、レッドはバトル画面で「ポーション投げ」を選択した。

命令を受け取ったのだろう。振り向いたお嬢が力強く頷いた。

第一ターン！

先攻はプリンである。

プリンはいかにも鈍そうな外見だが、レベル差がステータス的な差となっただけらしい。

プリンは大きく息を吸い込んだ。

膨らむ体。プリンの代表的な技、「うたう」が来るかとレッドは身構える。お嬢が眠ったら「起きろ」と叫んで行動ブーストを発動させるつもりだった。ここらへん、トレーナーがいるといたないとで

は全然違う。

しかしレッドの予想はずれた。プリンは少し膨らんだ体をくると丸め、お餅みたいになった。

【「まるくなる」ですね。プリンの防御力が一段階上がりました】

メッセージさんの声と同時に、プリンの体が淡い光に包まれる。光が防御アップしたというしるしなのだろう。

何はともあれ、攻撃されなくて良かった。  
安心してお嬢の技をブーストできる。

「ネメシス！ 『ポジション投げ』！」

レッドの言葉と共にお嬢の体が赤く輝く。  
不敵に微笑むネメシスがスカートのポケットに手を入れて、コルクで栓のされた一本の試験管を取り出した。

お嬢のポジション投げは、特殊能力というかポケモン技であり、その効果は指をふる以上にランダムだ。

だが、ポジション類には能力を底上げするものと同じ程度に、状態異常を引き起こしたり能力を下げたりするものが含まれている。  
やたらと出現率の高い火炎瓶も含めて、バトルごとにギャンブルをしている気分になるのだった。

「あなたをお料理してあげますわ！」

ネメシスが決め台詞を叫びながら、試験管を投げつける。その行

動はブーストされて命中率が上がり、試験管は回転しながらもしっかりとプリンへ当たった。

試験が割れると同時に、刺激臭が放たれる。臭いの元は、プリンの体毛。試験から出た液体で、毛が溶け、臭気を放ったのだ。

プリンが恐慌をきたしたかのように叫ぶ。

「濃硫酸でしたのね」

お嬢ののんきな言葉とは裏腹に、プリンは大惨事である。巨大な眼球がマイナスに作用し、エグイ感じに爛れていく。転がりまわって苦しむプリン。なんという攻撃だろう。プリン好きが見たら即座に敵にまわりそうだ。

プリンのHPバーが4分の一も削れた上に状態異常「やけど」になったので、実はネメシスってすごいんじゃないかとレッドは思った。

## 第二ターン！

またもやプリンの先攻。技は「うたう」だ。プリンは苦しみながら、必死に歌った。この危険な生物（お嬢）を眠らせて安全を確保したい一心だったのだろう。

プリンの口から発射されたのは、音波というか、衝撃波のようなものだった。放たれた衝撃波がピンポイントで、お嬢のネメシスへと収束し、ネメシスの体がかくかくと震える。

「あか…」

ぐらり、とお嬢は仰向けに倒れた。

地面に後頭部をしたたかに打ちつけ、頭がバウンドする。すごく痛そうだ。

「うたう」は地味に危険な技だとレッドは思った。バトルウインドウではお嬢のHPがちょっと減ってしまったし。

だが、お嬢にはレッドが付いている。

「ネメシス『起きて』っ！」

「はいっ！」

レッドの叫びでバネ仕掛けのように跳び起きたお嬢が、キョロキョロと辺りを見渡し、現在の状況を思い出したようだ。

悔しそうに口を噛む。

「不覚ツッ！……もう一度、ですわ！」

そうして、レッドが選択していたポーション投げを再度行う。今度生成された薬品はビーカーに入っていた。

くると回ると回るビーカーが無事プリンへと命中し、中から緑色の液体が飛び散る。それを頭からかぶったプリンの体がまばゆく輝いた。

【あ】

メッセージさんのつぶやきの意味はレッドも即座に知った。バトル画面上で、プリンの体力がぐーんと回復したのだ。

やけどの状態異常も完治である。この世界の回復薬の設定はちょっとやり過ぎだ。

「あ、あら…癒しの薬だったようですね…」

汗を垂らしながらつぶやくお嬢様に、まあこつこつすることもあるよね、とレッドは慰めておいた。

### 第三ターン！

元気いっぱいになったプリンはその柔らかい体を揺らしながら短い足で駆け寄ってきて、その短い手をネメシスにぶつけた。

「はたく」である。

大変微笑ましい光景で思わず「耐えろ」とか「守れ」とか叫び忘れてしまったが、そこはレベル9のプリンとレベル1のネメシスである。

技をもろに食らったネメシスは漫画のごとくふき飛んで、水切り石みたい地面を跳ね、バトルフィールドの外縁まで転がって行った。

痙攣しながらネメシスが呻く。

「う、受け身をしなければ死んでいましたわ……」

い、生きている！

思わずレッドは感動した。全然受け身をしているように見えなかったというか、はたかれて体ごと回転し、ネメシスは頭から着地したように見えたのだが、まあ生きているなら問題ない。

レッドは叫んだ。瀕死の状態でも戦ってもらったために。

「が、『頑張れ』ネメシス！」

「元氣百倍ですわ　　！」

腕だけで無駄に素早く起き上がったネメシスは、懐からまたもやポーションを取り出し、投げつける。投げつけたのはスコッチが入っているような瓶だった。瓶の口には布が突っ込んであり、その布が燃えている。

どうみても火炎瓶だった。

プリンに当たり、瓶が割れると同時にプリンの体が燃えあがる。

絶叫するプリン。肉汁が弾ける香ばしい匂いが辺りに漂い、腰に付けたボールの中で小さくなった少女が激しくボールの内側を叩いた。

臭いは届かないはずだから、肉の焼ける様子に興奮したのだろう。

「焼きプリンにはカラメルソースが良く合いますわ……」

キリリとした表情で割とエグイことを言うお嬢の声を聞きながら、レッドはバトル画面を操作する。

次は運命の第四ターンである。

#### 第四ターン！

「さあ、行きますわ！」

「あ、交代だから」

「そんなっ！？」

青い顔をするお嬢だが、レベル9にレベル1が挑むというのが無謀なのだ。ここはおとなしく下がってもらう。このまま死んでしまふと経験値ももらえない。

体力が数ドットしか残っていないお嬢を問答無用で下げて、ジハードを出す。

「いけ！ ジハード！」

地面に降り立ち、ふんつと鼻息を吐くジハードに、丸焼きプリンが炎の尾を引いて体当たりをかます。

己の身を削るようなプリンの攻撃だったが、ジハードは普通に避けた。むごい。

「さすがジハード、容赦ないぜ…！」

レッドのつぶやきに力瘤を作って応えるジハード。ちよっぴり盛り上がった力瘤が可愛い。

攻撃が外れたプリンは火傷で苦しんでいる。

ああ、プリン。もう苦しまなくても良いんだ。なんか色々ごめん。

プリンは次のターンでからてチョップにより即殺された。

ポケモンセンターに戻って色々ギリギリだったお嬢を回復させ、破れた服を針で直しているお嬢と、焼きプリンの肉を美味しそうに食べている少女とで、作戦の確認をする。

「じゃあ、最初にネメシスを出して、なんとか状態異常にしたらジハードでトドメを刺すという作戦で行こう」

「分かりましたわ。決定力のない私のせいで迷惑をおかけします」

お嬢の隣で少女も頷く。

状態異常にならなくても2ターン目の頭に問答無用で交代させるが、それは別に言わなくても良いだろう。

ちよつとくらい相手が強くなっても倒せるであろうジハードがいるからできる作戦だ。

ネメシスはレベル9のプリンの経験値を得て、レベルが4になっていた。新しい技「さいほう」を覚えて、益々家庭的になっていく彼女だが、ステータスの上がり方は特殊攻撃特化型である。



そのうち特殊攻撃を覚えると大化けするかもしれない。秘かにエスパタイプだったので、サイコキネシスとか覚えてほしいところだ。

ポケモンセンターで食事を取った後、4番道路を通り抜け、次はついにお月見山である。

お月見山は、ハイキングに最適な緩い傾斜の山で、頂上にある空き地にはベンチなどが備え付けられているため、デートスポットとしても有名な山。

満月の夜にはピッピが跳ね回る光景が見えるという売りもある。

だが、トレーナーが進むのを推奨されているのは、山の中腹に開いた洞窟の中である。ハイキングコースにいるピッピは観光資源として保護されているので、トレーナーはむしろ近寄るな、ということだった。

【そういう設定なのです】

メッセージさんが身も蓋もないことを行っている内に、洞窟の入り口までやってきていた。

中はひんやりとして、太陽の光も届かず薄暗いが、体からパチパチ放電させているジハードがいるので相変わらずカンテラは必要ない。

寒くなったらお嬢が投げた火炎瓶に当たればいいし、女の子二人のおかげで至れり尽くせりである。

【お月見山など、洞窟の中は例外なくダンジョン化しております。不意打ちに気を付けて下さい】  
「うん」

メッセージさんのセリフに頷きながら、レッドと二人のポケモンは、お月見山の洞窟へと入っていった。

## 第十四話 プリンが可哀そうだった（後書き）

恐らく誰も期待していなかったであろうお嬢様のターン。

感想欄で次はラッタと戦うと言ってましたが、それは延期になりました。

第十五話 理科系男の本気が凄かった（前書き）

誤字脱字があつたらすいません。

## 第十五話 理科系男の本気が凄かった

お月見山の洞窟はうす暗いのだが、入口から入ってすぐに中は広くなっている。

二車線のトンネルのような大きさの洞窟で、鍾乳洞のような雰囲気がある。

外と違って中はひんやりとした空気が漂っており、おまけに湿度が高かった。岩肌が結露していて、岩から滴り落ちる水滴がところどころに水たまりを作っている。

そのため洞窟内は滑りやすそうだ。

転ばないようにゆっくりと進んでいると、レッドの横を歩いていたらお嬢が「はっ」と息を呑んだ。

見ると、ジハードの放電に照らされて陰影を濃くしたネメシスの顔が険しくなっている。

「ど、どうしたの…？ 忘れ物？」

「敵ですわ」

顔に似合わない厳しい声でレッドの言葉を叩き切った後、ネメシスは叫んだ。

「排除に移らなくてはなりません！」

「ヒイハアアアアアアアアア！」

言葉と共にお嬢のネメシスは駆けだし、その後ろを少女のジハー

ドが奇声を上げつつ追従する。

「テンション高え……」

【モンスターは例外なく闘争が大好きですから】

メッセーじさんの言葉を裏付けるように二人はわき目も振らない疾走を見せ、ゆっくりとしか歩けないレッドはあっという間において行かれる。

光源たる少女がいなかったために辺りが真っ暗闇に包まれた。そしてレッドは今さらながらに、一人置いて行かれたことに気がついて、心細くなった。

「お、おーい！ ジハードお！ ネメシスー？」

叫んでみるが、レッドの声は漆黒の空間に吸い込まれて行くだけである。俄かにレッドは焦り出す。ここまでの焦燥感は、少女がバトルで死亡して以来だ。

「何で置いていくの……？」

思わずこぼれた疑問に、メッセーじさんが答えてくれた。

【Elonaでは良くあることです】

相変わらず意味不明なゲームである。レッドは久しぶりに首をひねった。

【……ダンジョンでどうしても近くに居て貰いたい時は、「紐」で互いをくくりつけるしかありません】

「そ、そうですか」

そんなことをしたら、レッドが引きずられるとしか思えない。  
どちらにせよ、今レッドは紐など持っていない。無制限に荷物が  
収まり、中で種別に分けられる背負い袋のおかげで、括る必要が全  
くなかったからだ。

【でもここはダンジョンです。アイテムが落ちている可能性は十分  
にありますよ。紐もあるでしょうね！】

何だか知らないがメッセージさんが強烈にプッシュしてくるのだ  
が、手持ちのポケモンがいない状態で歩き回るのは甚だ不安である。  
早く合流できるように、レッドは転倒に気をつけながら必死に歩  
く。

少女たちのいる場所は分かる。遠くの方でチカチカと光る物が薄  
ぼんやりとなら見えるのだ。

足元は濡れた岩石であり、その速度は遅々としたものである。光  
がパツパツと点滅している場所を目印に、たまに足を滑らせたりし  
ながらレッドは足を進める。

【そういえば、ネメシスのレベルが上がりましたよ】

「そ、そうなんだ」

【あ、また上がりました】

「早くない！？」

メッセージさんと会話しながらも自分が歩くことに集中していた  
レッドは、その人物の接近に気がつかなかった。

パシャ、と水たまりを踏む音に気がついた時はもう遅い。

その人物もよそ見をしていたのか、思い切りぶつかってきた。衝

撃と共に軽く跳ね飛ばされたレッドの上に、誰かが倒れてくる。水たまりの水がズボンと下着を通して尻を冷やしたため、二重にびつくりした。

近くにその人物が持っていたであろうカンテラが落下し、乾いた音を立てた。

その光に照らされて、レッドを押し倒した人物が浮き上がる。同年代の女の子のようだった。ミニスカートをはいており、右の二の腕にはトレーナーの証であるリングを嵌めている。

髪は長く体系がスレンダーで、とてもスレンダーな部分にレッドの右手が触れている。レッドは純な少年なのでその手をワキワキ動かしたりはできないのだが、「あんまり柔らかくないなあ」と失礼なことを思った。

目の前から、キンキンとした声が響く。

「もう、何…？ 急いでるのに……きゃっ！ ど、どこ触ってるの！？」

「あ、違います！ ワザとじゃないんです！」

さっと手を離して慌てて立ち上がるのだが、ミニスカートの子は止まらない。

「痴漢！ 変態っ！ ジュンサーさんに連絡しなきゃ…！」

「ち、ちがう！ 冤罪だ！ 僕はやってない！」

「でもその前にあんたを殺すわ！」

（物騒だ ツ！）

聞く耳を持たない女の子は、腰のボールを掲げる。

「ミンチにしてやりなさいピッピ！」



女の子の声と共にモンスターボールから薄ピンクの物体が飛び出してくる。

顔から手足が生えたような体をしており、頭の毛と尻尾がくるりとカールしている。小さな羽根も生えていて、頑張れば妖精に見えるないことも無い。

「うわっ、ちょっと待って！ 今ポケモン持っていない……」

「好都合よ！ 身ぐるみ剥いでやる！ ピッピ、ぐちゃぐちゃにしてやるのよ！」

「ピーー！」

ピッピが嬉しそうに鳴いて、飛びかかってくる。

「え、えぐいよ！ 思想と表現がエグすぎるよ！」

飛びかかってきたピッピがあくどい顔でニヤリと笑い、表情を引きつらせたレッドが死ぬことを覚悟した時、彼方から救いの声が飛んできた。

「お兄様       ！」

「ピギゅっ！」

同時に目の前のピッピに横合いから飛来した槌が突き刺さり、吹き飛ばす。槌はそのまま勢いを落とさず飛び、傍らの壁にピッピごと突き刺さった。壁に罅が走る。

飛んできた方を振り向けば、投擲した格好のジハードと、駆け寄ってくるネメシスが見えた。

レッドの視線に気がついたか、ジハードが無表情ながらも、ぐと親指を立ててくる。

「ジハード……！」

レッドはキュンとした。この子まだ四歳だったのに……！

「ぴ、ピッピ！？ このお！」

決して突き刺さる形状ではない槌で壁に貼り付けになったピッピに、ミニスカ女が悲鳴を上げ、腰のボールに手を回す。

しかしネメシスが懷に手を入れ、ポジションを作成する方が速かった。

「させませんわ！」

ネメシスの技が発動し、ポケットの中で生成されたポジションが投擲される。

クルクルと回りながら飛んで行くのは瓶口に燃える布が突っ込まれた酒瓶である。

つまり火炎瓶だ。

「え、きゃ

」

反射的に身をかめるミニスカートに迫る火炎瓶。このままでは見たくも無いシーンが訪れてしまうとビビるレッドだったが、幸いそうはなかった。

礫にされたピッピが水の塊を吐き出し、火炎瓶を吹き飛ばしたからだ。

メッセージさんがその正体を教えてくれる。

【「ゆびをふる」による「みずでっぼう」です】

（指をふる……！）

「ピー……！」

ピッピが血を吐きながら、再度指を振ろうとする。しかし高速で迫ったジハードがその柔らかいボディに蹴りを叩きこんだ。後ろの壁を陥没させる勢いの蹴りにピッピは絶命したが、ピッピの最後の技は発動してしまった。

「ゆびをふる」による「じばく」である。

ネメシスと共に咄嗟に伏せるレッドの視界の中、爆音と共に激しい光が充満し、少女のジハードが冗談のように吹き飛んだ。

「じ、ジハードっ！」

破壊された岩塊が四方八方に飛び散って、レッドの体を叩く。傍らで呆然と立っていたためか頭に岩塊を受けたミニスカートの女の子が、糸が切れたように倒れ伏す。

レッドは飛礫が収まるのを待たずに立ち上がり、仰向けに横たわるジハードへと走り寄った。

ジハードは血まみれでレッドは泣きそうになったが、どうやらそれは返り血のようで、出血はしていなさそうだ。

とは言え衝撃で気絶しているようなので、レッドはそっとモンスターボールへと少女を仕舞った。

【お嬢のネメシスがLv7になりました。「ねんりき」を覚えました】

お嬢のネメシスが気合いを入れながらキリリとした顔で言う。

「ワタクシの解体の技術は残念ながら低いんですの。この女を上手くバラすことはできないかもしれません。でも……やってみますわ！」

「い、いいよ！ ホントやらなくていいからね？ そのごっついナイフは仕舞おうね」

「食糧の確保は重要ですが……」

「ご飯ならあるから……」

猟奇的なお嬢様を抑えつつ、レッドはその場を立ち去った。

ミニスカートの女の子は気絶しているだけだったのでそのまま放置して、カンテラだけ貰ってきている。

ネコババでカルマが下がるか一応メッセージさんに確認したが、

大丈夫とのこと。基準が今一わからない。

ちなみに壁が壊れたためか辺りには鉱石が散らばっており、ネメシスはそれをせっせと拾い集めていた。

彼女も一度拾った鉱石を、レッドに渡そうとしなかった。

先ほどの戦闘でネメシスのレベルは7になり、攻撃の技を覚えた。レッドのサポートもあるので、明りさえあればこの辺りの野生ポケモンはネメシス一人で対応可能になっている。

野生ポケモンは、ポケットモンスターからはイシツブテとズバットである。

イシツブテは特防が低いし、毒タイプのズバットなんか「ねんりき」もろに弱点である。ねんりきで雑巾絞りみたいになじり殺されるズバットは色々と見るに堪えない。

E101a由来のモンスターは、大きいムカデとか大ネズミとかが出てくる。殺さなくても勝手に逃げる時があるのだが、ネメシスは「ねんりき」で遠くまで攻撃できるようになった利点を存分に使い、レッドの近くに居ながら敵を殺しまくっていた。

お嬢のレベルがさらに一つ上がったところで、遅めの昼食である。家から持ってきたレジャーシートを広げて、ご飯を作る。

ネメシスが大活躍で、彼女が作った調理をぐったりしていたジハードも美味しそうに食べている。

ただ、納得いかないところもある。料理のでき方だ。

「も、もう一回見せて」

「いいですわよ。どうぞご覧あれ」

ネメシスが、ズバットのドロップした生肉を火炎瓶の火で炙る。肉は十秒ほどで肉汁を垂らし始め、火で蒸発した肉汁が美味しそうな匂いへと変わる。

ああ、良い匂いだなあとレッドが一瞬気を取られた瞬間、ネメシスの手に握られていた生肉は、皿の上に乗ったソテーへと変わっていた。

（また見逃した……！）

これを料理と言っているのか。その純白の皿と付け合わせのブロッコリーと香ばしいソースは一体どこから出てきたのか。

メッセージさん曰く【仕様です】とのことだが、これは料理人を馬鹿にしているんじゃないだろうか。

しかし考えても仕方がないので、これはお嬢が技「りょうり」で作っているからで、きっとクワガタさんはきちんと作っているはずだ、とレッドは納得することにした。

「この毒の刺激が癖になりますわ…」

ズバットの肉料理を食べ終えたネメシスが満足そうに息を吐く。

彼女の体から紫色の泡がホワホワと漂っているのは、毒状態ということなのだろう。

メッセージさん曰く、【毒はすぐに治りますよ】とのことなので、毒消しすら持ってきてないのだが、結構心配である。

ちら、と腰のボールを見ると、ジハードが寝返りを打つところだった。図鑑で確かめると2割ほどに減っていたHPは8割ほどに回復している。自然回復する世界でよかったとレッドは思う。

だが、ちょうどいい機会だしネメシスをもっと成長させるために、

もう少し入ってもらうことにした。

気づくと、ネメシスは既に毒から回復しているようだった。

その後モンスターを倒したりトレーナーを倒したりしつつ歩いていると、地下二階への階段を見つけた。ということは出口は結構近い。

お月見山洞窟は結構広く、さらに地下二階まである三層構造である。

アイテムも結構落ちていて、「きずぐすり」や袋に入ったペロペロキャンディー、丈夫そうな靴、果てには技マシンなんかも落ちている。

技マシンは草タイプの技だったので放置である。売っても安いらしいし。

鉱石もチラホラと落ちていて、中には純度の高そうな物もあった。売ったら高いのだろうか。

いや、それよりも鉱石を全て拾っているネメシスのポケットが張り裂けそうになっていることのほうが気になって仕方ない。

「……持とうか？」

「結・構ですッ！」

そこまで拒否しなくても良いのという勢いで断られ、微妙に凹みながら歩いていると、行く手にロケット団の服装の人が三人集まり、壁に向かって何かをしている。

おい、早く掘り出せ！ 時間が無いぞ！

結構硬いんだよ！

代われ！ 俺がやる！

ヒソヒソと話しながらつるはしを振るって何かを掘り出しているようだ。なんとなく不穏な物を感じて、レッドはカンテラの光を消す。

（もしかして）

レッドは思い出す。ポケモンにおいて、お月見山では化石を得られるイベントがあった筈だ。

それをロケット団が持っていこうとしているのだろうか……？

とりあえず、もう少し近づいてみて見ようと、ネメシスと共に足音を殺して近づいていると、彼らの前に割り込む者があった。

「その怪しい奴らめ！ お前らロケット団か！」「ここは採掘を禁じられておるぞ！」

瓶底メガネを着用した背の細い男と、七三分けの体格がいい男で、どちらも白衣を着用している。

「理科系男の誇りにかけて、盗掘者は連行する！」「大人しくするんだな、そうでなければ……」



二人は叫んだ。

「俺たちのでんきポケモンが黙って無いぞ！」

ロケット団たちは言った。

「あ、おれサンド持ってるわ」

「俺イシツブテ持ってる」

「「＼（＾o＾）／」」

ロケット団下っ端の電気タイプを無効化するモンスターで、フルボッコされて逃げて行った白衣の二人組を見ると、メッセージさんが囁いてきた。

【さあ前座は終わりましたよレッドさん！ ロケット団の化石盗掘を止めるのです！】

「で、出ていきにくいなあ……」

レッドは心の底から呟いたのだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1233y/>

---

Elona × ポケモン（改訂版）

2012年1月10日22時50分発行